橿原市埋蔵文化財調査報告　第２１冊

十 市 蔵 場 遺 跡

－工場増築工事に伴う発掘調査報告書－

2024 年 3 月

奈良県橿原市

序

ここに、十市蔵場遺跡の発掘調査報告書を『橿原市埋蔵文化財調査報告 第21冊　十市蔵場遺跡』として刊行します。本書は、奈良県橿原市十市町において橿原市が平成28年度から令和5年度の間に実施した発掘調査の成果をまとめたものです。これらの発掘調査は、株式会社ジェイテクト奈良工場の増築工事に伴って実施した調査です。

調査地一帯は、これまで周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲外でしたが、平成28～29年度に実施した試掘調査によって新たに遺跡が発見され、「十市蔵場遺跡」および「十市九ノ井田遺跡」という二つの遺跡として奈良県遺跡地図に登録されることとなりました。このうち、北側に位置する十市蔵場遺跡において発掘調査を実施しています。

十市蔵場遺跡の発掘調査では、古墳時代から奈良時代にかけての遺物が多く出土しています。発掘調査地点周辺の橿原市の北端部付近は、橿原市域においては遺跡の情報が比較的少ない地域でした。今回の調査は、橿原市の歴史のページを埋める貴重な成果を得ることとなったと言えます。

最後になりましたが、現地の発掘調査並びに本書の刊行にあたってご協力いただいた関係諸氏ならびに諸機関に厚く御礼申し上げると共に、本書が多くの方々に活用され、遺跡の重要性を周知する機縁となることを願います。

令和6年3月29日

橿原市長　亀田　忠彦

例　言

1　本書は、奈良県橿原市十市町において実施した試掘調査および本発掘調査の発掘調査報告書である。試掘調査の結果、十市蔵場（とおいちくらば）遺跡および十市九ノ井田（とおいちくのいだ）遺跡が新たに遺跡地図に登録され、十市蔵場遺跡において本発掘調査を実施している。

2　本書で報告を行う発掘調査は、株式会社ジェイテクト奈良工場より工場増築工事に伴って提出された遺跡有無確認踏査願および埋蔵文化財発掘届出書に基づき、奈良県文化財保存課の指導のもと、橿原市・橿原市教育委員会が実施した。遺物整理・報告作業は橿原市が行っている。

3　発掘調査及び整理・報告作業にかかる費用については、株式会社ジェイテクト奈良工場が負担された。記して感謝申し上げたい。

4　各調査の現地調査期間は以下のとおりである。

橿教委 2016－9・2017－1 次調査（試掘）：平成 29（2017）年 3 月 6 日 ～ 4 月 28 日

橿教委 2019－4・2020－1 次調査：令和 2（2020）年 3 月 23 日 ～ 4 月 30 日

橿教委 2021－6 次調査：令和 4（2022）年 3 月 14 日 ～ 3 月 28 日

橿　文 2023－2 次調査：令和 5（2023）年 6 月 1 日 ～ 8 月 25 日

なお、橿原市では埋蔵文化財行政を令和 3 年度までは教育委員会文化財課が担当していた。令和 4 年度からは同担当部署が市長部局へと移管となり魅力創造部 文化財保存活用課が担当しているため、下記 6 の体制も年度により異なる。

5　遺物整理・報告書作成期間は令和 5（2023）年 7 月～令和 6（2024）年 3 月である。

6　各年度の体制は以下のとおりである。

平成 28・29 年度：橿原市教育委員会　文化財課長 竹田正則 、課長補佐 濱口和弘、統括調整員 平岩欣太、主査 石坂泰士・杉山真由美。現地調査担当は石坂（1 ～ 4 区）・杉山（5 ～ 8 区）。

令和 2・3 年度：橿原市教育委員会　文化財課長 竹田正則 、課長補佐 露口真広・松井一晃、統括調整員 平岩欣太、主査 石坂泰士、技術員 上井佐妃。現地調査担当は石坂・上井。

令和 5 年度（発掘調査・遺物整理）：橿原市役所魅力創造部　文化財保存活用課長 露口真広、課長補佐 平岩欣太・松井一晃、係長 石坂泰士、技師 上井佐妃。現地調査担当は上井。整理作業担当は石坂・上井。

7　発掘調査及び整理作業を実施するにあたって、株式会社ジェイテクト奈良工場をはじめ、地元各位、奈良県文化財保存課、奈良県立橿原考古学研究所、田原本町教育委員会より多大な御協力を得た。記して感謝申し上げたい。

8　出土遺物および各種調査記録は、橿原市 魅力創造部 文化財保存活用課で保管している。

9　本書所収の写真は、現場調査写真のうち地上写真を橿原市調査担当者が、航空写真は㈲ワークが撮影を行った。遺物写真は株式会社地域文化財研究所が撮影を行った。

10　本書の執筆および編集作業は石坂・上井が担当した。文責はⅠ～Ⅳ・Ⅶ章が石坂、Ⅴ・Ⅵ章が上井である。

凡　　例

1　本書で示す方位は座標北を使用した。座標値は世界測地系（平面直角座標第Ⅵ系）に基づく。

2　写真図版に掲載している遺物の縮尺率は任意である。

3　遺構・遺物の図面縮尺は各図に示している。

4　土層名における色調は『新版標準土色帖 24 版』（小山正忠・竹原秀雄 編著、 日本色研事業株式会社 発行）を使用した。

5　遺構断面図の標高値はメートル表記である。小数点以下の記述が無い場合、小数点下の値は０である。標高値は東京湾平均海面（T.P.）からの値である。

6　遺物実測図の番号は、本書全体の通し番号で示している。図版の遺物番号もこれと一致している。

7　土器の実測図については、須恵器を断面黒塗りで、その他の土器は断面を白抜きで、それぞれ表現している。

目　次

序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ⅰ
例言・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ⅱ
凡例・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ⅲ
目次・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ⅳ
挿図目次・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ⅴ

第Ⅰ章　調査の経過
　第１節　調査と整理・報告に係る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　第２節　発掘調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境
　第１節　地理的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
　第２節　歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
第Ⅲ章　橿教委 2016−9・2017−1 次調査の成果
　第１節　調査の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
　第２節　各調査区の層序と遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
　第３節　出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
第Ⅳ章　橿教委 2019 − 4・2020 − 1 次調査の成果
　第１節　調査の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26
　第２節　基本層序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
　第３節　遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31
　第４節　出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36
第Ⅴ章　橿教委 2021 − 6 次調査の成果
　第１節　調査の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・51
　第２節　基本層序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・51
　第３節　遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・53
　第４節　出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・56
第Ⅵ章　橿文 2023 − 2 次調査の成果
　第１節　調査の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・57
　第２節　基本層序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・57
　第３節　遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・60
　第４節　出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・70
第Ⅶ章　総括
　第１節　調査周辺の遺跡の展開・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・87
　第２節　十市蔵場遺跡の調査成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・88
報告書抄録・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・90
図版

挿　図　目　次

図 1　発掘調査調査地点（S ＝ 1/4,000）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
図 2　調査地位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
図 3　調査地周辺の遺跡（S ＝ 1/15,000。格子目は藤原京）・・・・・・・・・・・・・ 9
図 4　試掘調査位置と遺跡登録範囲（S ＝ 1/1,500）・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
図 5　試掘調査 1 ～ 4 区平面図（S ＝ 1/400）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
図 6　試掘調査 5 ～ 8 区平面図（S ＝ 1/400）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
図 7　1 区調査区西壁・北壁土層断面図（S ＝ 1/100）・・・・・・・・・・・・・・・・16
図 8　3 区調査区西壁土層断面図（S ＝ 1/100）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
図 9　2 区調査区西壁土層断面図（S ＝ 1/100）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
図 10　4 区調査区西壁土層断面図（S ＝ 1/100）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
図 11　5 区調査区西壁土層断面図（S ＝ 1/100）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
図 12　6 区調査区東壁土層断面図（S ＝ 1/100）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
図 13　7 区調査区東壁土層断面図（S ＝ 1/100）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
図 14　8 区調査区東壁土層断面図（S ＝ 1/100）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
図 15　2 区出土遺物（S ＝ 1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24
図 16　5・7 区出土遺物（S ＝ 1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
図 17　2019 － 4・2020 － 1 次調査　調査区南壁土層断面図①（S ＝ 1/50）・・・・・・28
図 18　2019 － 4・2020 － 1 次調査　調査区南壁土層断面図②（S ＝ 1/50）・・・・・・29
図 19　2019 － 4・2020 － 1 次調査　調査区南壁土層断面図③（S ＝ 1/50）・・・・・・30
図 20　2019 － 4・2020 － 1 次調査　上層遺構平面図（S ＝ 1/300）・・・・・・・・・31
図 21　2019 － 4・2020 － 1 次調査　遺構平面図（S ＝ 1/300）・・・・・・・・・・・33
図 22　2019 － 4・2020 － 1 次調査　遺構断面図①（S ＝ 1/40）・・・・・・・・・・・34
図 23　2019 － 4・2020 － 1 次調査　遺構断面図②（S ＝ 1/40）・・・・・・・・・・・35
図 24　2019 － 4・2020 － 1 次調査　耕作溝群出土遺物（S ＝ 1/4）・・・・・・・・・36
図 25　2019 － 4・2020 － 1 次調査　1101SK 出土遺物（S ＝ 1/4・1/2）・・・・・・・37
図 26　2019 － 4・2020 － 1 次調査　1102SX 出土遺物①（S ＝ 1/4）・・・・・・・・・39
図 27　2019 － 4・2020 － 1 次調査　1102SX 出土遺物②（S ＝ 1/2）・・・・・・・・・39
図 28　2019 － 4・2020 － 1 次調査　1104SD 出土遺物（S ＝ 1/4）・・・・・・・・・・40
図 29　2019 － 4・2020 － 1 次調査　1118SP 出土遺物（S ＝ 1/4）・・・・・・・・・・40
図 30　2019 － 4・2020 － 1 次調査　1125SD 出土遺物①（S ＝ 1/4）・・・・・・・・・41
図 31　2019 － 4・2020 － 1 次調査　1125SD 出土遺物②（S ＝ 1/4）・・・・・・・・・42
図 32　2019 － 4・2020 － 1 次調査　1126SD 出土遺物（S ＝ 1/4）・・・・・・・・・・42
図 33　2019 － 4・2020 － 1 次調査　1127SD 出土遺物（S ＝ 1/4）・・・・・・・・・・43
図 34　2019 － 4・2020 － 1 次調査　1129SD 出土遺物（S ＝ 1/4）・・・・・・・・・・43
図 35　2019 － 4・2020 － 1 次調査　1133SD 出土遺物（S ＝ 1/4）・・・・・・・・・・44
図 36　2019 － 4・2020 － 1 次調査　1134SD 出土遺物①（S ＝ 1/4）・・・・・・・・・45
図 37　2019 － 4・2020 － 1 次調査　1134SD 出土遺物②（S ＝ 1/4）・・・・・・・・・46
図 38　2019 － 4・2020 － 1 次調査　1138SD 出土遺物（S ＝ 1/4）・・・・・・・・・・47
図 39　2019 － 4・2020 － 1 次調査　1145SD 出土遺物①（S ＝ 1/4）・・・・・・・・・48

図40　2019－4・2020－1次調査　1145SD出土遺物②（S＝1/4）・・・・・・・・・49
図41　2019－4・2020－1次調査　Ⅰ～Ⅲ層出土遺物（S＝1/4）・・・・・・・・・50
図42　調査区北壁土層断面図（S＝1/50）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・52
図43　調査区西壁土層断面図（S＝1/50）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・53
図44　上層・中層・下層遺構平面図（S＝1/100）・・・・・・・・・・・・・・・54
図45　15SP・16SP・17SP平面・断面図（S＝1/50）・・・・・・・・・・・・・・55
図46　2001－6次調査出土遺物（S＝1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・56
図47　調査区東壁土層断面図（S＝1/50）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・58
図48　調査区東壁土層断面図（S＝1/50）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・59
図49　調査区南西壁土層断面図（S＝1/50）・・・・・・・・・・・・・・・・・・60
図50　2023―2次調査　上層遺構平面図（S＝1/400）・・・・・・・・・・・・・61
図51　2023―2次調査　下層遺構平面図（S＝1/400）・・・・・・・・・・・・・62
図52　2023―2次調査　SD01平面図（S＝1/400）・・・・・・・・・・・・・・・63
図53　NR20土層断面図（S＝1/50）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・64
図54　調査区中央畦土層断面図①（S＝1/50）・・・・・・・・・・・・・・・・・64
図55　調査区中央畦土層断面図②（S＝1/50）・・・・・・・・・・・・・・・・・65
図56　SD21・SP22平面・断面図（S＝1/40）・・・・・・・・・・・・・・・・・66
図57　SD10～SD13・SD32平面・断面図（S＝1/50）・・・・・・・・・・・・・・67
図58　SD26平面・断面図（S＝1/40）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・68
図59　SD08平面・断面図（S＝1/50）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・68
図60　SK05平面・断面図（S＝1/50）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・68
図61　SD25平面・断面図（S＝1/50）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・69
図62　SP06・SP07平面・断面図（S＝1/50）・・・・・・・・・・・・・・・・・・69
図63　SP09平面・断面図（S＝1/50）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・69
図64　SP03・SP04平面・断面図（S＝1/50）・・・・・・・・・・・・・・・・・・69
図65　素掘溝・SD01出土遺物（S＝1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・70
図66　NR20上層出土遺物（S＝1/2・1/4・1/6）・・・・・・・・・・・・・・・・71
図67　NR20下層出土遺物（S＝1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・73
図68　NR20下層出土遺物（S＝1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・74
図69　NR20下層出土遺物（S＝1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・75
図70　NR20下層出土遺物（S＝1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・76
図71　NR20下層出土遺物（S＝1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・77
図72　NR20下層出土遺物（S＝1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・78
図73　NR20下層出土遺物（S＝1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・79
図74　NR20下層出土遺物（S＝1/4・1/6）・・・・・・・・・・・・・・・・・・80
図75　NR20下層出土遺物（S＝1/2・1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・81
図76　NR20下層出土遺物（S＝1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・82
図77　NR20北側・中央畔出土遺物（S＝1/4・1/6）・・・・・・・・・・・・・・83
図78　NR24出土遺物（S＝1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・84
図79　NR24出土遺物（S＝1/4）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・85
図80　SD30・SD25・SP09・重機掘削時等出土遺物（S＝1/4）・・・・・・・・・86
図81　十市蔵場遺跡の古墳時代～奈良時代遺構（S＝1/500）・・・・・・・・・・88

第Ⅰ章　調査の経過

第１節　調査と整理・報告に係る経緯

本書は、株式会社ジェイテクト奈良工場の増築工事に伴って実施した一連の発掘調査についての報告書である。この事業においては試掘調査１件、本発掘調査３件の計４件の発掘調査を実施している（調査地点は図 1）。以下に記す各現地対応および整理作業は、橿原市と株式会社ジェイテクト奈良工場との協議のもとで実施されている。

これらの調査は、平成 29（2017）年２月３日付けで株式会社ジェイテクトより提出された「遺跡有無確認踏査願」に端を発する。この時点での計画内容は、既存の工場敷地東隣の水田一帯（敷地面積約 27,800 ㎡）において大規模な造成工事を行い、駐車場整備および将来的な工場建物用地の準備をするものであった。事業地は周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲外であり、近隣においても埋蔵文化財の発掘調査歴が無い状況であった。この申請に対して、まず同年２月 16 日に橿原市教育委員会が現地踏査を実施したが、現地表面の観察だけでは遺構・遺物の存在を十分に確認することができなかった。そのため、対象地全体に広がる形で試掘調査を実施することとなった（図１：試掘調査１～８区）。試掘調査は橿教委 2016－9・2017－1 次調査として平成 29（2017）年３月６日 ～４月 28 日に実施した。その結果、調査地の北東部および南部において遺構・遺物が存在することが新たに明らかとなった。この段階での造成工事については、これらの遺構の保護が可能であることも確認している。

試掘調査の後、平成 29 年度に遺跡の異動手続きを行い、上記２地点が平成 30 年１月 22 日付けで、それぞれ新規遺跡として奈良県遺跡地図に登録された。遺跡の名称は各地点の小字名から、調査地北東部を『十市蔵場遺跡』、調査地南部を『十市九ノ井田遺跡』とした。十市蔵場遺跡は古墳時代中期から中世にかけての遺物散布地、十市九ノ井田遺跡は古墳時代前期および中世の遺物散布地として登録されている。両遺跡の範囲は、工場計画地内において当該時期の遺構が確認できた範囲である。

その後、令和２（2020）年２月６日付けで株式会社ジェイテクトより「埋蔵文化財発掘届出書」が提出された。工事内容は、工場用地造成に先立ち工場用地内を流れる十市川の付替工事および道路造成である。十市川の新設区間にあたる十市蔵場遺跡の北辺部分については遺構の保護ができないことから、橿教委 2019－4・2020－1 次調査として令和２（2020）年３月 23 日 ～４月 30 日に記録保存を目的とした発掘調査を実施した。

この調査と並行して令和４(2022)年３月３日付けで提出された「埋蔵文化財発掘届出書」の内容は、工場建設予定地としての造成工事である。防火水槽の埋設地点のうち、十市蔵場遺跡の範囲に含まれる地点について、橿教委 2021－6 次調査として令和４（2022）年３月 14 日～３月 28 日に記録保存の発掘調査を実施した。

令和５（2023）年３月 16 日付けで提出された「埋蔵文化財発掘届出書」は工場建物建設についての届出であり、一連の工場増築事業に関する届出としてはこれで区切りとなる。十市蔵場遺跡の範囲内にあたる工場建物北東部分において、橿文 2023－2 次調査として令和５（2023）年６月 1 日～８月 25 日に記録保存の発掘調査を実施した。

平成29年から令和5年に実施した4件の発掘調査成果について、令和5（2023）年7月～令和6（2024）年3月の期間で、整理作業および報告書刊行作業を橿原市で行っている。整理作業および報告書刊行にかかる費用は株式会社ジェイテクト奈良工場が負担している。

橿原市では調査年度を西暦で表し、その年度内に行われた発掘調査名称を年度－調査次数の形で示している。本書で報告を行う各調査名称は先に述べたとおりであり、調査記録や出土遺物にはこの番号を記して整理・保管している。なお、文化財担当部局の移管に伴い、令和4年度調査から発掘調査名称の頭の文字を「橿教委」から「橿文」に変更している。

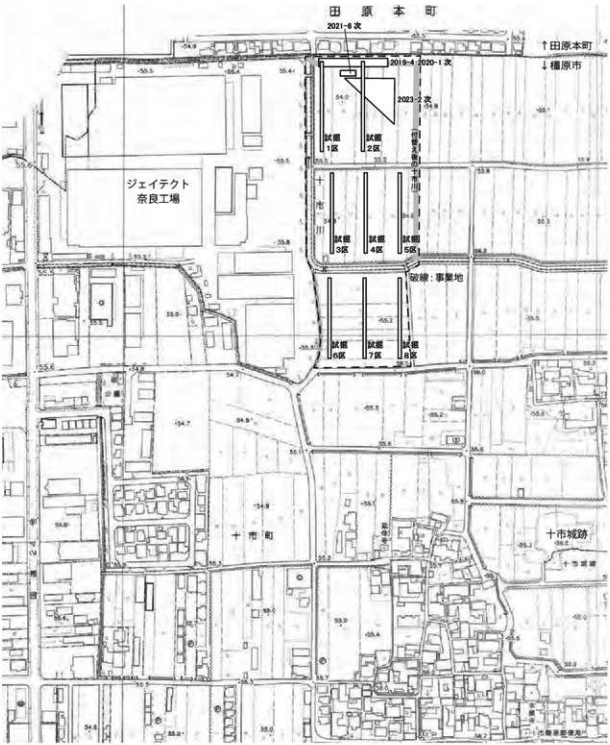


図1　発掘調査調査地点（S＝1/4,000）

第２節　発掘調査の経過

各発掘調査の日々の記録は、以下の調査日誌抄録に掲げる。

○ 椛教委 2016－9 次（試掘 1～4 区）
平成 29（2017）年３月６日（月）
調査開始。北西端に位置する１区から重機掘削開始。重機掘削は１区の約４割が終了。現地表面（水田面）－約 0.7m の濃褐色土が遺構ベース層。東西・南北方向の素掘り耕作溝あり。１区北端には耕作溝より古い溝あり。
３月７日（火）
１区、重機掘削終了。
３月８日（水）
１区、調査区西辺沿いに排水溝掘削。
３月９日（木）
２区、重機掘削。北半に古代の遺物あり。１区、検出写真に向けての作業。
３月 10 日（金）
３区、重機掘削、６割終了。１区、遺構検出写真撮影。耕作溝以外には溝・土壙・ピットがある。耕作溝以外で時期が分かる遺構は現時点では無し。
３月 13 日（月）
３区、重機掘削、ほぼ終了。２区、排水溝掘削。１区、メッシュ杭打設。調査区壁面断面図作成。
３月 14 日（火）
３区、重機掘削終了。４区、重機掘削開始。２区、排水溝掘削。１区、図面記録作業。
３月 15 日（水）
１区、図面記録作業。２区、清掃作業。４区、重機掘削、終了。
３月 16 日（木）
２・３区、遺構検出写真撮影。４区、排水溝掘削。
３月 17 日（金）
４区、遺構検出写真撮影。遺構は東西南北の耕作溝のみ。耕作溝の状況は３区とほぼ同様。１～３区、図面記録作業。
３月 21 日（火）
雨天の為、作業なし。
３月 22 日（水）
１区、排水溝の掘り下げ。ベース層から遺物の出土無し。２・４区記録作業。
３月 23 日（木）
２区、排水溝の掘り下げ。出土遺物から、2001SD は古墳時代後期と考えられる。2002 ～ 2004SD は古代の遺構か。２・４区、記録作業。
３月 24 日（金）
２区、排水溝掘り下げ。2002 ～ 2004SD は、一連の大きな落ち込みの堆積差（流路か？）と判明。古代の遺物出土。２・４区、記録作業。
３月 27 日（月）
１区、重機埋め戻し、終了。２・４区、記録作業。３区、排水溝掘り下げ。ベース層からは遺物出土せず。
３月 28 日（火）
２区、重機埋め戻し、終了。３区、記録作業、終了。４区、排水溝、断割り。ベース層は砂層が続く。遺物出土せず。
３月 29 日（水）
３区、重機埋め戻し、終了。４区、下層断割り、記録作業。ベースの砂層から遺物の出土無し。
３月 31 日（金）
４区、記録作業。４区、重機埋め戻し、終了。１～４区、全作業終了。

○ 椛教委 2017－1 次（試掘５～８区）
４月５日（水）
５区、重機掘削。調査区壁面沿いに人力で排水溝掘削。耕作溝を検出。
４月６日（木）
６区、重機掘削。排水溝掘削を実施。
４月７日（金）
雨天により現地調査を中止。
４月 10 日（月）
７区、重機掘削。排水溝掘削を実施。耕作溝より古い遺構（溝か）が存在する。
４月 11 日（火）
雨天により現地調査を中止。
４月 12 日（水）
６区・７区、重機掘削。
４月 13 日（木）
８区、重機掘削。排水溝掘削を実施。
４月 14 日（金）
８区、重機掘削。。７・８区、排水溝掘削。
４月 17 日（月）
６区、排水溝掘削。５・６区、メッシュ杭打設。雨天により午前のみで作業を中止。
４月 18 日（火）
５区、排水溝掘削。調査区西壁、平面の精査。遺構検出、土層の観察を実施。
４月 19 日（水）
５区、遺構検出、調査区土層断面の観察を実施。遺構検出状況写真・調査区土層断面写真撮影。遺構平面図・土層断面図作成。６区、排水溝掘削、調査区平面図の精査を実施。
４月 20 日（木）
５区、遺構平面図・土層断面図作成。６区、遺構検出、調査区土層断面の観察を実施。遺構検出状況写真・調査区土層断面写真撮影。７区、排水溝の掘削を実施。
４月 21 日（金）
６区、遺構平面図・土層断面図作成。７区、遺構検出、調査区土層断面の観察を実施。８区、排水溝掘削。
４月 24 日（月）
６・７区、調査区土層断面図作成。
４月 25 日（火）
７区、遺構検出状況写真撮影。遺構平面図・土層断面図作成。８区、遺構検出作業。５区、埋め戻し。
４月 26 日（水）
８区、平面精査、遺構検出作業。６区中央で、排水

溝掘り下げ。耕作溝より古い東西方向溝の土層断面記録後、重機で埋め戻し。
4月27日（木）
7区北端で検出した落ち込み遺構の調査を実施（土層断面確認を目的とした調査区北端の拡張と断ち割り）。遺構表面に露出している土器を取り上げていた所、銅鏡と思われる遺物が出土した。8区、遺構平面・土層平面図の作成。
4月28日（金）
8区、遺構の再検出、精査を実施。遺構検出状況写真撮影。6・7区に存在する東西溝の延長部分を8区で確認作業を実施したが、溝は存在しなかった。7区、埋め戻し開始。
5月1日（月）
7区北端の落ち込み遺構の記録作業、調査区北壁土層断面図を作成。7・8区、重機埋め戻し終了。現地調査完了。

○ 橿教委 2019－4・2020－1次
令和2（2020）年3月23日（月）
調査区設定。重機掘削開始。調査地は水田面＋0.8mほどの盛土造成が行われており、その上半分に地盤改良を施している。重機で地盤改良部分の縁切り作業を実施。
3月24日（火）
調査区西側から順に遺構面まで重機掘削。約2割終了。調査区四周に排水溝を人力で掘削。
3月25日（水）
重機掘削、遺構面検出作業。約4割終了。耕作溝は全体に有り、南北は深い。東西に新しく、浅い傾向。
3月26日（木）
重機掘削、遺構面検出作業。約5割終了。調査区中央部一帯はベースが砂層となる。その砂層中にも遺物（古代か）が含まれる。
3月27日（金）
雨天のため、現場作業なし。
3月30日（月）
重機掘削。遺構面検出作業。
3月31日（火）
重機掘削。遺構面検出作業。1101SK、調査区南壁排水溝内での出土土師器壺の撮影。同遺構から小型の管玉（碧玉）1点出土。試掘2区北端部を検出。
4月1日（水）
雨天のため、現場作業なし。
4月2日（木）
重機掘削。調査区内の作業終了。ベルコン設置作業。
4月3日（金）
調査区東端から上層遺構（素掘り耕作群）の検出、掘り下げ開始。耕作溝内の遺物はわずかに瓦器辺を含むが、古墳～古代の須恵器・土師器が多い。調査区南壁中央部のシルト層部分が崩落。コンパネ養生。重機にて排土置き場の整理。
4月6日（月）
調査区東部、耕作溝の掘り下げ。メッシュ杭打設作業。
4月7日（火）
耕作溝の掘り下げ。上層遺構（中世以降の耕作溝群）平面図作成。メッシュ杭打設作業終了。
4月8日（水）
耕作溝掘り下げ。約8割終了。調査区東端、土器溜まり1102SX出土状況写真撮影。
4月9日（木）
耕作溝掘り下げ、終了。西半部の南北溝中から準完形の瓦器椀（13世紀か）1点出土。
4月10日（金）
調査区西部、遺構検出写真撮影。溝・土杭・ピットがある。
4月13日（月）
雨天のため、現場作業なし。
4月14日（火）
遺構検出写真（上層耕作溝完掘）に向けての清掃。14時から撮影。調査区中央部には、時期が異なる複数の溝・流路あり（1125・1126SDなど）。人為的に埋められている溝も含む。
4月15日（水）
遺構検出全景写真撮影、終了。遺構の掘り下げ開始。1125SD、1129SD、1128SD完掘。いずれも古代の遺構と考えられる。調査区中央部付近は、古墳時代以前の河道上に、古墳時代（後期か）遺構→古墳後期～古代の流路→奈良時代の遺構の順で形成されていると考えられる。1125SD北端付近から、完形の須恵器横瓶1点出土。
4月16日（木）
1126SD掘り下げ、完掘。古墳時代後期の溝、人為的に埋められている。1133・1134SD掘り下げ、古墳後期以降～8C以前の河道か。古代の土器を含む。動物骨（脚骨）出土あり。同遺構の掘り下げは、南半部の上面－0.3mの深さでとどめる。これは、調査期間の制限により、他の遺構調査に注力するための措置である。
4月17日（金）
調査区西半部、SD・SK・SPの調査。1107SDは、幅1～1.3m、深さ約0.8mの溝。6世紀か。埋土上半は、人為的な埋め土であり、周辺のベース土と同様の褐色土・黄色粘土ブロックを多く含む。調査区南壁、東側3割の土層断面写真撮影。
4月20日（月）
調査区西半、1104SD～1133SD間のエリア、遺構検出作業。幅4mの溝（1138SD）、ほか土杭数基あり。いずれも古墳時代の遺構か。検出写真撮影。図面記録作業。
4月21日（火）
1133SD・1138SDおよびその西側の土杭群の調査。いずれも6世紀の遺構か。溝からは土器が出土。1138SDからは動物骨の小片もあり。1133SD・1138SD間で新たに1143SK（SEか）を検出。直径約1.5mの円形、深さ約0.5mの井戸と思われる。埋土上層は1133SD上層と共通している。
4月22日（水）
1144SX、掘り下げ。古墳時代後期の落ち込みか。遺物量は非常に少ない。完掘全景写真に向けての清掃。各種記録作業。
4月23日（木）
完掘写真撮影。ただし、上層遺構記録の都合上、1145SD・1127SDは未掘状態での撮影。終了後、同遺構の調査準備を実施。

4 月 24 日（金）
1145SD･1127SD の調査。1145SD は、深さ約 1 m。6C 後半の土器出土が多い。特に須恵器が多い傾向あり。1145SD 北半の下層シルト層から木製下駄 1 点出土。1127SD も同時期の溝だが 1145SD より遺物量は少ない。
4 月 27 日（月）
1145SD・1127SD 完掘。南側土層断面も含めた完掘写真撮影。土層断面図作成。1102SX 完掘。
4 月 28 日（火）
重機埋め戻し開始。1134SD・1145SD・1131SD 等の土層断面畦や未掘部分の堀り下げ。1101SK は、調査区南壁に土器片が多く残るため、大走部分も掘り下げて検出を実施。土器出土状況写真撮影。調査作業は終了。残るは埋め戻しと撤収作業となる。
4 月 29 日（水）
重機埋め戻し。撤収作業。祝日であるが、(株) ジェイテクトと協議の上で作業実施。
4 月 30 日（木）
埋め戻し終了。撤収作業。全作業終了。

○ 橿教委 2021－6 次
令和 4（2022）年 3 月 14 日（月）
重機掘削。中世以降の耕作溝を検出。南北方向が主で東西方向は一条のみか。
3 月 15 日（火）
上層遺構（中世耕作溝）検出写真撮影。耕作溝の掘り下げ。
3 月 16 日（水）
中世耕作溝掘り下げ。東西方向の溝が古い。
3 月 17 日（木）
中世耕作溝完掘、下層遺構検出作業。15 ～ 17SP は埋土が共通するピット。深さは 5cm 程度。
3 月 18 日（金）
雨天のため、作業中止。
3 月 22 日（火）
雨天のため、作業中止。
3 月 23 日（水）
上層完掘・下層検出写真撮影。018SD 掘削開始。018SD 上層（極粗砂層）は、遺物数点のみ出土。
3 月 24 日（木）
018SD 掘削、北壁写真撮影・断面図作成。
3 月 25 日（金）
018SD 掘削。018SD 西肩部分で断ち割り。完掘写真撮影。調査区北壁・西壁断面図作成。
3 月 28 日（月）
重機埋め戻し終了。調査すべて終了。

○ 橿文 2023－2 次
令和 5（2023）年 6 月 1 日（木）
調査区設定。調査準備作業。
6 月 5 日（月）
雨天により、作業中止。
6 月 6 日（火）
重機掘削開始。雨天のため、遺構面までの掘削を避け、造成土の除去を進める。
6 月 7 日（水）
重機掘削。調査区壁面沿いに排水溝を人力で掘削。
6 月 8 日（木）
重機掘削。排水溝掘削。調査区北東隅、耕作溝ベース層の砂層に 6 世紀頃の土器が多く含まれる。同地点の現代暗渠内から 6 世紀後半の須恵器坏身完形 1 点が出土。調査区北側および東側に基準点打設。
6 月 9 日（金）
重機掘削。
6 月 12 日（月）
雨天により、作業中止。
6 月 13 日（火）
重機掘削。
6 月 14 日（水）
重機掘削。排水溝掘削。調査区壁面土層断面の検討。試掘トレンチ埋戻し土を人力で除去。
6 月 15 日（木）
重機掘削。排水溝掘削。
6 月 16 日（金）
重機掘削。遺構面面精査。メッシュ杭打設。
6 月 19 日（月）
調査区西半上層遺構検出写真撮影。平面略図(西半)作成。
6 月 20 日（火）
調査区東半上層遺構検出写真。
6 月 21 日（水）
耕作溝掘削。ベルコン設置作業。耕作溝から 13 世紀後半の瓦器碗出土。
6 月 22 日（木）
雨天により、作業中止。
6 月 23 日（金）
耕作溝掘削。飛鳥Ⅰ・Ⅱの須恵器坏蓋出土。
6 月 26 日（月）
耕作溝掘削。午後、雨天により作業中止。
6 月 27 日（火）
耕作溝掘削。
6 月 28 日（水）
耕作溝掘削。
6 月 29 日（木）
耕作溝掘削。
6 月 30 日（金）
雨天により、作業中止。
7 月 3 日（月）
上層遺構完掘。下層遺構の検出写真撮影に向けて清掃。
7 月 4 日（火）
清掃後、下層遺構検出写真撮影。
7 月 5 日（水）
下層遺構検出全景写真撮影。下層遺構のデジタル測量作業実施。雨天により 14 時半で作業終了。
7 月 6 日（木）
調査区北・東側排水溝の掘り下げ。
7 月 7 日（金）
遺構検出作業。調査区北東隅の遺物出土範囲を把握。
7 月 10 日（月）
遺構の断面・平面図面作成。前日までの雨天により調査区東側壁面の一部が崩落、壁面整形作業。雨天により 15 時で作業中止。

7月11日（火）
遺構検出作業。調査区東壁土層図作成。調査区西側の遺構掘削。
7月12日（水）
遺構検出写真撮影のための清掃作業。調査区北東部の壁面で数条の溝を新たに確認。
7月13日（木）
遺構検出全景写真。SP18半裁。調査区東壁土層断面写真撮影。
7月14日（金）
SX14の掘削。SD13～10の掘削・断面記録。
7月18日（火）
SD10～13平面・断面図作成。調査区中央畦の断ち割り。
7月19日（水）
調査区北壁土層断面図作成。SD20掘削。調査区南側で流路検出。SD20から馬歯・骨出土。
7月20日（木）
調査区北側土層断面図作成。調査区中央畦の断ち割り。SD20Ⅰ・Ⅱ層掘削。SD20Ⅱ層は比較的遺物が少ない。Ⅰ層から馬歯・骨が複数出土。
7月21日（金）
SD20掘削（主にⅢ層）。馬骨・歯、7世紀前半の須恵器坏蓋等出土。
7月24日（月）
SD20掘削。Ⅳ層中からも馬歯が出土する。SD20の南端にⅢ層は存在しない。
7月25日（火）
SD20掘削・畦東側（Ⅳ・Ⅴ層）、北側（Ⅱ層）南側Ⅴ層直下でSD20と同方向の溝状の落ちを確認。
7月26日（水）
SD20の畦以南完掘。東壁・畦の断面写真撮影。SD20北東側テラス部分で溝（SD21）、ピット（SP22）を検出。SP23掘削。
7月27日（木）
SD20断ち割り、東壁土層断面、SD21・SP22断面図作成。SD24検出、南端から掘削開始。土師器高坏脚、須恵器等が出土。
7月28日（金）
SD24Ⅰ層掘削、土師器、微量の骨が出土。SD21・SP22完掘。
7月31日（月）
SD24Ⅰ・Ⅱ層掘削、南端断ち割り。
8月1日（火）
SD20畦北側Ⅲ層掘削。調査区中央畦中央部分断ち割り掘削。
8月2日（水）
SD24を重機で掘削。少量の須恵器等が出土したが遺物量は少ない。SD20掘削。SD24とSD20は北側で合流か。
8月3日（木）
SD20北半Ⅳ層掘削。SD24掘削、中央畦南側は完掘。下駄、馬骨出土。調査区中央畦断面図作成。
8月4日（金）
SD20・24掘削。調査区中央畦断面図作成。
8月7日（月）
SD24重機掘削。
8月8日（火）
SD24重機掘削。SD20北端（粗砂層）掘削。SD20遺物出土状況写真撮影。調査区北側畦断面図。SD20北端はシルト層を残し、粗砂層のみ掘削。
8月9日（水）
SD20・SD24合流点掘削。遺物出土状況写真撮影。遺物出土状況平面図作成。
8月10日（木）
SD20掘削。畦断面写真撮影。SX25検出、掘削。午後、接近中の台風対策養生作業。
8月17日（木）
台風により、調査区北側畦の中央部分、調査区北・東壁一部が崩落。復旧作業。図面補足作業。
8月18日（金）
完掘写真に向けた清掃作業。
8月21日（月）
完掘写真に向けた清掃作業。
8月22日（火）
完掘写真に向けた清掃作業。
8月23日（水）
SD26・SD27半裁。完掘写真撮影。空測・空撮を実施。
8月24日（木）
補足調査。SD26・27図面作成。調査区中央畦・北側畦を掘り下げ。SD30掘削。撤収作業。
8月25日（金）
補足調査。調査区北側畦土層断面記録。調査区北側畦掘り下げ。SD20の調査区北側畦より北側を掘り下げ。撤収作業。当初の協議通り現地は埋め戻しを行わずに引き渡す。

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

橿原市は奈良盆地の南部に位置し、北は磯城郡田原本町・北葛城郡広陵町、東は桜井市、南は高市郡明日香村・同高取町、南西は御所市、西は大和高田市に接している。十市蔵場遺跡・十市九ノ井田遺跡が所在する橿原市十市町は、橿原市域の北端部に位置する。今回の調査地のすぐ北隣は磯城郡田原本町域である。

橿原市の南～南東部には龍門山地から派生する丘陵地が広がっており、北に向かって緩やかに下り、その北には沖積地が広がっている。調査地はその沖積地に位置している。調査地から南に約 2㎞の地点には名勝大和三山・耳成山が所在する。

調査地周辺の標高は、盆地の中部に向かって、おおむね南から北に向かって緩やかに低くなる。調査地周辺における現在の水田面の標高は、約 54～55m前後である。

調査地から南に約 600 mの距離には寺川が、北に約 400 mの距離には かがり川が、いずれも西流している。寺川・かがり川は調査地から西で米川と合流し、流れをほぼ真北に変える。調査地一帯は現在、奈良盆地の主要河川に数えられるこれらの河川の間に広がる平地となっている。寺川の流路は過去に大規模な付替が行われていることが地割の乱れや絵図の記録等で確認できる（詳細は次節）。

調査地一帯は中世から存続していると考えられる十市集落（十市城跡）の北側に広がる耕作地帯であり、今回の調査地も調査の直前まで水田として利用されていた土地である。調査地周辺は、橿原市域においては比較的田畑が多く残る地域であるが、十市集落周辺を中心に少しずつ宅地が増加しており、かつての景観は徐々に変化しつつある。

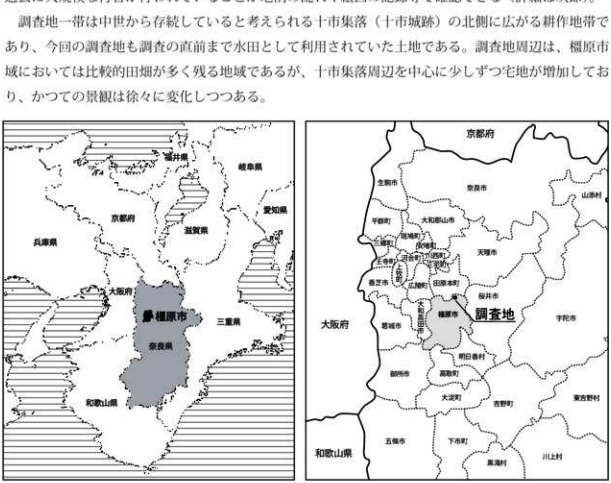


図２　調査地位置図

第２節　歴史的環境

橿原市の北辺部一帯は、藤原京の範囲内や京奈和自動車道沿線などにおいて発掘調査が多数実施されている市内の他の地域と比較して、発掘調査例が少ない地域である。十市城跡や十市池遺跡などの埋蔵文化財包蔵地の存在は知られているが、小規模な発掘調査が行われている程度である。かがり川を挟んで北側の磯城郡田原本町の南辺部一帯においても同様の状況であり、今後の調査例の増加が待たれる地域と言える。一方で、城郭跡や寺社などの文化財も存在している。以下に、これらの情報をもとに調査地の所在する十市町周辺の歴史について述べる。

十市町周辺において遺構・遺物の存在が明確になり始める時期は、弥生時代終末期～古墳時代初頭である。これより古い弥生時代の遺物は、今回の調査地や十市池遺跡において後の時代の遺構に混ざる形で少量ながら出土している。調査地の東方に位置する十市池遺跡（調査時は味間遺跡）、十市池の東側では農道整備工事に伴う発掘調査で庄内式期の溝が確認されている。十市から南方、寺川より南に目を向けると弁天塚古墳や棗山古墳、栗塚古墳、忍坂古墳といった古墳時代初頭～前期の古墳が多く存在していたことが知られている。橿原市域で最も古い段階の古墳が築かれた地域として重要である。特に弁天塚古墳は全長約 60 mの帆立貝形古墳で、特殊器台・特殊壺の出土で注目される。これらの古墳の大部分は、現在すでに地上から姿を消してしまっている。十市池から北東の一帯においても、かつては小規模な古墳が存在したことが報告されている（古墳の時期は不明）。また、十市町の西方、橿原市立橿原中学校の周辺においても古墳時代前期と考えられる消滅古墳の存在が知られている。奈良盆地の平野部における古墳築造活動を示す地域として今後さらなる情報が増えることが期待される地域と言える。その他、十市池遺跡では古墳時代中期～後期の土器の出土が少量している。

古代には日本初の本格的都城である藤原京が形成される。調査地は藤原京の北限（条坊呼称では北六条大路）から北に約 1 ㎞の距離に位置し、その間には寺川が流れる。藤原京の主要道路でもある下ツ道（西四坊大路）は奈良盆地を南北に縦断する古代官道であり、北では平城京の朱雀大路に至る。

下ツ道（後の中街道）は古代以降も奈良盆地の南北を繋ぐ主要街道として在り続ける。調査地は下ツ道まで約 0.4 ㎞の地点に位置している。寺川による水運と合わせて、後に十市氏の拠点がこの地に置かれる一因であったと考えられる。

調査地の南方には現在の十市町集落が存在し、その東端部には十市御縣坐神社が鎮座している。十市御縣坐神社の創建年代は不明だが、延喜式に記載されている式内社であり、奈良時代以前から続く古社である。天平２（730）年の正倉院文書の「大倭国正税帳」には十市御縣坐神社の祭の費用に地元からの租税の一部を充てた記録がある。「十市」の名が、この時既に存在していたことも確認できる記録である。

平安時代については、平安時代の作である木造地蔵菩薩立像・木造天部立像・木造大日如来坐像が十市町の正覚寺に伝わる。いずれも奈良県指定有形文化財（彫刻）である。三躯の仏像は近年、奈良国立博物館への寄託と修理を経て、令和４（2022）年から再び正覚寺で安置されている。

平安時代末頃～鎌倉時代には、調査地周辺の各所で遺構・遺物の存在が確認されるようになる。かがり川を挟んで北に所在する味間西遺跡では、平安時代末の屋敷地もしくは寺院の区画溝と考えられる大溝が確認されており、瓦器、土師器に加えて龍泉窯の青磁が出土している。南方の杉松田遺跡や

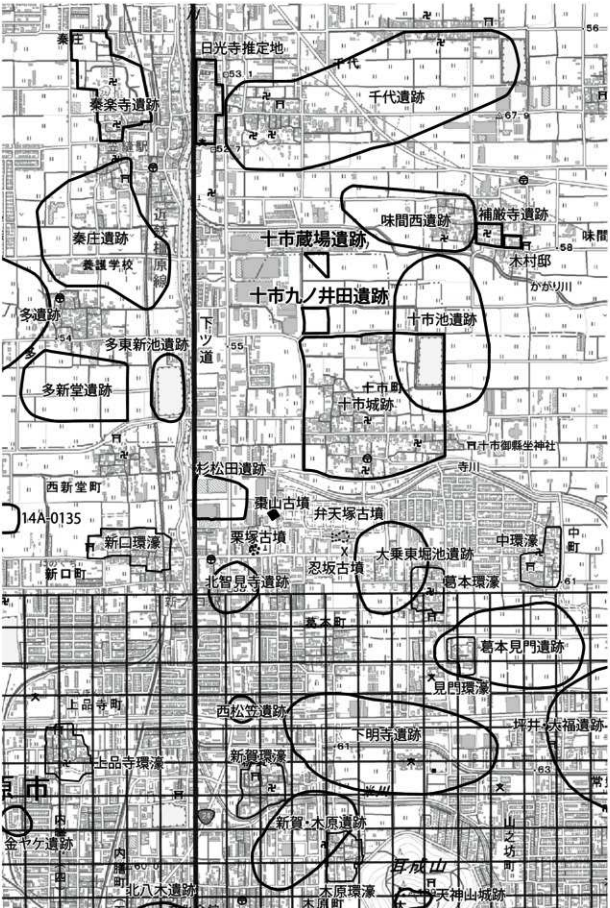


図3　調査地周辺の遺跡（S＝1/15,000。格子目は藤原京）

大乗東堀池遺跡でも、この時期の遺構・遺物が存在し、人々の活動が活発化することがうかがえる。

室町時代から戦国時代にかけて、この地を本拠地に拡大する勢力が十市氏である。十市氏の出自は不明であるが、古代の氏族十市県主の後裔の伝えをもつ。十市氏が初めて文献に現れるのは貞和３（1347）年の『興福寺造営段米并田数帳』に見る十市新次郎入道である。十市氏は十市庄に居を構えて興福寺に仕えつつ、筒井氏や越智氏など大和の勢力や大和国外から伸張してくる諸勢力と争いを繰り広げた。一時は本拠である十市城を奪われるなどの苦難の時期も経験している。戦国時代の天文年間（1535～1555）、十市遠忠の代に十市氏は最盛期を迎え、十市・式上・山辺の三郡（現在の橿原市北部、田原本町、天理市、桜井市の一部）に勢力範囲を広げた。遠忠は天理市・龍王山上に築いた龍王山城と十市城とを拠点に領地を治めた。遠忠の死後、十市氏は相続争いによる内部分裂で勢力を弱めたものの、織田信長から大和の守護に任じられた筒井順慶の家臣となる。その後は天正 13（1585）年に筒井定次の伊賀への国替えを機に、十市氏は大和での基盤を失うこととなった。

永禄８（1565）年にはイエズス会宣教師ルイス・デ・アルメイダが十市城を訪れたこと、当時の城主が松永久秀の家臣である「サンチョ・イシバシ（石橋義忠）」であったことが、ルイス・フロイスの『日本史』に記録されている。また、文禄５（1596）年にファン･ラングレンが作成した地図『東アジア図』にも Tochis（十市）が記されており、その名が広く知られていたことが分かる。

十市氏が本拠とした十市城は寺川右岸に立地する平城で、正確な築城年代は不明であるが、寛正３（1462）年の記録にある「十市屋形」から発展したものと考えられる。現在の十市町集落の北側に、周囲の田畑よりも約１m 高い、十市城の主郭と考えられる一辺約 70 m四方の高まりが存在する。現在、この場所に『十市城之跡』の石碑が建っている。十市城跡の写真として一般に紹介される場所である。主郭の北側と南側で道路整備に伴い実施した発掘調査では、主郭と平行する 15～16 世紀の堀を検出している。出土遺物には中国製の白磁・青磁や高麗製の青磁といった輸入磁器が含まれる。十市城ではこの他に発掘調査は実施されておらず城の全体像は不明であるが、周辺に残る地割や字名から、東西約 550 m・南北約 430 mの範囲であったと考えられる。現在は十市城の南を流れる寺川は、元は十市城の範囲内を南東から北西に流れていたものから現在の位置に付替えていることが絵図や地割の乱れ、地名に残されている。森本育寛氏は、寺川の付け替えの時期を十市遠清の代、嘉吉２（1442）年～康正２（1456）年の間と推測されている。

『大和国条里復原図』によると調査地点は十市郡路東二十条一里にあたる。字名は北から順に、蔵場（西蔵場）、坊天、九ノ井田である。今回新たに登録した遺跡名はこれらの字名に由来する。

【参考文献】

改訂橿原市史編纂委員会編 1987『橿原市史』橿原市役所
田原本町教育委員会編 2002「味間西遺跡の立会」『田原本町埋蔵文化財調査年報 11』
中村昌泰・森本育寛 2016『戦国期の大和十市氏と本拠集落』ふる里十市研究会
奈良県橿原市教育委員会編 1995『図録 橿原市の文化財』橿原市教育委員会
奈良県立橿原考古学研究所編 1980『大和国条里復原図』奈良県教育委員会
奈良県立橿原考古学研究所編 1982『田原本町 味間遺跡 発掘調査報告書』田原本町教育委員会
奈良県立橿原考古学研究所編 2019『大和国条里復原図（複製版）』 由良大和古代文化研究協会

第Ⅲ章　橿教委 2016－9・2017－1 次調査の成果

第 1 節　調査の方法

試掘調査区の位置と形状

調査地一帯ではこれまでに調査例が無く、まず全体の遺構・遺物の広がりを把握する必要があるため、事業予定地の全体に広がる形で 8 ヶ所に調査区を設定し、試掘調査を実施している（図 4）。調査区の名称は、北西から順に 1 区、2 区、… 8 区としている。

各調査区は南北方向に長い長方形である。調査区の規模は、いずれも東西幅 2 m、南北長は 1・2 区が 95 m、3～8 区が 85 mである。調査面積は合計 1,400 ㎡である。

調査地一帯は、試掘調査時まで長く水田として利用されていた。試掘調査時には 1・2 区と 3 ～5 区の間には東西方向の道路が、3 ～5 区と 6～8 区の間には十市川（付け替え前）が西流する。十市川は 6 区の北西隣の地点で流れを変え、北流する。

調査の手順

調査はまず先に 1～4 区を実施し、平成 29（2017）年 3 月中に 1～4 区の埋め戻しまで終えた後、続けて同年 4 月に 5～8 区の調査を実施している。

作業は、遺構面直上までを重機（バックホウ）で掘削し、以後の掘削・記録作業は人力で行っている。調査で除去した排土は、各調査区の隣接地点に仮置きした。各調査区とも調査区東辺もしくは西辺沿いに人力で排水溝を掘削し、遺構断面及び遺構面下の状況把握を行っている。検出した遺構の掘削は基本的に排水溝部分のみに留めている。

遺構名

それぞれの遺構名は遺構番号（4 桁からなる数字）＋遺構記号（その種別を示す 2 字のアルファベット。内容は文化庁発行の『発掘調査の手引き』に従う）の形で記録・報告している。遺構番号は、1 区の遺構は頭に 1 を、2 区の遺構は頭に 2 を、という形で 001 から順に番号を付与している。遺構番号は遺構種を問わず通し番号としている。遺構番号は主として各遺構を認識した順に付与している。遺構名は基本的に調査時のものをそのまま使用して報告を行っている。なお、試掘調査時には調査地全体に存在する耕作溝群には遺構番号を付与していない。

写真撮影

調査写真の撮影は、各遺構面の検出・完掘状況の他、調査区及び遺構の断面や遺物出土状況など、調査の過程で記録が必要な段階で行っている。調査写真の撮影は橿原市の調査担当者が行っている。

撮影機材について、橿原市でも平成 28（2016）年度以降、発掘調査現場で撮影する写真について従来のフィルムを使用する方式から、デジタルカメラを使用する方式に転換している。撮影用デジタルカメラは Nikon D810 と PENTAX 645Z を併用している。

なお、写真撮影については今回報告する調査全体で共通するため、ここで代表して記すこととする。

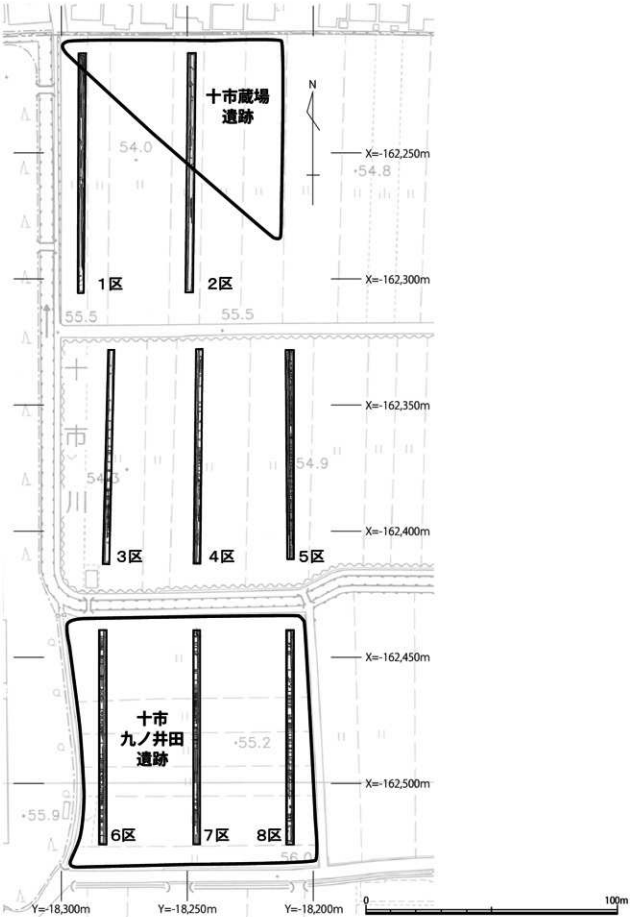


図 4　試掘調査位置と遺跡登録範囲（S = 1/1,500）

第２節　各調査区の層序と遺構

試掘調査の結果、各調査区の基本的な層序は全体を通して大きな差異が無い。以下に示す基本層序は各調査区を通じて共通している。各調査区の詳細については後述する。

Ⅰ層：現代の水田耕作土（上面の標高 54.1～54.6 m）
Ⅱ層：床土（上面の標高 53.9～54.4 m）
Ⅲ層：中世以降の耕作層（耕作溝群埋土を含む。上面の標高 53.6～54.2 m）
Ⅳ層：古墳時代前期以前の自然堆積層（地山。上面が遺構面。2・4 区には存在しない。上面の標高 53.3～54.0 m）
Ⅴ層：古墳時代前期以前の河川堆積層（地山。2・4 区では上面が遺構面。上面の標高 53.1～54.0 m。湧水が多い）

Ⅳ層およびⅤ層は遺物を含まない地山層である。Ⅳ層が存在する地点ではⅣ層上面が、存在しない地点ではⅤ層上面が遺構面となる。Ⅳ・Ⅴ層は上面に存在する遺構の時期から、古墳時代前期以前の自然堆積層であるが地点による土質の差異も大きく、各地点での堆積時期には開きがある可能性もあるが、この上面が遺構面となる点は共通する。Ⅳ層は比較的しまりの良い砂質土～粘質土層である。Ⅴ層は主として砂～シルト層から成る河川堆積性の土層である。

遺構面の標高は 53.3～54.0 mである。中世の耕作溝群より古い時期の遺構が存在する 1・2 区および 6～8 区においては 53.3～53.5 mと低く、その一方で中世の耕作溝群のみの 3～5 区においては約 54.0 m付近と高い位置にある。

以下に、各調査区における層序と検出遺構をまとめる（図５～14）。

【1 区】（図５・７）
Ⅰ層：現代の水田耕作土 （上面の標高約 54.1 m）
Ⅱ層：にぶい黄橙色砂質土（床土。上面の標高 53.9 m）
Ⅲ層：灰黄色粘質土（中世以降の耕作土。上面の標高約 53.6～53.7 m）
Ⅳ層：にぶい褐色土、黄色砂質土（古墳時代以前の自然堆積層。上面が遺構面。上面の標高約 53.5～ 53.6 m）
Ⅴ層：灰色・青灰色細砂～シルト（上面の標高約 53.4 m）

調査区全体で中世以降の耕作溝を検出している。耕作溝は南北方向が中心で、南北方向より古い東西方向の溝が少数存在する。耕作溝からは 12 世紀以降の少量の瓦器や土師器が出土している。

耕作溝よりも古い遺構として土坑 1 基、溝 2 条、ピット 1 基がある。

1003SK は調査区北部に位置する土坑である。調査区西壁面でのみ確認している。直径約 1.0 m、深さ約 0.4 mを測る円形土坑であると考えられる。出土遺物が無く、時期は不明である。

1002SD は調査区中央部に位置する東南東―西北西方向の溝である。幅約 0.8 ～1.2 m、深さ約 0.2 mを測る。灰黄色砂を埋土とし、遺物は出土していない。

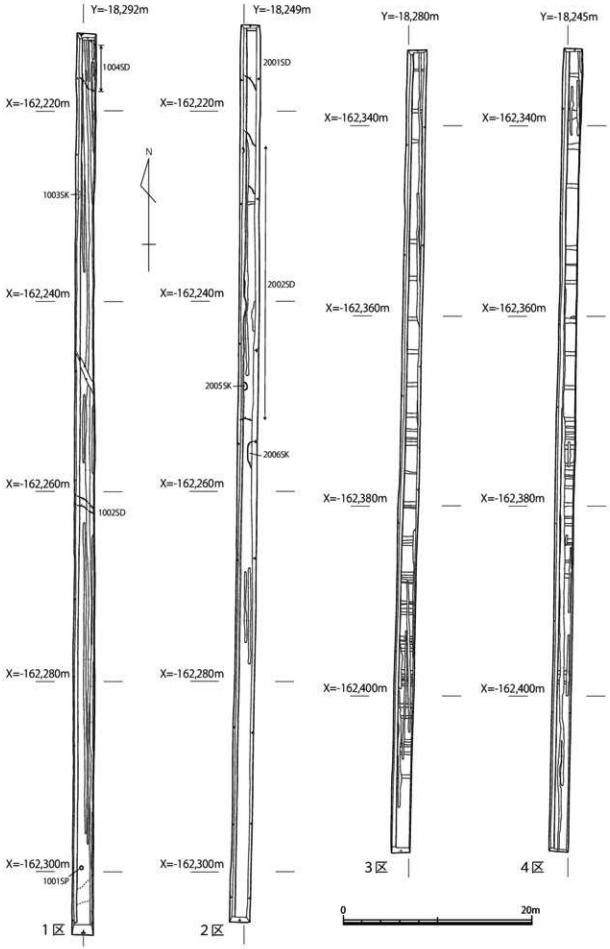


図5　試掘調査1～4区平面図（S＝1/400）

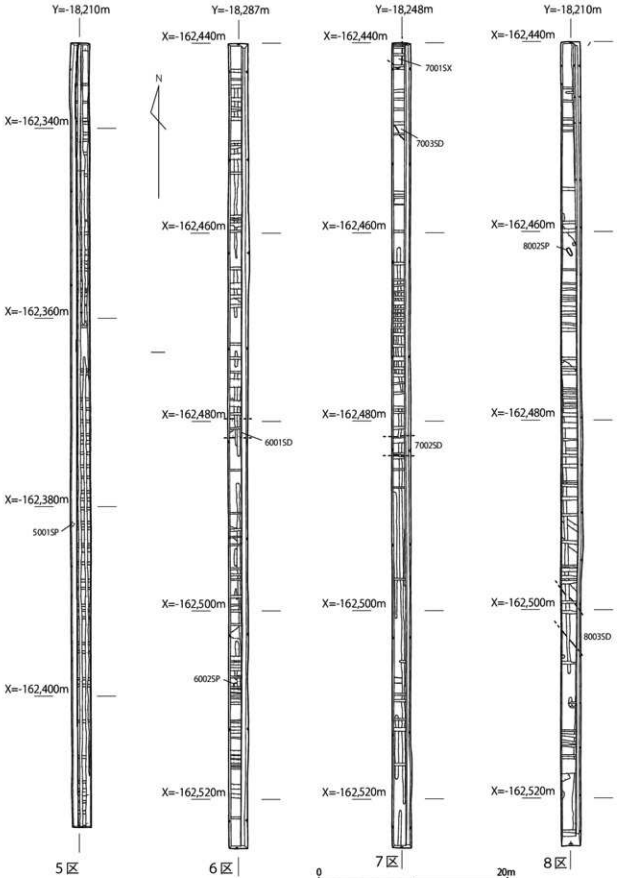


図６　試掘調査５～８区平面図（S＝1/400）

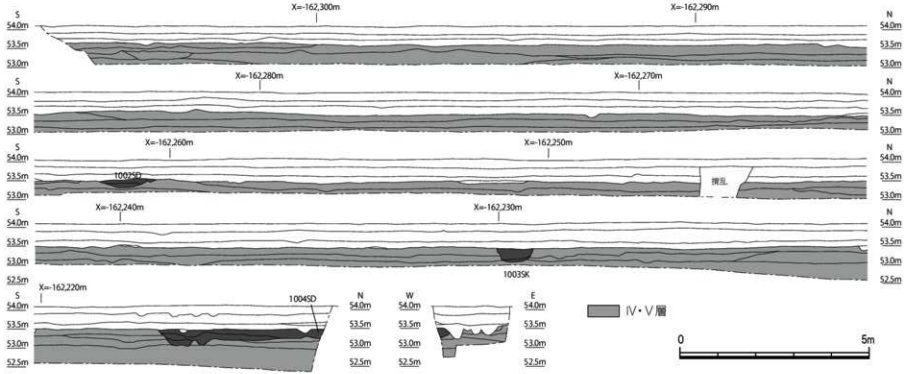


図7　1区遺存区西壁・北壁土層断面図（S＝1/100）

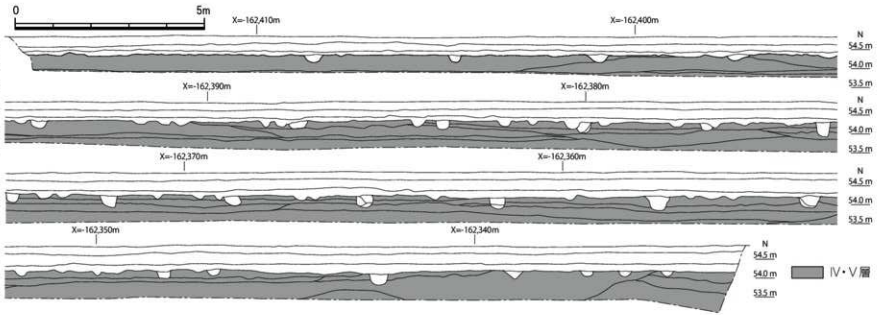


図8　3区遺存区西壁土層断面図（S＝1/100）

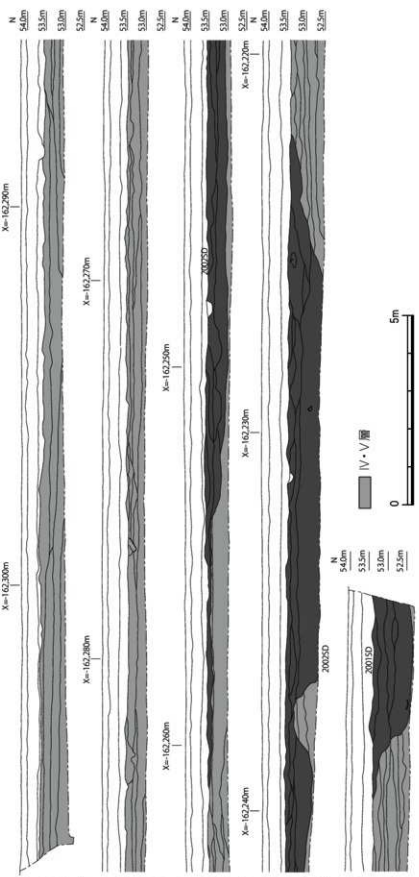


図9　2区調査区西壁土層断面図（S = 1/100）

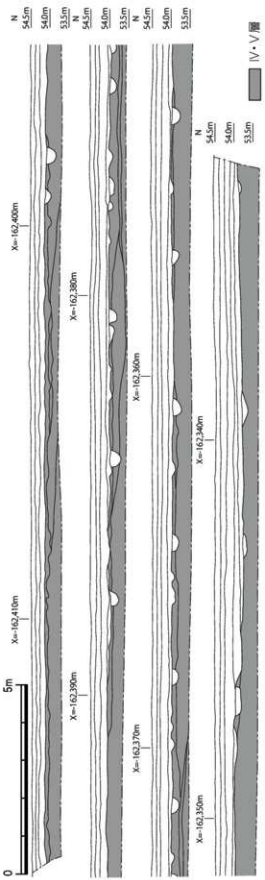


図10　4区調査区西壁土層断面図（S = 1/100）

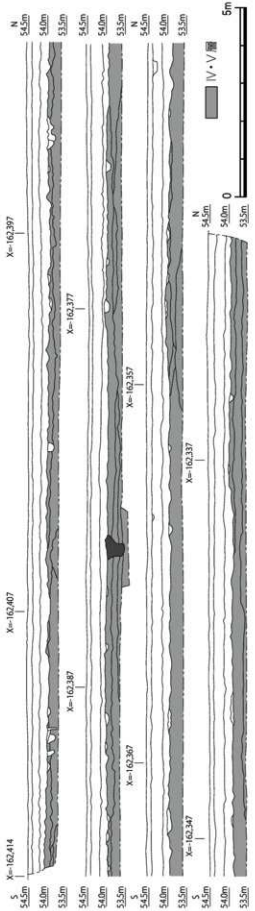


図 11　5区調査区西壁土層断面図（S = 1/100）

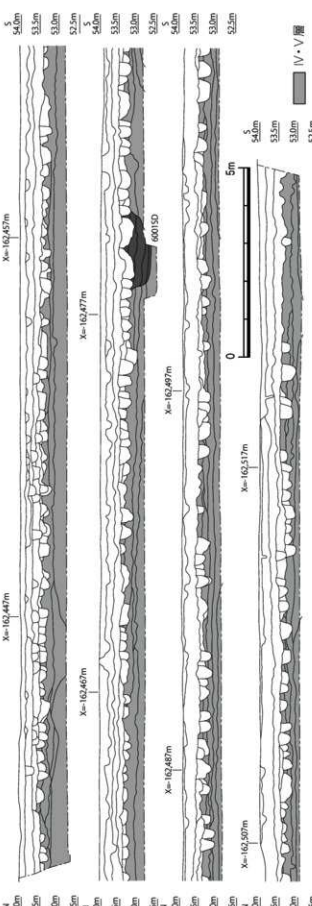


図 12　6区調査区東壁土層断面図（S = 1/100）

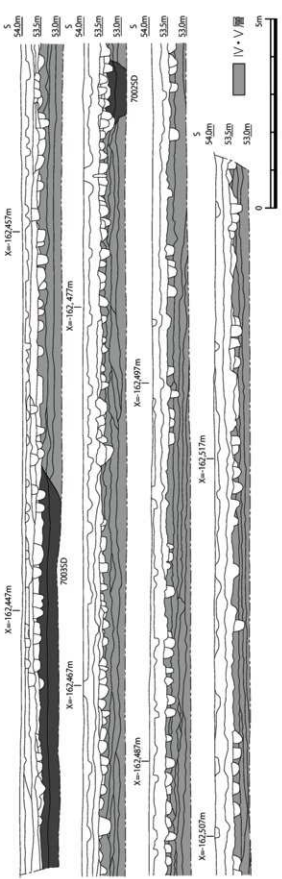


図13　7区調査区東壁土層断面図（S＝1/100）

図14　8区調査区東壁土層断面図（S＝1/100）

1004SD は調査区北端に位置する。南東―北西方向の溝であると考えられる。幅約3.8 m、深さ約0.4 mを測る。古墳時代後期前半の須恵器と土師器が出土している。埋土の一部には粘土ブロックが混ざり人為的に埋められている。

1001SP は調査区南端の直径約 0.3 mの円形ピットである。遺物は出土していないが遺構埋土はⅢ層と共通しており、時期は中世以降である可能性が考えられる。

【2区】(図5・9)

Ⅰ層：現代の水田耕作土（上面の標高約 54.1～54.2 m）

Ⅱ層：にぶい黄橙色砂質土（床土。上面の標高 53.9～54.0 m）

Ⅲ層：灰黄色粘質土（中世以降の耕作土。上面の標高約 53.7 m）

Ⅴ層：にぶい橙色細砂、明黄褐色細砂土、青灰色粘土（古墳時代以前の堆積層。上面が遺構面。上面の標高約 53.4～53.6 m）

1区と同様の耕作溝が調査区全体に存在する。遺構ベース層であるⅤ層が非常に軟弱であるため検出段階で多くが消失している。

耕作溝より古い遺構として土坑2基、溝2条がある。

2005SK と 2006SK は調査区中央部に位置する土坑である。2005SK は直径約 0.6～0.8 m、深さ約0.1 m以上の楕円形土坑である。2006SK は南北約2.6 m以上、東西約0.5 m以上を残す土坑である。2005SK と 2006SK からは土師器の小片が出土している。

2001SD は調査区北端に位置する南東―北西方向の溝である。幅約 3.0 m以上、深さ約 1.0 mを測る。古墳時代中期後半～後期の土師器と須恵器が出土している。後述する 2019・2020 年度調査の1126SD にあたる遺構である。

2002SD は調査区北半に位置する幅約 15 mを超える流路（調査時の認識は大溝）である。2023年度調査の NR20 および NR24 にあたる。試掘調査範囲内での深さは最大約 1.1 mを測る。古代の土師器や須恵器等が出土しており、遺物の出土量は試掘調査で確認できた遺構の中で最も多い。特に遺構の北肩部からは土器がまとまって出土している。

【3区】(図5・8)

Ⅰ層：現代の水田耕作土 （上面の標高約 54.5 m）

Ⅱ層：にぶい黄橙色砂質土（床土。上面の標高 54.3 m）

Ⅲ層：灰黄色粘質土（中世以降の耕作土。上面の標高約 54.0～54.1 m）

Ⅳ層：黄橙褐色粘質土（古墳時代以前の堆積層。上面が遺構面。上面の標高約 53.8 m。調査区北部のみに存在）

Ⅴ層：褐灰色シルト質粘土～細砂、灰色粘土（上面の標高約 53.7～53.8 m）

遺構は中世以降の耕作溝のみである。1・2区と異なり、東西方向の耕作溝が多い。東西方向が南北方向よりも古い点は同じである。東西方向の溝の規模は幅約0.4～ 0.5 m、深さ約0.2 mで共通する。瓦器と土師器の小片が出土するが、量は1・2区より少ない。

【4区】（図5・10）

Ⅰ層：現代の水田耕作土 （上面の標高約 54.5 m）

Ⅱ層：にぶい黄橙色砂質土（床土。上面の標高 54.4 m）

Ⅲ層：灰色粘質土（中世以降の耕作土。上面の標高約 54.1 m）

Ⅴ層：橙色混じり明褐灰色細砂、灰白色微砂～シルト（古墳時代以前の堆積層。上面が遺構面。上面の標高約 53.9～ 54.0 m）

遺構は中世以降の耕作溝のみである。耕作溝および出土遺物の状況は3区と同様である。

【5区】（図6・11）

Ⅰ層：現代の水田耕作土（上面の標高約 54.6 m）

Ⅱ層：黄褐色微砂（床土。上面の標高約 54.4 m）

Ⅲ層：灰色粘土（中世以降の耕土。上面の標高約 54.2 m）

Ⅳ層：黄褐色～褐灰色粘質シルト（古墳時代以前の堆積層。上面が遺構面。上面の標高約 54.0 m）

Ⅴ層：灰黄色細砂、灰オリーブ色砂（時期不明の自然堆積層。上面の標高約 53.9 m）

調査区全体で中世以降の耕作溝を検出している。南北方向の耕作溝と、それより古い東西方向の耕作溝が存在する。瓦器と土師器の小片が出土している。

耕作溝より古い遺構としてピット1基がある。

5001SP は調査区南半の西壁沿いに位置し、土層断面のみでの確認である。規模は直径約 0.5 m、深さ 0.5 mであり、平面形は円形である。埋土は黒褐色粘土であり、耕作溝とは大きく異なる。遺物は出土していない。

【6区】（図6・12）

Ⅰ層：現代の水田耕作土（上面の標高約 54.0 m）

Ⅱ層：にぶい黄褐色シルト（床土。上面の標高約 53.9 m）

Ⅲ層：灰オリーブ色中砂質シルト（中世以降の耕作土。上面の標高約 53.7 m）

Ⅳ層：黒褐色～明褐色微砂（古墳時代以前の堆積層。上面の標高約 53.3～53.4 m）

Ⅴ層：灰色中砂、黒褐色粘土（時期不明の自然堆積層。上面の標高約 53.1～53.2 m）

調査区全体で中世以降の耕作溝を検出している。東西方向の耕作溝と南北方向の耕作溝が存在する。耕作溝は1～5区と異なり、東西方向よりも南北方向のほうが古い。耕作溝からは瓦器と土師器の小片が出土している。古墳時代前期の土師器を含む。

耕作溝より古い遺構として溝1条、ピット1基がある。

6001SD は調査区中央部に位置する東西方向の溝である。幅約 2.0 m、深さ約 0.6 mを測る。断面の形状は逆台形を呈する。6001SD 溝心の座標は X=-162,480.7 m、Y=-18,287.0 mである。

6002SP は調査区南半に位置するピットである。平面形は直径約 0.4 mの円形である。6001SD と 6002SP から遺物は出土していない。

【7区】（図6・13）

Ⅰ層：現代の水田耕作土（上面の標高約 54.0～54.1 m）

Ⅱ層：灰オリーブ色シルト（床土。上面の標高約 53.9 m）

Ⅲ層：暗灰黄色・黄灰色微砂質シルト（中世以降の耕作土。上面の標高約 53.7 m）

Ⅳ層：褐灰色細砂～中砂（古墳時代以前の堆積層。上面の標高約 53.5～53.6 m。上面が遺構面）

Ⅴ層：黄灰色細砂、灰色粗砂（時期不明の自然堆積層。上面の標高約 53.2～53.4 m）

調査区全体で中世以降の耕作溝を検出している。耕作溝と出土遺物の状況は 6 区と同様である。

耕作溝より古い遺構として落ち込み 1 基、溝 2 条がある。

7001SX は調査区北端に位置する落ち込みである。遺構の南東部を検出した状態で、調査区の北および西側へと広がる。遺構検出状態では、遺物を多く含むが遺構の詳細を把握できなかったため、遺構の完掘まで調査を行なっている。平面形は東西約 1.1 m以上、南北約 3.2 m以上を測る不整形である。遺構の底面に起伏があり、深さは約 0.2 ～0.4 mを測る。遺構全体に散らばる形で、古墳時代前期の土師器が出土している。また、銅鈴であると考えられる小片 1 点が出土している（図版 4・25）。

7002SD は調査区中央部に位置する東西方向の溝である。幅約 2.0 m、深さ約 0.5 mを測る。断面の形状は逆台形である。6 区の 6001SD と同一の溝である可能性がある。7002SD 溝心の座標は X=-162,482.6 m、Y=-18,248.0 mである。遺物は出土していない。

7003SD は調査区北端部に位置する溝である。幅約 8.0m 以上、深さ 0.6 m以上を測る大型の溝である。時期不明の土器の細片が出土している。7001SX との重複関係から、古墳時代前期以前の溝であると考えられる。

【8 区】（図 6・14）

Ⅰ層：現代の水田耕作土（上面の標高約 54.0 ～ 54.1 m）

Ⅱ層：暗灰黄色細砂質シルト（床土。上面の標高約 53.9 m）

Ⅲ層：にぶい黄色・灰オリーブ色シルト（中世以降の耕作土。上面の標高約 53.7 m）

Ⅳ層：黒褐色粘土（古墳時代以前の堆積層。上面の標高 53.4 m。上面が遺構面。南端のみに存在）

Ⅴ層：黄灰色粗砂、灰黄色細砂（上面の標高 53.2 ～ 53.5 m）

調査区全体で中世以降の耕作溝を検出している。耕作溝の状況は 6 ・ 7 区と同様である。耕作溝からは瓦器、土師器、須恵器の小片が出土している。

耕作溝より古い遺構として溝 1 条、ピット 1 基がある。

8002SP は調査区北半に位置する平面形が楕円形のピットで、長軸約 0.9 m・短軸約 0.3 mを測る。

8003SD は調査区南半に位置する南東―北西向の溝である。幅約 3.1 m、深さ 0.4 mを測る。耕作溝以外の遺構から遺物は出土していない。

第３節　出土遺物

試掘調査で出土した遺物には、須恵器・土師器・瓦器・瓦質土器・青銅製品・木材・動物骨がある。出土遺物の量は遺物コンテナ約 15 箱である。

出土遺物の時期は古墳時代前期、古墳時代中期末～後期、飛鳥時代、奈良時代、鎌倉時代、室町時代のものがある。量的には古墳時代の遺物が多くを占め、図化可能な遺物もこの時期が主である。

調査区別では、２区と７区の出土遺物が多く、１区・６区・８区が次いで多い。３～５区は出土遺物が非常に少なく、土器片が少数出土しているのみである。

以下に、主な出土遺物について報告する（図 15・16）。

２区出土遺物（図 15）

２区は試掘調査で出土遺物量が最も多い。調査区排水溝の掘削時に 2001SD および 2002SD から出土した遺物が特に多い。2001SD・2002SD からは古墳時代中期末から奈良時代にかけての須恵器と土師器が出土しており、そのうち図化可能なものは古墳時代後期が主である。

１は須恵器蓋坏の蓋である。復元口径 16.0cm、器高 3.7cm を測る。形状は歪みがあり、頂部が凹む。胎土には炭化物粒を多く含む。２は須恵器蓋坏の蓋である。口縁端部を欠くが、復元口径 13cm 程度の蓋であると考えられる。ヘラ削り、ナデ調整ともに全体に粗い。３は須恵器蓋坏の身である。復元口径 12.6cm を測る。口縁端部内側に鈍い段をもつ。出土した須恵器の中では最も古い段階のものである。４は須恵器壺の口縁である。復元口径 16.0cm を測る。外面に三段の波状文を施す。最下段の波状文は上部がナデ消されている。５は須恵器壺の体部である。下半部には外面には褒と同様のタタキ、内面に当具痕がある。外面上半および内面下半には自然釉が多数付着している。また、外面には直径 2～3cm 大の粘土板が二ヶ所に付着している。６は須恵器褒の頸部である。外面体部はタタキの後、回転ハケ調整を施す。頸部には一ヶ所、「川」の字状のヘラ記号がある。

７は土師器高坏の坏部である。緩やかに屈曲して開く形状で、口縁端部は内側へ軽く折り返す。外面下半には器壁表面のひび割れが目立つ。８は土師器高坏の坏底部である。坏部底面は広い平底である。外面底部に鈍い稜を造り出す。脚部中央には差し棒痕がある。

９は土師器褒の体部下半である。復元最大径 27.2cm のやや大型の褒である。外面にやや粗いハケ調整、内面にはケズリを施す。内面には一部に薄く煤が付着する。10 は土師器褒である。体部は下反部がやや細い球形を呈する。外面肩部以下の全体に煤が付着する。11～13 は土師器長胴褒である。11 は下膨れの体部をもつ。口径 20.3cm、器高 34.0cm 以上を測る。全体に細かなハケ調整を施す。外面の肩部以下と内面の頸部以下に煤が付着するが、煤が無い部分も多く付着範囲には斑がある。12 は体部である。底部を欠くが、平底気味の形状であると考えられる。煤は内面に多く付着するが、外面はごく一部にのみ付着する。13 は口径 23.1cm、器高 39.8cm を測る。口縁部には外面に段を作り出す。外面にはハケ調整を施し、内面にはハケ調整の後にナデ調整で仕上げている。外面底部に黒斑がある。煤は付着していない。

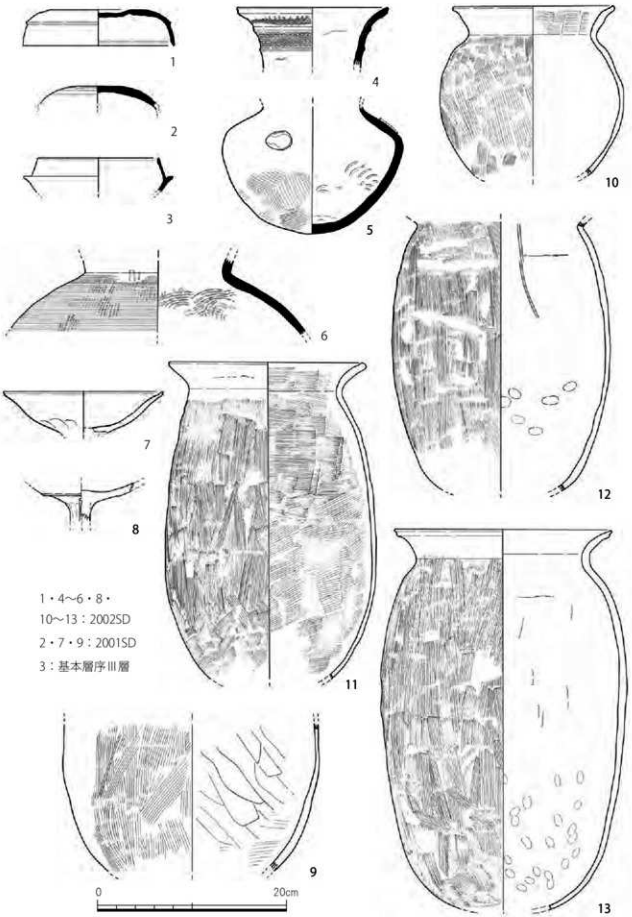


図15　2区出土遺物（S＝1/4）

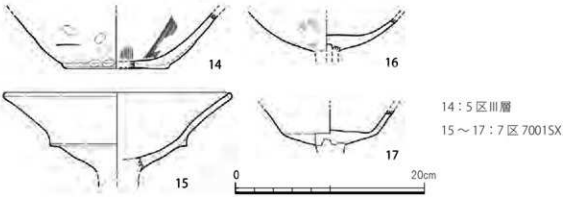


図16　5・7区出土遺物（S＝1/4）

5・7区出土遺物（図16）

14は瓦質土器のすり鉢の底部である。底部径10.6cmを測る。内面にはハケによる溝を底部中央から放射状に8～10方向に施す。時期は室町時代であると考えらえる。中世以降の耕作層からは鎌倉時代以降の瓦器や土師器が出土している。鎌倉時代中期の土器が主だが、小片が中心で数量も古代以前の遺物と比較して非常に限られる。

15～17は7001SXから出土した土師器高坏である。15は外反気味の口縁をもつ有稜高坏である。復元口径23.4cmを測る比較的大型の高坏である。内外面とも器壁が荒れており、坏部内面は被熱している。16は坏部下半のみであるが椀形を呈する。内面底部は平底である。17は直線的に開く有稜高坏であるが、稜は鈍い。器壁は内外面とも平滑に仕上げている。脚部は坏部との接合面から剥落している。7001SXからは、この他に銅鈴の小片1点（図版25）と碧玉製の管玉1点が出土している（図版29）。

第Ⅳ章　橿教委 2019－4・2020－1 次調査の成果

第 1 節　調査の方法

調査区の位置と形状

調査区は事業敷地の北端部に位置する（図 1）。試掘調査を経て新たに遺跡登録された十市蔵場遺跡の北辺部分にあたる。事業敷地内を流れる十市川の付け替え工事および道路築造工事の実施地点での本発掘調査である。なお、調査区のすぐ北隣に接する東西方向の水路が市境であり、これより北が磯城郡田原本町である。

調査区は東西方向に長い長方形で、規模は東西 73 m・南北 9 m・面積 657 ㎡である。

試掘調査の 1 区および 2 区の北端部が調査区内に含まれている。1 区が調査区西端部、2 区が調査区中央やや東の地点に位置する。

調査の手順

調査は遺構面直上まで重機（バックホウ）による掘削を行い、以降の掘削・記録作業は人力で行っている。調査地一帯では試掘調査の実施後、2017 年に盛土造成工事を行っており、2019 年度以降の発掘調査は造成面から掘削を始めている。調査地点の造成盛土は約 1 m弱の厚さがあり、調査時の地表面から遺構面までの深度が深くなることから、安全確保および調査区壁面保護のため、造成土底面付近の高さに犬走りを設けて調査を行っている。調査地は全体に遺構面下からの湧水量が多いことから、遺構面保護のため、調査区の四周に人力で排水溝を掘削している。試掘調査 1 区・2 区での掘削地点についても、重機掘削作業と並行して人力で再掘削を行っている。

なお、本調査は令和元（2019）年度末から令和 2（2020）年度にかけて実施した都合上、調査字数を橿教委 2019－4・2020－1 次としている。調査作業は年度を跨いで区切りなく継続している。

遺構名

それぞれの遺構名は遺構番号（4 桁からなる数字）＋遺構記号（その種別を示す 2 字のアルファベット。内容は文化庁発行の『発掘調査の手引き』に従う）の形で記録・報告している。遺構番号は 1101 から順に番号を付与している。遺構番号は遺構種を問わず通し番号としている。遺構番号は主として各遺構を認識した順に付与している。なお、調査地全体に存在する耕作溝群には個別の遺構番号を付与していない。

第２節　基本層序

基本層序は以下のとおりである。なお、基本層序の番号については『令和２年度橿原市文化財調査年報』掲載の発掘調査概要報告の内容から今回の報告で変更している。調査区内では各基本層序の上面高は概ね水平である。

橿教委 2019－4・2020－1 次調査　基本層序（図 17～19）

造成土：2017 年の造成工事盛土（厚さ約 0.8～0.9 m。上面の標高 54.8～54.9 m）

Ⅰ層：水田耕作土（現代。試掘調査時の表土。厚さ約 0.1～0.2 m。上面の標高 54.0～54.1 m）

Ⅱ層：灰オリーブ色土（床土。厚さ約 0.2～0.3 m。上面の標高 53.8～54.0 m）

Ⅲ層：灰白～褐灰色粘質土（中世以降の耕作層。耕作溝埋土を含む。厚さ約 0.1～0.4 m）

Ⅳ層：明褐灰色微砂、にぶい黄橙色細砂（上面が遺構面。古墳時代以前の河川堆積層。調査区西半部にのみ存在。厚さ最大約 0.7 m以上。上面の標高 53.5～53.6 m）

Ⅴ層：灰褐色土、浅黄橙色土、褐色粘質土（上面が遺構面。古墳時代以前の自然堆積層。調査区東半部および西端部に存在。上面の標高 53.4～53.6 m）

Ⅰ層は現代の水田耕作土である。試掘調査実施後の平成29年に、この上に盛土造成が行われている。造成土の厚さは事業敷地の地点によって異なるが、本発掘調査を実施している敷地北側では概ね 1 m前後である。

Ⅱ層は床土である。厚さ約 0.2～0.3 mの灰オリーブ色土が調査区全体に概ね一様に広がっている。ごく少量であるが近世以降の遺物を含む。

Ⅲ層は中世以降の耕作層である。耕作溝の埋土もここに含む。Ⅲ層、主に耕作溝の埋土中からは 13 世紀頃の瓦器や土師器が少量ながら出土している。ただし出土遺物の量はこれら中世の遺物よりも下層の遺構に由来する古墳時代～飛鳥時代の遺物のほうが多い。

Ⅳ・Ⅴ層は遺物を含まない地山層であり、この上面が遺構面となる。上面の標高は 53.4～53.6 mである。上面高は調査区東半部より西半部がやや低い傾向にある。

Ⅳ層は主として微砂・細砂・シルト層から成る河川堆積層である。調査区中央部から西側にのみ存在する。特に西側では上面の土壌化が進んでおり、しまりが強い良好な遺構基盤層となる。古墳時代後期より古い時期の堆積であると考えられるが詳細時期は不明である。

Ⅴ層はⅣ層よりも古い自然堆積層である。灰褐色土や褐色粘質土から成る安定した地盤である。Ⅳ層が存在しない調査区東半部ではⅤ層上面が遺構面となる。

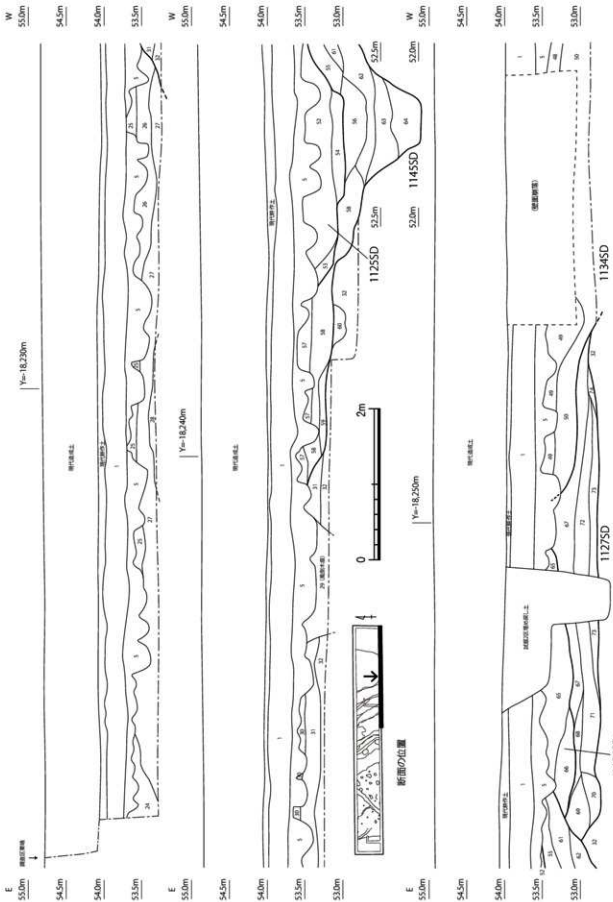


図 17　2019－4・2020－1 次調査　調査区南壁土層断面図①（S＝1/50）

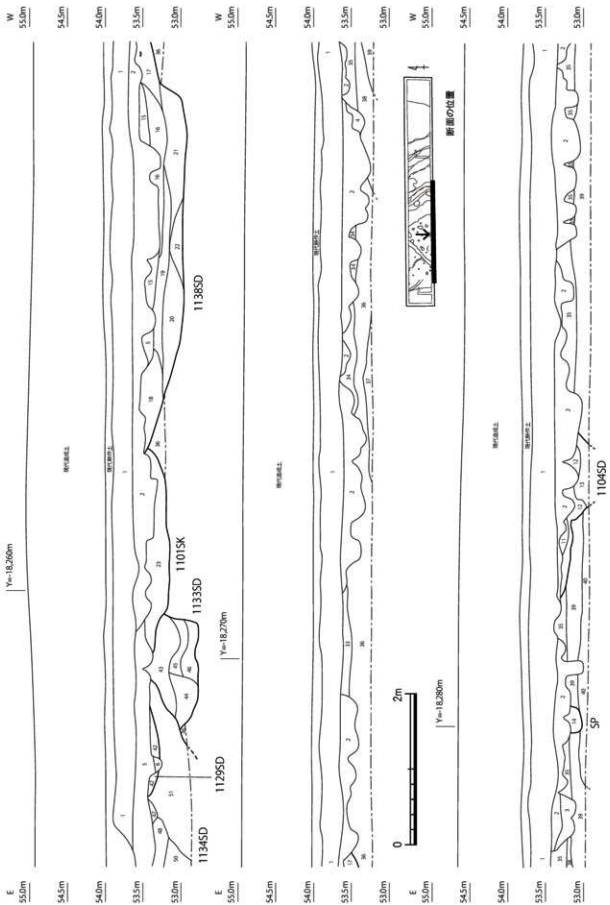
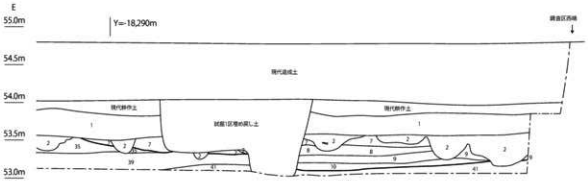
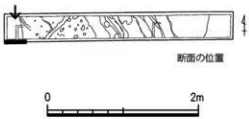


図 18　2019－4・2020－1 次調査　調査区南壁土層断面図②（S＝1/50）





基本層序Ⅱ層：1層、基本層序Ⅲ層：2～6層、1144SX：7～10層、1104SD：11～13層、SP：14層、1138SD：15～22層、1101SK：23層、1102SX：24～28層、
基本層序Ⅳ層：33～38層、基本層序Ⅴ層：30～32・39～41層、1129SD：42層、1133SD：43～46層、1134SD（NR）：47～51層、1125SD：52～54層、
1145SD：55～59・61～64層、SP：60層、1126SD：65・66層、1127SD：67～74層

1. 5Y6/2 灰オリーブ色土
2. 5Y7/1 灰白色粘質土(下層ベース層に由来するブロックをまばらに含む)
3. 7.5YR6/1 褐灰色粘質土(下層ベース層に由来するブロックをまばらに含む)
4. 7.5YR6/2 灰褐色粘質土(下層ベース層に由来するブロックをまばらに含む)
5. 5Y6/1 灰色粘質土(下層ベース層に由来するブロックをまばらに含む)
6. 2.5Y5/1 黄灰色粘土(下層ベース層に由来するブロックをまばらに含む)
7. 7.5YR4/2 灰褐色粘質土(灰色微砂をまばらに含む)
8. 5YR3/1 黒褐色粘質土(黄色微砂を含む)
9. 5Y7/3 浅黄色シルト質土(灰色細砂を含む)
10. 5Y6/1 灰色細砂土(褐色土を含む)
11. 10YR5/2 灰黄褐色粘質土
12. 7.5YR5/1 褐灰色砂質土(黄色・灰色・褐色粘土ブロックを多く含む)
13. 10YR3/1 黒褐色砂質粘質土(黄色・灰色・褐色粘土ブロックを含む)
14. 10YR4/1 褐灰色粘質土(灰色粘土ブロックを含む)
15. 10YR5/1 褐灰色細砂土
16. 5Y6/1 灰色シルト質粘土(灰色細砂混じり)
17. 7.5YR3/1 黒褐色細砂土
18. 10YR3/1 黒褐色砂質土～細砂
19. 5B6/1 青灰色細砂混じりシルト
20. 5PB6/1 青灰色細砂～シルト
21. 5B5/1 青灰色シルト
22. 5PB6/1 青灰色細砂
23. 10YR3/1 黒褐色砂質粘質土(炭化物をわずかに含む)
24. 7.5YR6/3 にぶい褐色砂質土
25. 10YR7/2 にぶい黄橙色砂質土
26. 7.5YR5/2 灰褐色砂質土
27. 7.5YR6/1 褐灰～灰褐色細砂
28. 10YR6/1 褐灰色シルト
29. 7.5YR5/1 褐灰色粘質土
30. 10YR8/4 浅黄橙色土
31. 7.5YR4/2 灰褐色土
32. 2.5Y7/4 浅黄色粘質土
33. 7.5YR7/1 明褐灰色微砂
34. 10YR6/1 褐灰色微砂
35. 7.5YR4/1 褐灰色微砂質土
36. 10YR7/2 褐灰色混じりにぶい黄橙色細砂(しまりが強い)
37. 10YR7/2 にぶい黄橙色微砂
38. 2.5YR3/3 淡黄色シルト
39. 10YR8/4 浅黄橙色土
40. 2.5YR6/4 淡黄色粘質土～粘土
41. 2.5Y7/1 灰白色微砂～細砂
42. 10YR3/1 黒褐色砂質土(灰色微砂を多く含む)
43. 10Y3/1 オリーブ黒色細砂
44. 5PB3/1 暗青灰色細砂
45. 5B5/1 青灰色シルト～細砂
46. 5B4/1 暗青灰色微砂混じり粘土
47. 5YR8/4 淡橙色細砂
48. 5YR3/3 淡黄色微砂
49. 10YR8/2 灰白色微砂
50. 5B6/1 青灰色シルト～微砂
51. 5B5/1 青灰色微砂(褐色土を多く含む)
52. 2.5Y7/2 灰黄色微砂
53. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト質粘土
54. 5Y7/2 灰白色微砂～細砂
55. 7.5YR4/1 褐灰色粘質土(黄色粘土ブロックを含む)
56. 5B5/1 青灰色シルト質粘土
57. 5YR5/1 褐灰色粘質土
58. 5YR3/1 黒褐色砂質土(細砂をまばらに含む)
59. 2.5Y6/1 黄灰色粘土
60. 5YR4/2 灰褐色砂質土
61. 10YR4/1 褐灰色粘土(黄褐色粘土ブロック・灰色細砂を多く含む)
62. 5B6/1 青灰色シルト質粘土
63. 5B4/1 暗青灰色粘土
64. 10BG3/1 暗青灰色粘土
65. 7.5YR3/1 黒褐色砂質土(灰色細砂を多く含む)
66. 2.5Y7/3 浅黄色粘質土(褐色粘土ブロック・灰色細砂を多く含む)
67. 10YR7/2 にぶい黄橙色粘質土(褐色粘土ブロック・灰色細砂を多く含む)
68. 5Y6/2 灰オリーブ色粘土(褐色粘土ブロック・灰色細砂を多く含む)
69. 7.5YR5/1 褐灰色粘質土
70. 5B5/1 青灰色シルト質粘土
71. 5B4/1 暗青灰色粘土
72. N5/0 灰色シルト質粘土
73. 10BG6/1 青灰色微砂混じり粘土
74. 5B6/1 青灰色粘土

図19 2019－4・2020－1次調査 調査区南壁土層断面図（S＝1/50）

第３節　遺構

遺構は大きく３時期に分けられ、鎌倉時代の遺構、奈良時代の遺構、古墳時代後期～飛鳥時代の遺構がある。調査時には鎌倉時代の遺構を上層遺構、奈良時代以前の遺構を下層遺構として捉えて調査・記録作業を行っている。遺構の検出面は同一である。

以下に各時代の遺構について上層から順に述べる。

鎌倉時代の遺構（図 20）

この時期の遺構には、耕作溝群がある。

耕作溝群は、耕作活動の累積によって形成されたと考えられる遺構群で、いわゆる素掘り溝の集まりである。図 20 では調査区中央部付近が空白となっているが、この地点での遺構検出時に溝底面付近の深度まで掘削した結果であり、本来は調査区全域に耕作溝が密に存在する。各耕作溝は幅約 0.2～0.3 m、検出面からの深さ約 0.2～0.3 mを残すものが多い。耕作溝の向きは南北方向が大部分を占める。東西方向の溝も少量あり、南北方向よりも古いものと新しいものの両方が存在する。

耕作溝からは少量ながら鎌倉時代の土器が出土しており、耕作溝の形成時期はこの時期以降であると考えられる。出土遺物の量としては、下層の遺構に由来する古代の土器が大半を占める。

古代の遺構（図 21～23）

古代の遺構は、調査区中央部付近に位置する落ち込みと溝がある。本章および第Ⅵ章で報告する十市蔵場遺跡の調査では、古墳時代後期の遺物が多数出土する河道・溝が存在することを確認している。これらの河道や溝が次第に流れを変化させつつ埋没していき、全体が埋没する最終段階に近い時期の状態であると考えられる。ここで挙げる遺構からは古墳時代後期から飛鳥時代の遺物とともに、奈良時代の土器が少量ながら

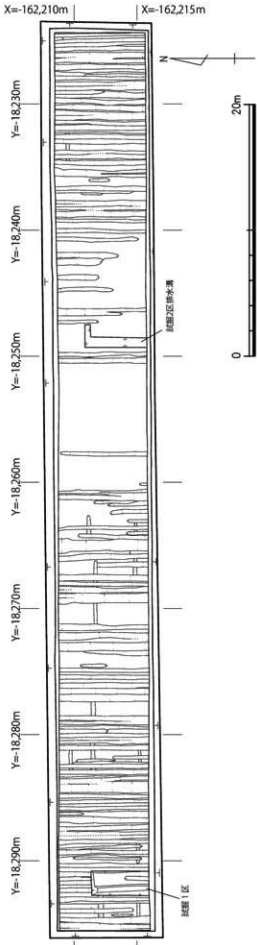


図 20　2019－4・2020－1 次調査
上層遺構平面図（S＝1/300）

出土している。

1128SX は直径約 3.2 m以上の不整形な落ち込みである。深さは最大約 0.3 mを残す。西隣に接する 1129SD とともに人為的に埋められている。

溝は 3 条あり、いずれも南南東－北北西方向の溝である。これは調査地周辺における地形の傾斜と一致する。1125SD は幅約 3.0～3.5 m、深さ約 0.5 mを残す。断面の形状は底面が広い台形である。溝北半部の底面から完形の須恵器横瓶が出土している。また、木製の下駄 1 点も出土している。1129SD は幅約 0.8～1.4 m、深さ約 0.1～0.2 mを残す。最終的に 1128SX とともに埋められている。1134SD は幅約 6.0～7.0 m、深さ約 1.5 m以上を残す河道である。調査区を保持する都合上、底面までの掘り下げができていない。下層部分は古墳時代後期～飛鳥時代に遡る河道の可能性がある。細砂～シルト層が厚く堆積する。古墳時代後期から奈良時代の土器の他、動物骨の細片も出土している。前述の 1129SD は、1134SD が埋没する最終段階の流路である可能性もある。

古墳時代後期～飛鳥時代の遺構（図 21～23）

この時期の遺構には土坑、溝、河道、落ち込み、ピットがある。各遺構の時期は古墳時代後期、とくに後期後半が中心であり、河道については古墳時代後期から飛鳥時代にかけて存続するものがある。古墳時代中期に遡る遺物もごく少量含まれるが、遺構の形成時期は古墳時代後期以降であると考えられる。

遺構は調査区全域に存在する。調査区の中央部に古墳時代後期から飛鳥時代、一部は奈良時代まで存続する河道があり、その西岸側に多数の土坑や溝、ピットが存在する。これらの遺構が広がる地点は河道西岸から西に約 15 mまでの範囲である。河道の東岸側には自然地形の落ち込みが一ヶ所存在するのみだが、落ち込み上面付近からは古墳時代後期の土器が多数出土している。

土坑は調査区西半部に 12 基が存在する。

1101SK は調査区中央南側に位置する土坑である（断面は図 18）。平面形は直径約 2.8 mの円形で、深さは約 0.3 mを残す。埋没した河道、溝の上に構築された土坑で、1133SD より新しい遺構である。大型の土師器二重口縁壺 2 点をはじめとする多くの土器と滑石製管玉 1 点が出土している。

1110SK、1121SK、1122SK、1130SK、1132SK、1136SK、1137SK、1141SK、1142SK、1144SK は河道の西岸に位置する土坑である。1137SK 以外は、平面形が直径約 0.5～1.0 mの不整円形土坑である。1121SK、1136SK、1137S、1142SK からは小片ながら古墳時代後期の土器が出土しており、他の土坑についても遺構埋土の共通性から同時期の遺構であると考えられる。土坑およびピットからの出土遺物は、周辺の溝からの出土遺物よりも量が少ない。1137SK は遺構の南側を確認した状態で、東西約 1.6 m、南北 1.5 m以上、深さ約 0.4 mを残す。遺構埋土が他の土坑と異なる細砂であり、調査区より北側で別の溝か河道に接続する溝の南端部である可能性も考えられる。1141SK は重複関係から、1104SD よりも新しい遺構である。

1143SK は 1133SD の西岸に接する土坑である。遺構埋土の最上層は 1133SD の最上層と一連である。平面形は直径約 1.3～1.8 mの楕円形で、深さ約 0.4 mを残す。土坑の中央部から拳大～人頭大の河原石が出土している。その他に遺物は出土していない。

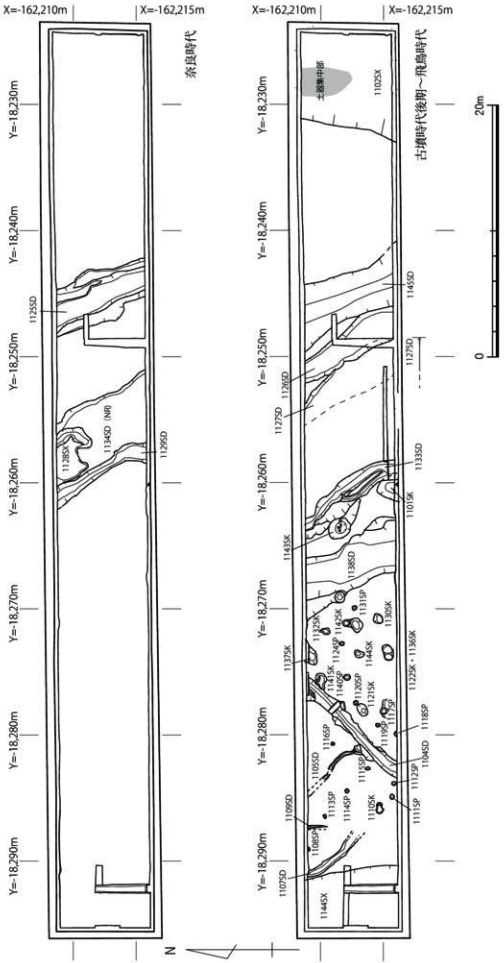


図21　2019－4・2020－1次調査　遺構平面図（S＝1/300）

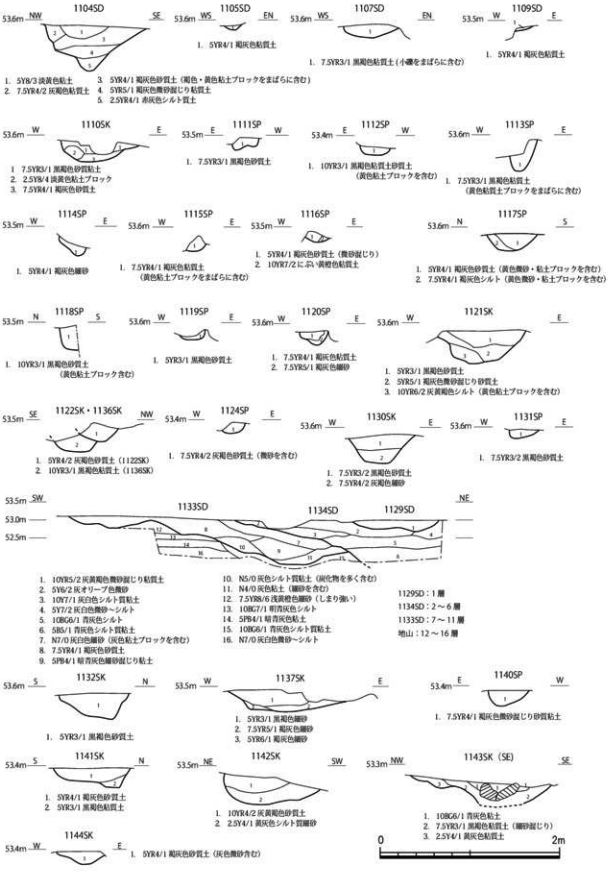


図 22　2019－4・2020－1 次調査　遺構断面図①（S＝1/40）

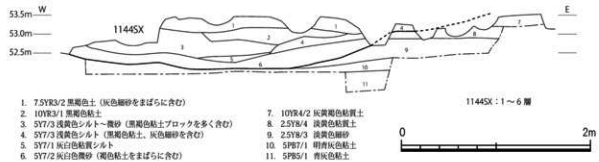


図 23　2019－4・2020－1 次調査　遺構断面図②（S＝1/40）

1104SD は調査区西半部に位置する、南西－北東方向に伸びる直線的な溝である。他の溝ないし河道は周辺地形の傾斜と同様の南東－北西方向を基本とするが、1104SD のみは、これらと概ね直交する方向に掘削されている。検出長約 12.0 m、幅約 0.5～0.8 m、深さ約 0.5～0.7 m を残す。断面の形状は溝の南側では底の幅が狭い台形を呈し、北側ではＶ字形に近付く。溝の上半部は人為的に埋められており、遺物はいずれもこの上層部分から出土している。

1105SD と 1107SD は 1104SD の北西に位置する溝である。どちらも深さ約 0.1 m と浅く、大半が上層の耕作溝によって削平されている。1105SD の南端は 1104SD に接続するが、1104SD の埋め立てよりも先に 1105SD は埋没している。1105SD と 1107SD からは少量ながら、古墳時代後期の土器が出土している。1109SD は 1105SD と 1107SD の間に位置する。耕作溝による削平を受けてごく一部のみが残された状態である。遺構埋土は 1105SD と同様である。遺物は出土していない。

1126SD、1127SD、1133SD、1138SSD、1145SD は調査区の中央部に位置する南東－北西方向の溝状を呈する河道である。試掘調査２区で検出している 2001SD と 2002SD は、これらの河道に対応する遺構である。1126SD は幅約 1.6～3.2 m、深さ約 0.3 m を残す。1127SD よりも新しく、1145SD よりも古い段階の河道である。古墳時代後期後半の土器が出土している。1127SD は今回確認している古墳時代後期の河道の中で最も古い段階の流路である。幅約 6.8 m以上、深さ 0.8 m を残す。西岸は 1127SD より後の河道である 1134SD によって消失しており、元はより幅広の河道であったと考えられる。令和５（2023）年度調査成果を踏まえると、河底面まで掘り下げが行えておらず、実際の底面は図 17 に示すより下層に位置していた可能性もある。古墳時代後期の土器が出土しているが、量は他の河道より少ない。1133SD も遺構の重複関係から古い段階に位置付けられ、1133SD の埋没後に 1101SK や 1129SD が掘削されている。幅約 1.2～2.0 m、深さ約 0.5 m を残す。古墳時代中期末～後期の土器、動物骨が出土している。1138SD は幅約 3.4～4.1 m、深さ約 0.6 m を残す。古墳時代後期～飛鳥時代の土器が出土しており、量的には前者が多数を占める。1145SD は最も東側に位置する。幅約 3.2～5.6 m を残す。断面の形状は下半部が台形状に深くなり、上半部が大きく開く形状である。古墳時代中期末～飛鳥時代の土器が出土しており、古墳時代後期が最も多い。遺物の出土量が最も多い遺構である。須恵器には漆が付着したものが多く含まれる。また、動物骨片も出土している。

落ち込みは調査区東・西端の２ヶ所に存在する。1102SX は調査区東端部に位置する。調査区東端から西に約 9 m付近の地点から東に向かって緩やかに低くなる自然地形の落ち込みである。落ち込み北西部の上面において、古墳時代後期の土器の細片が多数、南北約 3.5 m、東西約 2.1 m の範囲に広がって出土している（図版７・11）。土器集中部からは滑石製臼玉 19 点が散乱した状態で出土し

ている。1144SX は調査区西端部に位置する深さ約 0.6 mの落ち込みである。落ち込み底面の形状は不整形である。落ち込みの上層は人為的に埋め立てられており、その埋土には古墳時代後期の土器がごく少量含まれる。

これらの遺構の他、河道の西岸一帯に複数ピットが存在する。1104SD 周辺のピットについては直線に並ぶ小規模な塀である可能性がある。1118SP からは弥生土器と古墳時代後期の須恵器片が出土している。その他では 1113SP から土師器の小片が出土しているのみである。

第 4 節　出土遺物

2019－4・2020－1 次調査で出土した遺物には、弥生土器・土師器・瓦器・石製品（玉類）・木製品・動物骨がある。出土遺物の量は遺物コンテナ約 60 箱である。

遺物の時期は古墳時代後期が多くを占め、その前後の時期が少量存在する。鎌倉時代以降の土器も出土しているが量は非常に少なく、図化が難しい小片が主である。

古墳時代後期～奈良時代の河道からは獣骨（図版 12）が出土している。馬や牛の骨であると考えられる。いずれも河道内に散乱した状態で出土しており、報告外にも遺物としての現地取り上げが困難な小片も複数存在していた。

以下に、出土遺構・層位ごとに主要な出土遺物について報告する（図 24～41）。

耕作溝群（図 24）

鎌倉時代以降に形成された耕作溝群であり、13 世紀以降の瓦器、土師器が少量出土している。量的には、下層遺構に由来する古代以前の遺物のほうが多い。

18 は瓦器埦である。大和型の埦である。口径 14.2cm、器高 4.5cm を測る。全体に器壁が摩滅しており細かな調整は不明であるが、内面にミガキが確認できる。高台の断面形はやや丸みを帯びた三角形である。

19 は土師器皿である。口径 10.0cm、器高 2.0cm を測る。平底から直線的に開く口縁部をもつ。薄手の作りである。

20～22 は須恵器坏の底部である。20 は高台の復元径 9.7cm を測る。口縁部は底部から直線的に開く形状であると考えられる。21 は高台の復元径 10.8cm を測る。22 は高台の復元径 10.2cm を測る。口縁部下半は湾曲気味の形状である。

23 は須恵器壺もしくは甕の口縁部である。二重口縁で、復元口径

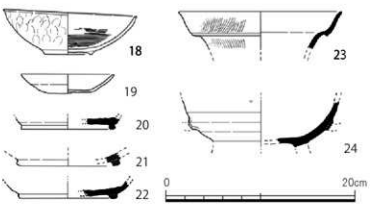


図 24　2019 － 4・2020 － 1 次調査　耕作溝群出土遺物（S ＝ 1/4）

17.6cm を測る。外面にはハケによる文様を二段に施す。24 は須恵器の把手付高坏である。坏部外面に把手下側の根元が遺っている。脚部には方形透かしを 5 ～ 6 方向に穿っていると考えられる。

1101SK（図 25）

25・26 は土師器二重口縁壺である。1101SK 出土土器は、いずれも表面が全体に摩滅している。25 は上段口縁部が垂直に立ち上がり、端部は丸く収める。外面には丸みを帯びた稜をもつ。26 は頸部が外反し、上段口縁部が外に開く形状である。器面は内外面とも平滑に仕上げられている。

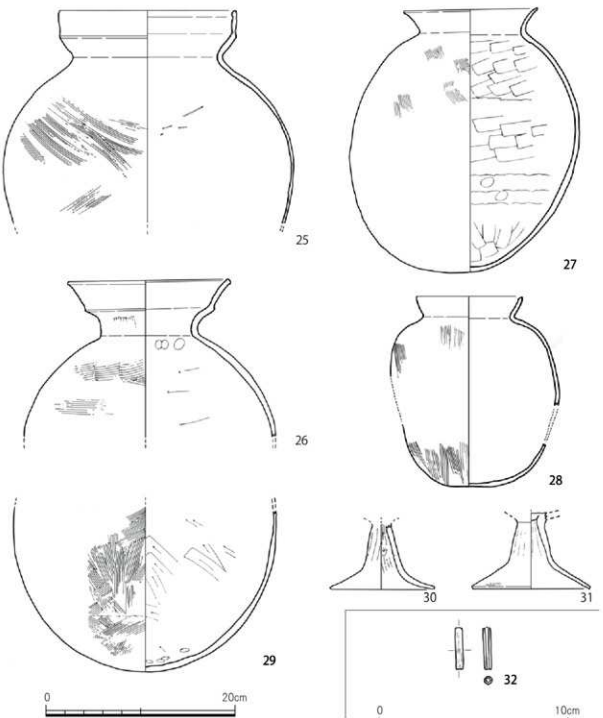


図 25　2019 － 4・2020 － 1 次調査　1101SK 出土遺物（S ＝ 1/4・1/2）

27・28は土師器甕である。27は体部が縦長の球形で、全体に歪みがある。体部下半は内外面に粘土紐の緩やかな凹凸が残る。28は同一個体と考えらえる上・下の破片をもとに作図している。肩部が広く張り出す形状である。底部は平底状を呈する。29は土師器甕もしくは壺の体部である。大型の球形体部で、外面には細かなハケ調整、内面にはケズリを丁寧に施す。

30・31は土師器高坏の脚部である。30は内面の脚柱部の中ほどの高さに成形時に生じた沈線が巡る。31は裾部が直線的に開く形状である。上部に坏底部から挿入した粘土が残る。

32は滑石製管玉である。長さ2.2cm、直径0.4cm、孔径0.2～0.3cmを測る。色調は灰オリーブ色を呈する。側面の一部が欠損しており、内部の孔が確認できる。現状の重量は0.22gで、欠損前は0.3g程度であったと考えられる。

1102SX（図26・27）

1102SXからは土器が破片状態で散乱して出土しているが、完形に近い状態まで接合できる土器も多く含まれる。

33～35は土師器高坏である。33は坏底部である。坏部と脚部の接続方法が観察できる破片である。34は脚柱部である。外面に面取りを施す。35は裾部で、脚柱部にかけて滑らかに立ち上がる。

36は土師器広口甕である。口径14.9cm、器高13.5cmを測る。内外面ともハケ調整を施す。

37は須恵器蓋である。口径8.8cm、器高3.3cmを測る小型の蓋である。頂部は尖る形状である。口縁端部には鈍い凹線が巡る。

38～47は須恵器蓋坏の蓋である。38は復元口径11.6cm、器高3.6cmを測る。外面の形状は全体に丸みを帯び、頂部と肩部の境が不明瞭である。39は肩部に明瞭な段が存在し、頂部のヘラケズリの範囲は狭い。胎土に混和物を多く含む。40は口径14.2cm、器高5.0cmを測る。肩部には浅い沈線を巡らせる。全体に器壁が摩滅している。41は完形状態で出土している。口径14.5cm、器高4.3cmを測る。肩部には断面V字形の深い沈線を巡らせる。ヘラケズリは頂部全体に施す。42は口径15.0cm、器高4.4cmを測る。頂部は平坦な形状で、並行する長い二本線のヘラ記号が存在する。43は口径14.7cm、器高4.7cmを測る。内面中央に同心円状の当て具痕がある。44は口径15.3cm、器高4.7cmを測る。裾広がりの形状である。肩部にはナデにより稜を摘まみ出している。45は口径15.2cm、器高4.5cmを測る。胎土に1～2㎜大の白礫を多く含む。46は復元口径15.0cm、器高3.6cmを測る。頂部中央が大きく凹んでおり、上面に粘土が帯状に付着していることから、別の個体の焼台として使われていたと考えられる。47は口径16.0cm、器高4.3cmを測る。肩部にごく浅い凹線を巡らせる。

48～58は須恵器蓋坏の身である。48は口径12.9cm、器高5.8cmを測る深めの坏身である。内面下半は回転ナデが強く施されており段が明瞭に残る。49は口径12.6cm、器高4.5cmを測る。底部が広く平底状に潰れている。50は残存径15.9cm、残存高3.8cmを測る。内面底部に当て具痕がある。51は口径14.6cm、器高4.9cmを測る。口縁端部は鈍い段をもたせる。52は口径11.5cm、器高4.8cmを測る。体部は丸みを帯び、口縁部は内傾する。53は口径13.6cm、器高4.3cmを測る。胎土に2㎜大の礫を多く含む。54は最大径15.0cm、残存高3.6cmを測る。口縁部は内傾する形状であると考えられる。55はほぼ完形状態で出土している。口径12.1cm、器高4.9cmを測る。他の個体よりも体部が全体にやや厚い。内面中央に当て具痕がある。56は口径11.6cm、残存高4.0cmを測る。

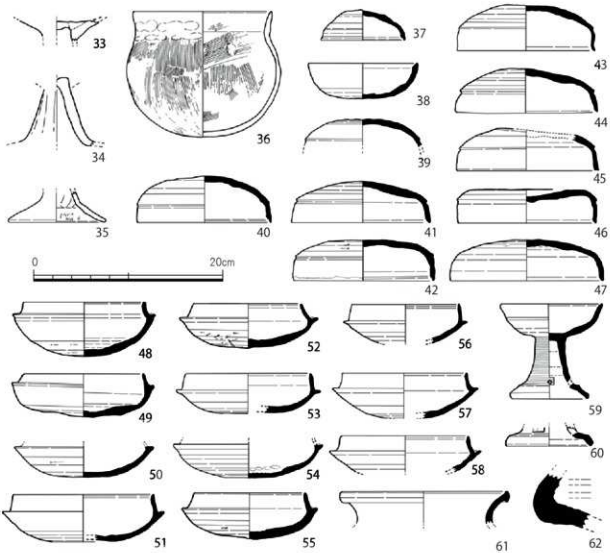


図 26　2019 － 4・2020 － 1 次調査　1102SX 出土遺物①（S ＝ 1/4）

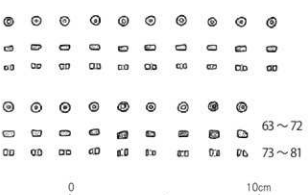


図 27　2019 － 4・2020 － 1 次調査
1102SX 出土遺物②（S ＝ 1/2）

口縁端部内側の低い位置に鈍い凹線を巡らせる。57 は口径 13.0cm、残存高 4.8cm を測る。口縁部は反り上がる形状である。58 は口径 13.8cm、残存高 3.7cm を測る。

59・60 は須恵器高坏である。59 はほぼ完形の無蓋高坏である。脚部の低い位置に円形透かしを三方向に穿つ。脚部にはハケ調整を丁寧に施す。60 は裾部である。下幅約 1.2cm の方形透かしを三方向に穿つ。

61 は須恵器甕の口縁部である。復元口径 17.2cm を測る。62 は須恵器大甕の頸部である。器壁の厚さは 1.6～1.9cm と非常に厚い。外面体部には幅広のタタキを施す。小片のため径は不明である。

63～81 は滑石製の臼玉である。19 点出土しており、一連の品であったと考えられる。直径 0.5cm、厚さ 0.3～0.4cm、孔径 0.1～0.2cm を測る円柱形を呈する。個々の重量は 0.13～0.21 g である。

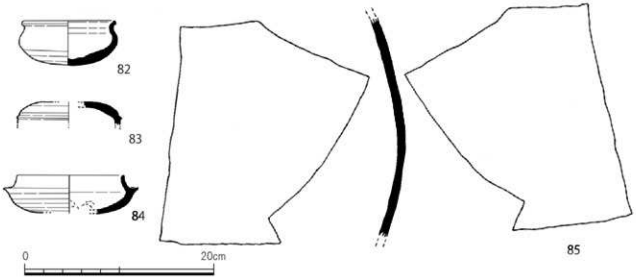


図 28　2019 － 4・2020 － 1 次調査　1104SD 出土遺物（S ＝ 1/4）

1104SD（図 28）

82 は須恵器小型鉢である。口径 9.5cm、器高 4.6cm を測る。頸部が屈曲する椀形の体部に、短く屈曲する口縁部をもつ。外面下半に粗めのヘラケズリを施し、他はナデ調整で仕上げる。83 は須恵器蓋である。焼成がやや悪く内面は橙色を呈する。84 は須恵器蓋坏の身もしくは有蓋高坏である。復元口径 11.4cm を測る。85 は須恵器大甕の体部片である。図化したものと同一個体の破片が複数出土しているが形状は復元できない。外面にはタタキを密に施し、内面は当て具痕を丁寧にナデ消している。

1118SP（図 29）

86 は須恵器蓋坏の身である。復元口径 10.2cm、器高 3.5cm を測る。底部はヘラケズリにより平底状になる。87 は弥生土器甕の底部である。表面が摩滅している。

1125SD（図 30・31）

88 は土師器坏である。復元口径 12.4cm、器高 3.9cm を測る。口縁端部は小さく外側に折り返す。内面が被熱により炭化している。89 は土師器鉢である。復元口径 30.0cm を測る。外面体部および内面口縁部にハケ調整を、内面体部にはケズリを施す。90 は土師器甑の把手である。甑体部には内外面ともハケ調整を施す。把手を外側から押し付けて取り付けた際に体部内面にひび割れが生じている。91 は土師器甕である。体部はやや下膨れの形状であると考えられる。全体に薄く煤が付着する。外面は被熱による表面の剥落部分が存在する。

92・93 は須恵器蓋坏の蓋である。92 は口径 13.8cm、器高 3.6cm を測る。全体に丸みを帯びた形状で、ヘラケズリとナデ調整の境目が不明瞭である。93 は口径

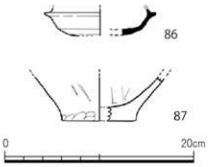


図 29　2019 － 4・2020 － 1 次調査
1118SP 出土遺物（S ＝ 1/4）

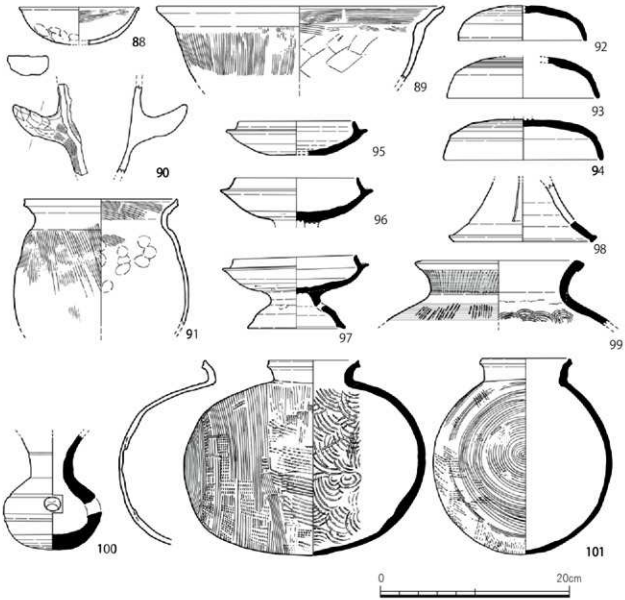


図 30　2019－4・2020－1 次調査　1125SD 出土遺物①（S＝1/4）

15.8cm、器高 4.2cm を測る。ヘラケズリが粗く施されており、カキ目がある。93 は有蓋高坏の蓋である。復元口径 16.8cm、残存高 4.7cm を測る。つまみは失われているが底径 2.0cm 程度であったと考えられる。

95 は須恵器蓋坏の身である。復元口径 12.9cm、器高 3.5cm を測る。口縁部の立ち上がりは短い。

96～98 は須恵器高坏である。96 は有蓋高坏の坏部で、復元口径 13.0cm を測る。脚部には方形もしくは三角形の透かしを三方向に穿つ。97 はほぼ全体が残存しており、口径 13.0cm、器高 7.9cm を測る。脚部には円形透かしを三方向に穿つ。口縁部には漆が薄く付着している。98 は脚部である。方形と考えられる透かしを三方向に穿つ。焼成は倒置状態で行われている。

99 は須恵器甕の口縁部である。口径 16.3cm を測る。外面は頸部に上下方向のハケ調整、体部にタタキを施した後、それぞれ回転ハケ調整で仕上げている。

100 は須恵器瓶である。体部は球形である底部が狭い平底になっており座りが良い。体部は焼成時に生じた胎土内の空気の膨らみが複数存在する。外面および内面底部中央に自然釉が付着する。

101 は完形の須恵器横瓶である。内面にはタタキの当て具痕と、側面から封をするための粘土貼り付けによる段差が確認できる。外面は両側面に螺旋状のカキ目が存在する。

102 は木製の下駄である。縦長 23.6cm を測る。残存横幅は 5.4cm で、元はこの倍程度の横幅であったと考えられる。前穴と後穴のうち一ヶ所が遺存している。歯は前後とも摩滅しているようで、高さは最大で約 0.8cm である。

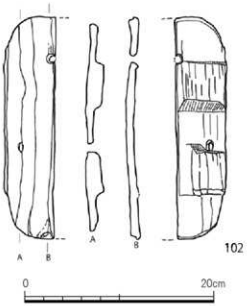


図 31　2019 － 4・2020 － 1 次調査
1125SD 出土遺物②（S ＝ 1/4）

1126SD（図 32）

103 は土師器小形壺である。復元口径 10.0cm を測る。内面全体が被熱により炭化している。

104・105 は土師器高坏である。104 は脚柱部で、縦に細長い透かしを三方向に穿つ。坏部との接合面に接続用の刻み目を施している。105 はラッパ状に開く脚部である。坏底部との接続部周りに粘土を貼り足している。

106 は土師器の把手である。小型で、鍋の把手である可能性が考えられる。107 は土師器甑の底部である。平底である。蒸気孔は楕円形と方形を組み合わせている。108 は土師器鍋の体部である。側面に把手の剥落痕がある。内外面ともハケ調整を施しており、内面のほうが粗い。内面がハケ調整後の指押さえ痕がある。

109 は須恵器蓋坏の蓋である。口径 14.4cm、器高 4.5cm を測る。頂部は平坦である。肩部の稜は上から折り返して作られている。110・111 は須恵器蓋坏の身もしくは有蓋高坏である。110 は復元口径 12.7cm を測る。111 は復元口径 11.8cm を測る。112 は須恵器高坏もしくは脚付壺である。上幅が狭い方形もしくは三角形の透かしを三方向に穿つ。

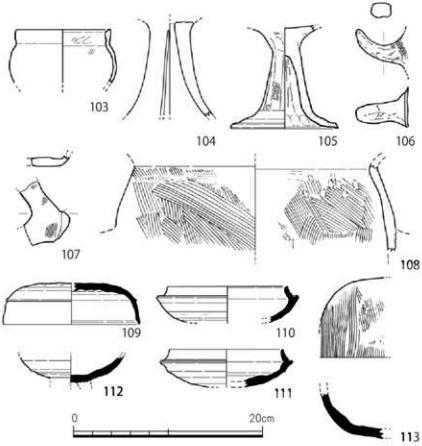


図 32　2019 － 4・2020 － 1 次調査　1126SD 出土遺物（S ＝ 1/4）

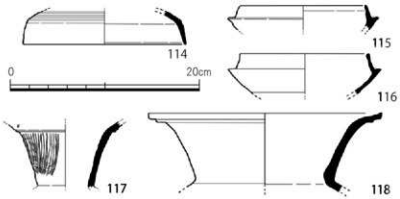


図 33　2019 － 4・2020 － 1 次調査　1127SD 出土遺物（S ＝ 1/4）

113 は須恵器横瓶の肩部である。外面には螺旋状のカキ目、内面にはナデ調整を施す。101 よりも頂部と底部の平坦面が長い体部形状であると考えられる。

1127SD（図 33）

114 は須恵器蓋坏の蓋である。復元口径 17.0cm を測る。肩部上のナデ調整が強く、カキ目状の線が残る。115・116 は須恵器蓋坏の身である。115 は復元口径 13.5cm を測る。立ち上がりは上部が緩やかに内側に屈曲する。116 は復元口径 14.0cm を測る。口縁端部は面を作り出すが稜は丸みを帯びる。

117 は須恵器甕の口縁部である。外面に縦長の波状文を施すが、波状の線はほぼ潰れており下半部でわずかに確認できる程度である。118 は須恵器壺の口縁部である。復元口径 24.8cm を測る。頸部から直線的に広がった後、上部が外側に大きく開く。

1129SD（図 34）

119 は須恵器甕の体部である。瓦質状の焼成である。外面はタタキの後にハケ調整を施す。

1133SD（図 35）

120・121 は土師器甕である。120 は口径 12.2cm、器高 11.2cm を測る。全体が摩滅しているが外面のハケ調整が確認できる。121 は復元口径 14.4cm、残存高 17.8cm を測る。口縁部はわずかに外反して立ち上がる。122 は土師器長胴甕である。同一個体と考えられる上・下の破片から復元図かしているため、全体形状は不確定である。復元口径 24.4cm を測る。外面および内面口縁部にスパンの長いハケ調整を施す。全体に煤が付着し、特に外面下半に多い。123 は土師器把手である。甑もしくは鍋の把手であると考えられる。

図 34　2019 － 4・2020 － 1 次調査　1129SD 出土遺物（S ＝ 1/4）

124・125 は須恵器蓋坏の蓋

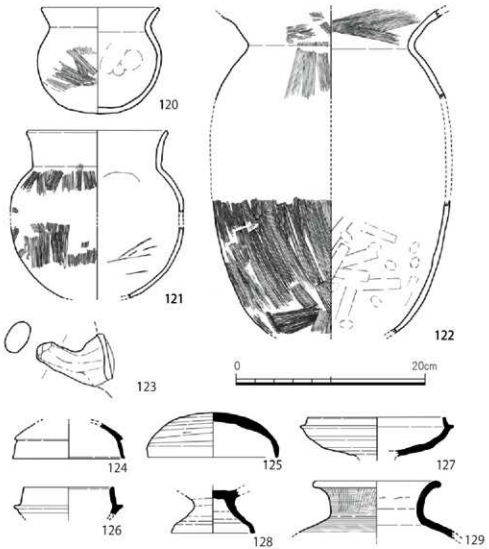


図 35　2019 － 4・2020 － 1 次調査　1133SD 出土遺物（S ＝ 1/4）

である。124 は復元口径 12.0cm を測る。肩部の稜は鋭い。125 は復元口径 13.6cm、器高 4.5cm を測る。全体に丸みを帯びた形状であるが、肩部上の一部がナデにより窪んでいる。126 は須恵器蓋坏の身である。復元口径 9.6cm を測る。口縁端部は内傾する平坦面をもつ。

127 は須恵器高坏の坏部である。復元口径 14.4cm を測る。立ち上がりは短い。128 は須恵器高坏の脚部であると考えられる。底部径 8.6cm を測り、透かしは無い。129 は須恵器壺の口縁部である。復元口径 12.7cm を測る。

1134SD（図 36）

130 は土師器坏である。口径 9.8cm、器高 2.9cm を測る。内面には底部中央から放射状にミガキを施す。外面にはハケ状工具の刺突痕が存在する。131 は土師器高坏の裾部である。内外面に指頭圧痕が多く存在する。

132～138 は土師器甕である。132 は口径 12.4cm、器高 12.3cm を測る。外面の口縁部以下に煤が付着するが範囲は限定的である。133 は口径 12.7cm、器高 11.0cm を測る。底部は平底気味の形状である。口縁部の内外面に煤が薄く付着する。134 は復元口径 15.0cm を測る。口縁端部をつまみ

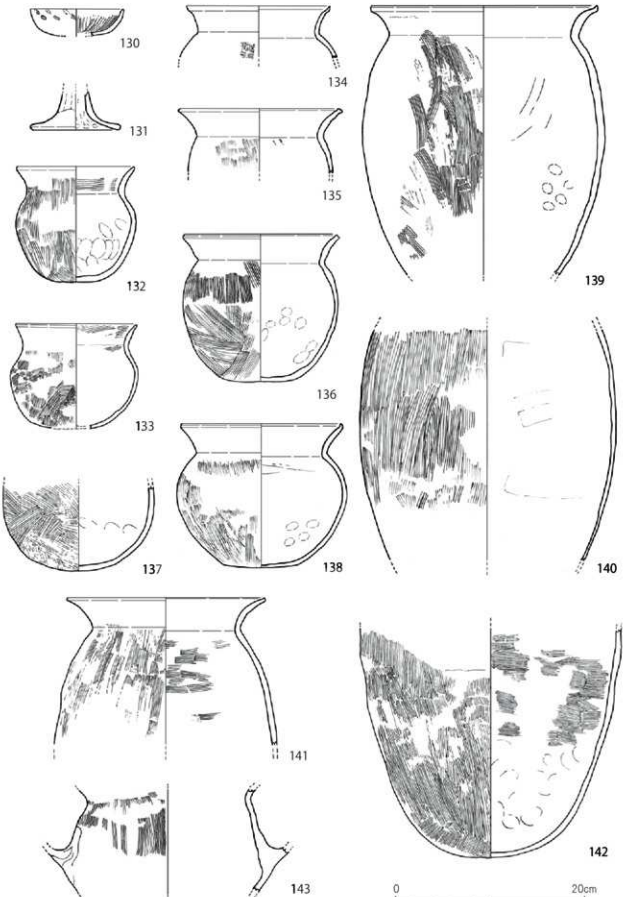


図36　2019－4・2020－1次調査　1134SD出土遺物①（S＝1/4）

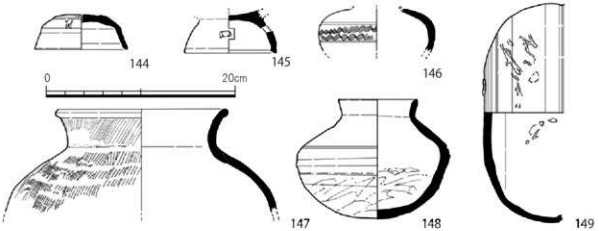


図 37　2019 － 4・2020 － 1 次調査　1134SD 出土遺物②（S ＝ 1/4）

上げて外側に面を作り出す。内面に煤が付着する。135 は復元口径 16.6cm を測る。136 は同一個体と考えられる上・下の破片から復元して図化している。復元口径 16.0cm、復元高 15.9cm を測る。底部は平底だが稜は不明瞭である。外面底部を除く全体に煤が薄く付着する。137 は球形の体部の下半である。底部は丸底で、据え付け時の擡り付けで中央が摩耗している。138 は復元口径 16.7cm、器高 15.2cm である。内面体部にはケズリを丁寧に施しており、ケズリの単位が不明瞭である。外面体部に煤が付着する。

139～142 は土師器長胴甕である。139 は復元口径 24.0cm、体部最大径 27.6cm を測る。体部は上半に比べて下半が細い形状であると考えられる。140 は体部で復元最大径 27.0cm を測る。外面中ほどに広く煤が付着する。141 は復元口径 20.8cm を測る。体部は内外面ともハケ調整を施す。外面肩部以下に煤が付着する。142 は体部下半である。復元最大径 27.2cm を測る。底部はわずかに平底状である。外面に煤が付着し、内面底部に少量炭化物が付着する。

143 は土師器鍋である。薄く反り上がる形状の把手であったと考えられる。体部上半は丸みを帯びる形状であるが、把手の取り付けによる歪みで頸部に向かって直線を描く部分も存在する。

144 は須恵器蓋である。口径 9.5cm、器高 3.5cm を測る小型品である。肩部に二本線のヘラ記号がある。145 は須恵器の壺もしくは高坏の脚である。断面方形の工具の刺突による透かしを四方向穿つが、仕上がりは不整形であり透かしの位置も一定ではない。146 は須恵器廰の体部である。孔部分は遺存していない。波状文を二段に施すが、自然釉に覆われ大部分が消えた状態である。147 は須恵器甕である。口径 17.8cm を測る。148 は須恵器短頸壺である。口径 8.4cm、器高 12.8cm を測る。体部は厚手の作りである。肩部に沈線を巡らせ、一部は沈線が二重になる。149 は須恵器提瓶の体部である。口縁部および把手部分は残存していない。外面には自然釉が付着する。

1138SD（図 38）

150～153 は土師器高坏である。150 は椀形高坏の頸部である。坏部と脚部の接続部に幅広のハケ調整を放射状に施す。151 は椀形高坏であると考えられる。脚柱部から坏部底面にかけて長くハケ調整を施す。円形透かしを三方向に穿つ。152 は脚柱部である。外面に幅広の面取りを施す。裾部付近が被熱により炭化している。153 は脚部である。外面に横方向のミガキを施し、内面もナデ調整で平滑に仕上げている。

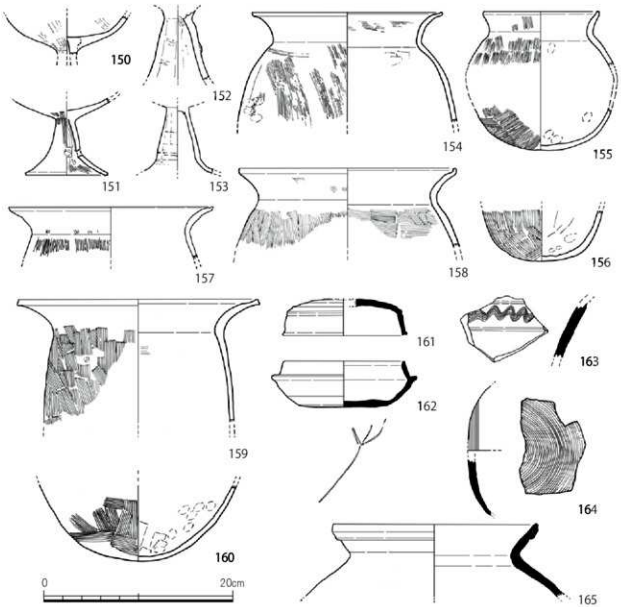


図 38　2019 － 4・2020 － 1 次調査　1138SD 出土遺物（S ＝ 1/4）

154～156 は土師器甕である。154 は復元口径 20.0cm を測る。155 は復元口径 12.0cm、器高 15.0cm を測る。全体が被熱により脆くなっている。体部の肩部以下に煤が付着する。156 は体部下半である。わずかに平底を呈し、座りが良い。157～160 は土師器長胴甕である。157 は復元口径 21.8cm を測る。158 は復元口径 22.6cm を測る。体部は肩部が張り出す形状であると考えられる。外面全体に煤が付着する。159 は口縁が大きく開く形状である。内外面とも全体に煤が付着し、特に外面頸部付近に多い。160 は底部である。外面には接地面以外に煤が付着する。

161 は須恵器蓋坏の蓋である。復元口径 14.8cm、残存高 3.8cm を測る。162 は須恵器蓋坏の身である。復元口径 12.6cm、器高 4.7cm を測る。外面底部にヘラ記号が存在する。163 は須恵器器台の坏部片である。164 は須恵器横瓶もしくは提瓶の体部である。胎土には炭化粒を多く含む。165 は須恵器甕である。復元口径 21.4cm を測る。

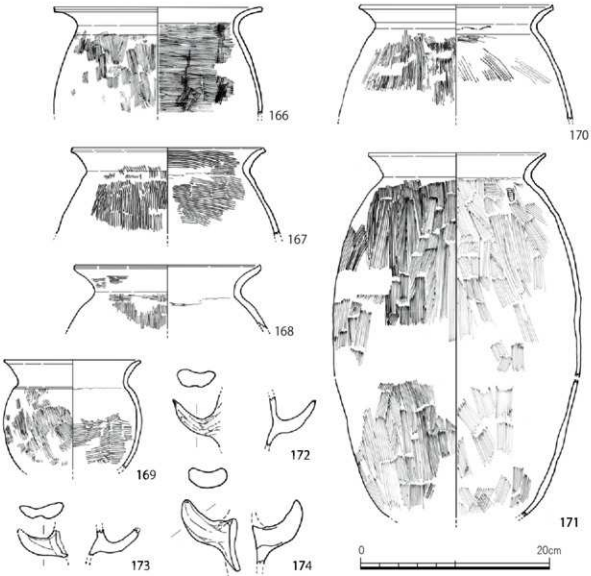


図 39　2019 － 4・2020 － 1 次調査　1145SD 出土遺物①（S ＝ 1/4）

1145SD（図 39・40）

166～169 は土師器甕である。166 は甕の上半部で、口縁部は外に大きく開く。復元口径 21.6cm を測る。体部は内外面とも細かなハケ調整を施す。167 は長胴甕である可能性もある。復元口径 20.0cm を測る。内面体部に煤が付着する。168 は口縁部である。復元口径 19.8cm を測る。内面のケズリは粗い。外面に煤が薄く付着する。169 は復元口径 14.4cm を測る。内面下半のハケ調整は外面と比べて非常に粗い。

170・171 は土師器長胴甕である。170 は復元口径 20.0cm を測る。外面肩部以下に煤が薄く付着する。171 は復元口径 18.5cm、器高 38.5cm 以上を測る。体部下半に煤が付着する。

172～174 は土師器把手である。172 は体部が薄く、小型の鍋であると考えられる。173 も鍋であると考えられる。把手にはナデ調整を強く施す。174 は把手を体部に取り付けた後、外面全体にに粘土を貼り足していることが確認できる。

175～180 は須恵器蓋坏の蓋である。175 は口径 16.0cm、器高 4.0cm を測る。頂部のヘラケズリを丁寧に施しており、回転ナデ調整に近い仕上がりとなっている。176 は復元口径 14.2cm、器高 4.0cm を測る。頂部に彫りが深い二本線のヘラ記号がある。177 は復元口径 14.0cm、器高 3.9cm を測る。

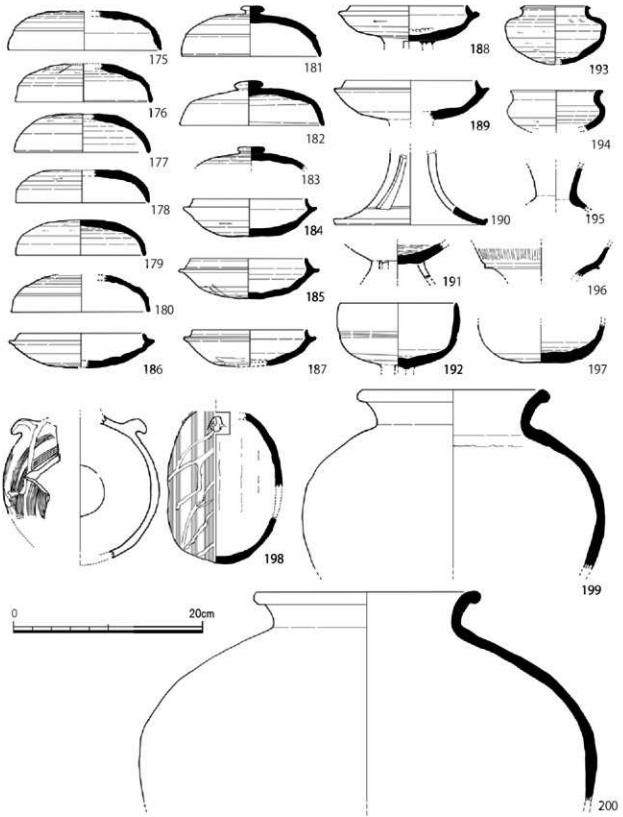


図 40　2019 － 4・2020 － 1 次調査　1145SD 出土遺物②（S ＝ 1/4）

内面に漆が付着している。178 は口径 14.0cm、器高 3.4cm を測る。内面全体に漆が付着している。179 は復元口径 14.2cm、器高 3.6cm を測る。内面中央に小型の当て具痕がある。180 は口径 14.4cm、残存高 3.8cm を測る。ヘラケズリの末端部分を強く押し付けた結果、形状に歪みが生じている。181～183 は須恵器有蓋高坏の蓋である。181 は口径 15.0cm、器高 5.5cm を測る。上面の一

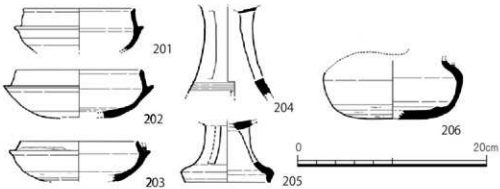


図 41　2019 － 4・2020 － 1 次調査　Ⅰ～Ⅲ層出土遺物（S ＝ 1/4）

部に自然釉が付着する。182 は復元口径 14.9cm、器高 4.8cm を測る。頂部はヘラケズリの後、回転ナデ調整を施す。内面には漆が付着する。183 は頂部が平坦なつまみが付く。181・182 より小型の蓋である。184 ～ 187 は須恵器蓋坏の身である。184 は復元口径 12.0cm、器高 3.9cm を測る。内面全体と外面口縁部に漆が付着する。185 は復元口径 12.1cm、器高 4.7cm を測る。外面に二本線のヘラ記号がある。186 は復元口径 13.0cm、器高 3.6cm を測る。内面全体に漆が付着する。187 は口径 12.2cm、器高 3.9cm を測る。胎土に 0.1～0.5cm 大の白礫を多く含む。

188～192 は須恵器高坏である。188 は坏部である。口径 12.4cm を測る。脚部には方形の透かしを二方向に穿つと考えられる。坏部内面全体および外面口縁部の一部に漆が付着する。189 は復元口径 14.7cm を測る。内面全体に漆が付着する。190 は脚部である。幅約 0.8～1.5cm の方形透かしを三方向に穿つ。191 は頸部である。脚付壺である可能性もある。坏底部には当て具痕が存在する。192 は深い椀形の高坏である。坏部外面の底部付近にのみ自然釉が付着しており、倒置状態で焼成したことが確認できる。

193 は須恵器短頸壺である。口縁端部は短く外に折り返す。194 は須恵器小型鉢である。復元口径 10.2cm を測る。195 は須恵器平瓶の口縁部である。内外面とも部分的に自然釉が付着する。196 は須恵器壺もしくは甕の口縁部である。外面に櫛描文を施す。197 は壺もしくは瓶類の体部である。外面に自然釉が付着する。198 は須恵器提瓶である。体部径 16.4cm、体部厚 11.9cm を測る。肩部に外下方へ折り曲げる突起が二ヶ所に付く。内面の体部片側に、成型後に粘土を貼り付けて封をした際の段差が存在する。外面の広範囲に自然釉が厚く付着する。199・200 は須恵器甕である。199 は口径 19.0cm、体部最大径 31.6cm を測る。内面頸部には口縁部取り付け時の段差が残る。200 は口径 23.0cm、体部最大径 48.2cm を測る大型の甕である。

基本層序Ⅰ～Ⅲ層出土遺物（図 41）

201～203 は須恵器蓋坏の身である。201 は復元口径 11.6cm を測る。口縁端部は内傾する明瞭な面をもつ。202 は復元口径 13.0cm、器高 5.0cm を測る。203 は復元口径 12.3cm を測る。外面のヘラケズリは粗く施す。204・205 は須恵器高坏である。204 は方形透かしを三方向に穿つ。205 は台形の透かしを三方向に穿つ。206 は須恵器平瓶の体部である。口縁部裾の肩部に自然釉が付着する。

第Ⅴ章　橿教委 2021 － 6 次調査の成果

第 1 節　調査の方法

調査区の位置と形状

調査区は、事業敷地の北部に位置する（図 1）。調査区の北側約 7 mの地点に、橿教委 2019－4・2020－1 次調査の調査区が位置している。この調査の後に行われた橿文 2023 － 2 次調査の調査区は、この調査区の南側約 12 mの地点に位置している。

調査区は東西に長い長方形で、規模は東西 16 m・南北 5.8 m・面積 94 ㎡である。

調査の手順

調査は遺構面直上まで重機（バックホウ）による掘削を行い、以降の掘削・記録作業は人力で行っている。調査地点は 2017 年の盛土造成工事に伴う厚さ約 1 mの造成土が施されており、遺構面までの深度が深くなることから、現代の水田耕作土の上面の高さで調査区の四周に犬走を設けている。

遺構名

本調査で確認した遺構には 2 桁の遺構番号＋遺構記号（その種別を示す 2 字のアルファベット。内容は文化庁発行の『発掘調査の手引き』に従う）の形で遺構名を付与している。遺構番号は遺構種別を問わず通し番号で 1 から順に番号を付与している。

第 2 節　基本層序

基本層序は以下のとおりである。調査区内では、各基本層序の上面高は概ね水平である。

橿教委 2021 － 6 次調査　基本層序（図 42・43）

Ⅰ層：2017 年の造成工事盛土（厚さ約 1.0～1.2 m。上面の標高 55.0～55.2 m）

Ⅱ層：水田耕作土（現代。厚さ約 0.1～0.2 m。上面の標高 54.0～54.2 m）

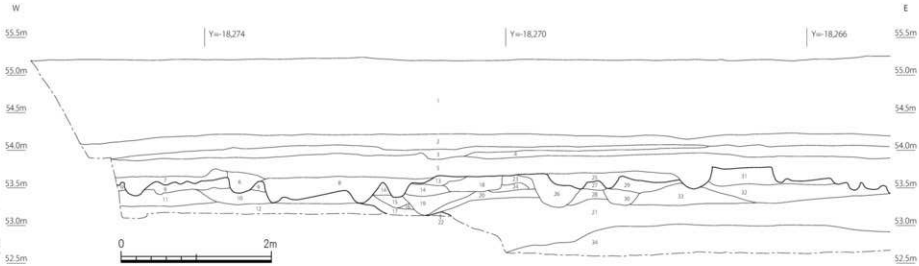
Ⅲ層：灰オリーブ色砂質土（床土。厚さ約 0.1 m。上面の標高 54.0 m）

Ⅳ層：褐色砂質土（中世以降の耕作層。耕作溝の埋土を含む。厚さ約 0.2～0.3 m。上面の標高 53.7～53.9 m）

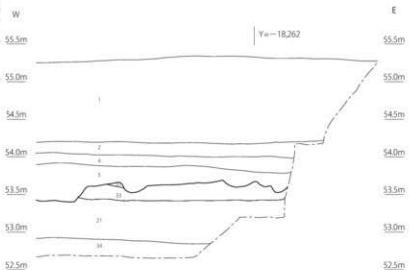
Ⅴ層：褐色、暗灰黄色、オリーブ褐色微砂土（上面が上層・中層・下層の遺構面。河川堆積層。厚さ 0.5 m以上。
上面の標高 53.5～53.6 m）

Ⅰ層は 2017 年の造成工事の盛土である。この盛土の厚さは事業敷地の地点によって異なるが、本発掘調査を実施している敷地北側では概ね 1 mである。

Ⅱ層は現代の水田耕作土である。厚さは約 0.1～0.2 mである。調査区全体に概ね均一に広がって



基本層序Ⅰ層：1 層、基本層序Ⅱ層：2 層、基本層序Ⅲ層：3・4 層、基本層序Ⅳ層：5～8 層、
基本層序Ⅴ層：9～12・22 層、18SD：13～21・23・24・26～34 層



1. 現代盛成土
2. 5Y3/2　オリーブ黒色砂質土（水田耕作土（現代））
3. 5Y4/2　灰オリーブ色砂質土（水田床土（現代））
4. 2.5Y4/3　オリーブ褐色砂質土（水田床土（現代））
5. 10YR4/4　褐色砂質土（耕作層）
6. 2.5Y4/2　暗灰黄色粘質土（土器含む。中世耕作溝、鉄分含む）
7. 5Y 4/2　灰オリーブ粘質土（土器、鉄分含む。中世耕作溝）
8. 2.5Y4/3　オリーブ褐色粘質土
9. 7.5YR4/3　褐色微砂土（部分的に中砂混じる。地山）
10. 2.5Y5/2　暗灰黄色微砂土（一部に黒褐色土含む。マンガン、鉄分。地山）
11. 2.5Y4/3　オリーブ褐色微砂土（部分的に中砂混じる。マンガン、鉄分含む。地山）
12. 2.5Y5/2　暗灰黄色微砂土（鉄分、マンガン含む。地山）
15. 10YR4/2　灰黄褐色微砂土
16. 10YR4/2　灰黄褐色微砂土
17. 10YR5/1　褐灰色粗砂（φ1mm程度の粗砂が主体）
18. 10YR3/3　暗褐色砂質土（少量の土器、炭化物含む。褐色ブロック含む）
19. 10YR3/2　黒褐色砂質土（下層由来の粗砂多く混じる）
20. 10YR3/2　黒褐色砂質土
21. 10YR5/1　褐灰色中砂
22. N4/0　灰色粘土（地山）
23. 2.5Y4/2　暗灰黄色粗砂
24. 10YR3/3　暗褐色砂質土
25. 2.5Y4/2　暗灰黄色粘質土（中世耕作溝、鉄分含む）
26. 10YR3/1　黒褐色砂質土（鉄分、少量の土器含む、粗砂多く混じる）
27. 10YR3/1　黒褐色砂質土（鉄分含む）
28. 10YR4/1　暗灰色砂質土（土器含む、粗砂多く含む）
29. 10YR3/4　暗褐色砂質土（土器、鉄分含む）
30. 10YR3/2　黒褐色砂質土（鉄分多く含む、土器含む）
31. 10YR4/3　にぶい黄褐色砂質土（土器含む、粗砂多い）
32. 10YR4/4　褐色砂質土（土器含む）
33. 2.5Y4/3　オリーブ褐色砂質土
34. 5Y5/1　灰色中砂

図 42　調査区北壁土層断面図（S＝1/50）

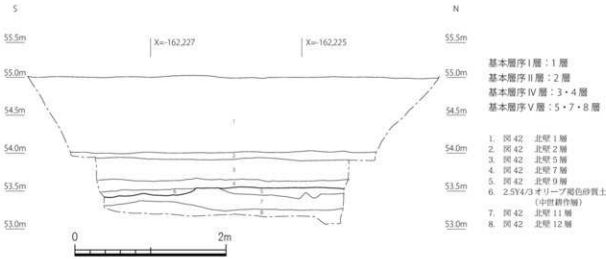


図43　調査区西壁土層断面図（S＝1/50）

いる。試掘調査（2016－9・2017－1次調査）実施時点での表土である。

Ⅲ層は現代の床土である。調査区西側に向かって厚さが薄くなる傾向にあり、調査区西壁土層断面では確認できない。

Ⅳ層は中世以降の耕作層である。耕作溝の埋土もこれに含む。厚さは約0.2～0.3 mである。耕作溝の掘削部分を除き、調査区全体に概ね均一な厚さで広がっている。

Ⅴ層は微砂層からなる河川堆積層である。上面が遺構面である。上面の標高は53.5～53.6 mで、厚さは0.5 m以上である。2019－4・2020－1次調査の基本層序Ⅳ層と対応する層であると考えられる。本調査区のⅤ層上面から掘りこまれている17SPからは、布留式甕の細片が出土しており、古墳時代以降の遺構ではあるが、明確に時期が特定できない。このため、本調査区ではⅤ層の時期を特定できる要素がなく、2019－4・2020－1次調査から古墳時代後期より古い時代の堆積であると考えたい。

第3節　遺構

遺構は大きく3段階に分けることができる。鎌倉時代の遺構と鎌倉時代以前の時期不明の2段階の遺構である。鎌倉時代の遺構を上層遺構、鎌倉時代以前の時期不明の遺構を中層・下層遺構と捉えて調査・記録作業を行っているが、遺構の検出面は同一である。

以下に各時期の遺構について上層から順に述べる。

鎌倉時代の遺構（上層遺構）

この時期の遺構には耕作溝がある。

本調査で検出した耕作溝は調査区全体に分布している。耕作溝の規模は概ね幅0.1～0.5 m、深さは0.05～0.3 mを残す。東西方向のものと南北方向のものがあり、南北溝のものが多い。南北方向の溝には、東西方向の溝より古いものと新しいものの2種類があり、耕作の時期は少なくとも3時期以上に分けることができる。出土遺物の大半は下層遺構に由来するものである。ただし、13世紀の

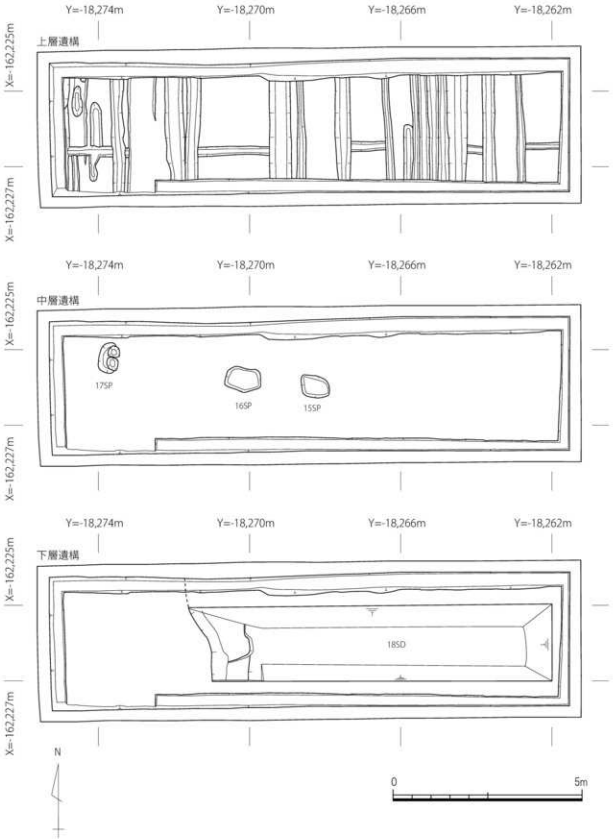
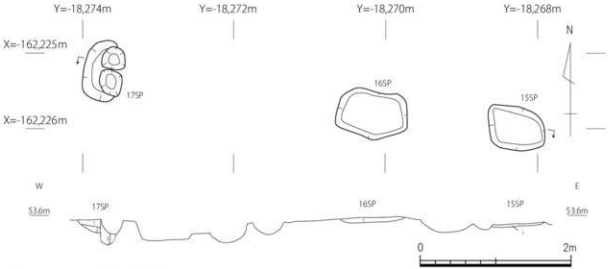


図 44　上層・中層・下層遺構平面図（S = 1/100）



17SP　1.　7.5YR3/2　黒褐色（土器含む）
　　2.　7.5YR4/1　褐灰色砂質土
　　3.　10YR3/3　暗褐色（土器多く含む柱痕）　16SP　1.　7.5YR3/3　暗褐色砂質土（土器含む）　15SP　1.　7.5YR3/2　黒褐色砂質土（土器含む）

図 45　15SP・16SP・17SP 平面・断面図（S ＝ 1/50）

瓦器椀が出土しており、少なくともこの時期には耕作溝が存在していたと考えられる。

鎌倉時代以前の遺構（中層遺構）

この時期の遺構にはピットがある。

ピットは 3 基検出している。15SP は平面形が不整な隅丸方形で、東西 0.75 m、南北 0.55 mを測る。深さは 0.05 mを残す。16SP は平面形が不整な隅丸方形で、東西 0.9 m、南北 0.6 mを測る。深さは 0.05 mを残す。いずれも深さが非常に浅く、後世の耕作活動で削平されている。17SP は長径 0.5 m、短径 0.8 mを測り、平面形は不整な楕円形である。深さは 0.3 mを残す。断面で直径 0.1 mの柱痕が確認できる。布留式甕の細片が出土している。周囲に 17SP と組み合う柱穴の有無を確認したが、調査区内には存在しなかった。

鎌倉時代以前の遺構（下層遺構）

この時期の遺構には溝 1 条がある。18SD は調査区東半を占める北－南方向の溝である。本調査では西岸のみを確認している。幅は 10.5 m以上である。調査区の安全保持のため掘削を途中で終了しており、溝底面を確認できなかったが、深さは 1.1 m以上である。埋土は粗砂を多く含む砂質土で構成されている。上面は土壌化が進み、比較的安定した面を形成しており、15SP・16SP はこの安定面の上に掘削されている。18SD からはクルミなどの種子や木材片、弥生時代以前と考えられる土器片などが出土している。橿教委 2019 － 4・2020 － 1 次調査や橿文 2023 － 2 次調査では古墳時代～奈良時代の流路が確認されているが、18SD はこれらの流路とは異なるものである。いずれの調査も古墳時代以前の河川堆積層（橿教委 2019 － 4・2020 － 1 次－基本層序 4 層、橿文 2023 － 2 次－基本層序Ⅳ層）を遺構面としており、18SD はこれらの層に対応すると考えられる。

第 4 節　出土遺物

櫃教委 2021-6 次調査で出土した遺物には、土師器、須恵器、瓦器、木材片、種子がある。出土遺物の量は遺物コンテナ 1 箱分である。

遺物は細片が多く、図化に耐えないものが大半である。時期が確認できるものは非常に少ないが、古墳時代や鎌倉時代のものがある。また、磨滅が進んでいるものが多い。

以下で報告するものは、いずれも重機掘削時に出土した遺物である。

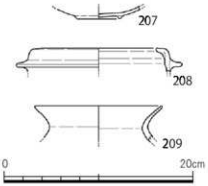


図 46　2001-6 次調査出土遺物（S ＝ 1/4）

207 は瓦器椀の底部である。磨滅が進み、ミガキは確認できない。高台は断面形が三角形を呈する。高台径は 4.4cm を測る。

208 は土師器羽釜である。口縁部を内面に折り返す。

209 は土師器甕である。口縁部がやや外反する。磨滅のため、調整は不明である。

第Ⅵ章　橿文 2023 － 2 次調査の成果

第 1 節　調査の方法

調査区の位置と形状

調査区は、事業敷地の北部に位置する（図 1）。調査区の北側約 10 mの地点に、橿教委 2021－6 次調査の調査区が位置している。この調査の後に行われた橿文 2023 － 2 次調査の調査区は、この調査区の南側約 12 mの地点に位置している。また、調査区内には橿教委 2016―9・2017―1 次調査の調査区が含まれ、調査区の中央やや西寄りに、7 区が南北方向に位置している。

調査区は試掘調査で判明した遺跡の範囲に合わせて三角形に設定している。規模は東西約 53.0 m・南北約 52.0 m・面積 1,384.0 ㎡である。

調査の手順

調査は遺構面直上まで重機（バックホウ）による掘削を行い、以降の掘削・記録作業は人力で行っている。調査地点は 2017 年の盛土造成工事に伴う厚さ約 1 mの造成土があり、遺構面までの深度が深くなることから、現代の水田耕作土の上面の高さで調査区の 3 辺に犬走りを設けている。

遺構名

本調査で確認した遺構には 2 桁の遺構番号＋遺構記号（その種別を示す 2 字のアルファベット。内容は文化庁発行の『発掘調査の手引き』に従う）の形で遺構名を付与している。遺構番号は遺構種別を問わず、通し番号で 1 から順に番号を付与している。

第 2 節　基本層序

基本層序は以下のとおりである。調査区内では、各基本層序の上面高は概ね水平である。

橿文 2023 － 2 次調査　基本層序（図 47・48）

Ⅰ層：2017 年の造成工事盛土（厚さ約 1.0 m。上面の標高 55.1 m）

Ⅱ層：水田耕作土（現代。水田耕作土。試掘調査時の表土。厚さ約 0.1 m。上面の標高 54.1 m）

Ⅲ層：にぶい黄褐色砂質土（中世以降の耕作層。耕作溝埋土を含む。厚さ約 0.1～0.2 m。上面の標高 54.0 m）

Ⅳ層：灰黄褐色砂質土（古墳時代後期以前の流路の堆積。上面が遺構検出面。厚さ約 0.3 m以上。上面の標高 53.6 m）

Ⅴ層：黒褐色粘質土（古墳時代後期以前に自然堆積層。調査区南西部に存在。上面が遺構検出面。厚さ 0.2～0.3 m。上面の標高 53.7 m。）

Ⅵ層：褐色粘質土（自然堆積層。調査区南西部に存在。厚さ約 0.2～0.3 m。上面の標高 53.5 m。）

Ⅶ層：褐灰色粘土（自然堆積層。調査区南西部に存在。厚さ 0.3 m以上。上面の標高 53.3 m。）

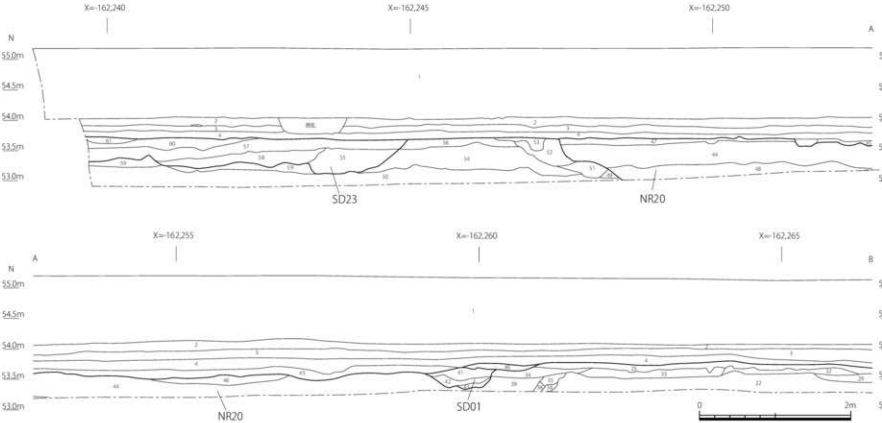


図47　調査区東壁土層断面図（S＝1/50）

1. 現代造成土
2. 水田耕作土(田)
3. 2.5Y3/4　オリーブ褐色砂質土(床土)
4. 2.5Y4/2　暗灰黄色砂質土
(旧耕作層,マンガン含む,上部少量含む)
5. 7.5Y4/4　褐色砂質土(鉄分含む,粗砂混じる)
6. 10YR5/4　にぶい黄褐色粘質土
7. 10YR4/1　暗灰色粘土(ベース)
8. 10YR4/2　灰黄褐色砂質土(粗砂,鉄分含む)
9. 10YR5/4　にぶい黄褐色砂質土(鉄分含む)
10. 10YR5/4　にぶい黄褐色粘質土(鉄分含む)
11. 10YR5/1　暗灰色粘土(鉄分含む)
12. 2.5Y4/1　黄灰色粘質土
13. 2.5Y4/1　黄灰色微砂(礫多く含む)
14. 10YR5/4　にぶい黄褐色砂質土(鉄分多く含む)
15. 2.5Y5/1　黄灰色砂質土(粗砂多く含む)
16. 10YR5/3　にぶい黄褐色砂質土(鉄分多く含む)
17. 10YR4/2　灰黄褐色粘質土(鉄分含む)
18. 10YR4/3　にぶい黄褐色粘質土(マンガン含む)
19. 10YR6/2　灰黄褐色砂質土(粘質土やや含む)
20. 10YR5/3　にぶい黄褐色粘質土(マンガン含む)
21. 7.5Y4/3　暗オリーブ色砂質土(粗砂含む)
22. 10YR7/1　灰白色微砂
23. 7.5YR5/4　にぶい褐色砂質土(マンガン含む)
24. 7.5YR4/2　灰褐色粗砂
25. 10YR5/2　灰黄褐色砂質土(鉄分,マンガン含む)
26. 10YR6/2　灰黄褐色粘質土(マンガン含む)
27. 2.5Y3/2　黒褐色粘質土(マンガン含む)
28. 2.5Y4/4　オリーブ褐色粘質土
29. 10YR4/3　にぶい黄褐色砂質土(鉄分含む)
30. 10YR4/2　灰黄褐色粘質土(鉄分,マンガン含む)
31. 10YR4/1　暗灰色砂質土(鉄分少量含む)
32. 10YR4/3　にぶい黄褐色砂質土(鉄分含む)
33. 2.5Y4/3　オリーブ褐色砂質土(鉄分含む)
34. 2.5Y4/4　オリーブ褐色砂質土(鉄分,マンガン含む)
35. 10YR5/3　にぶい黄褐色砂質土(鉄分含む)
36. 10YR5/2　灰黄褐色砂質土(鉄分含む)
37. 2.5Y5/2　暗灰黄色砂質土(鉄分含む,黒褐色土含む)
38. 2.5Y5/1　黄灰色砂質土(鉄分含む)
39. 2.5Y5/2　暗灰黄色砂質土(鉄分含む)
40. 2.5Y5/2　暗灰黄色砂質土(マンガン含む)
41. 2.5Y5/2　暗灰黄色シルト(明褐色粗砂多く含む)
42. 10YR6/2　灰黄褐色粘質土(粗砂含む)
43. 10YR6/4　にぶい黄橙色粗砂(鉄分含む)
44. 10YR4/1　暗灰色微砂

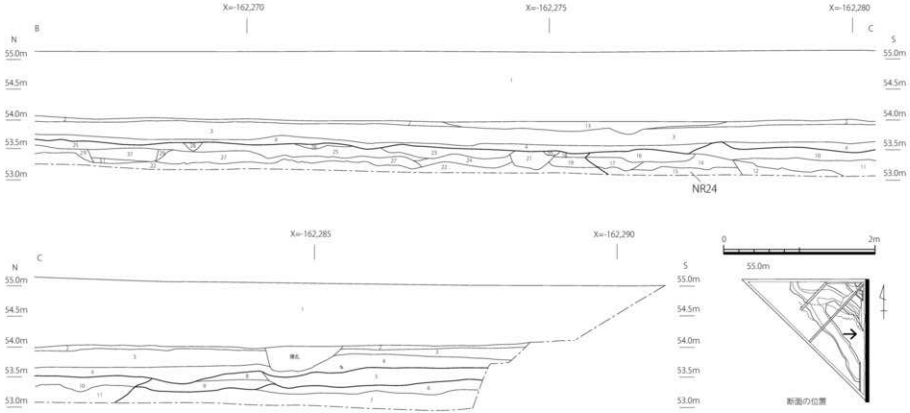


図 48　調査区東壁土層断面図（S＝1/50）

45.　2.5Y4/1　黄灰色砂質土(鉄分多く含む)
46.　2.5Y6/2　灰黄色シルト(鉄分多く含む)
47.　2.5Y5/2　暗灰黄色粘質土(鉄分、少量のマンガン含む、旧耕作層)
48.　7.5Y4/1　灰色シルト(粘質土混じる)
49.　5Y3/1　オリーブ黒色砂質土
50.　N4/0　灰色粘土(地山)鉄分少量含む
51.　10YR4/4　褐色砂質土(鉄分多く含む)
52.　10YR4/3　にぶい黄褐色砂質土(鉄分多く含む)
53.　10YR5/2　灰黄褐色粘質土(マンガン、鉄分含む、旧耕作層)
54.　7.5YR4/4　褐色砂質土(鉄分多く含む)
55.　7.5YR4/3　褐色砂質土(褐色灰褐砂混じる、鉄分多く含む)
56.　7.5YR4/4　褐色砂質土(鉄分多く含む)
57.　7.5YR4/6　褐色砂質土(鉄分、マンガン含む)
58.　7.5Y4/3　暗オリーブ色砂質土(鉄分含む粗砂多く混じる)
59.　7.5YR5/1　褐灰色粗砂(鉄分多く含む)

基本層序Ⅰ層：1 層、基本層序Ⅱ層：2・3・13 層、基本層序Ⅲ層：4・18・20・45 層、
基本層序Ⅳ層：5・8・9・50・59 層、基本層序Ⅵ層：6 層、基本層序Ⅶ層：7 層、
SD30：49・51 ～ 54・56 層、SD23：55・57・58・60・61 層、NR20：19・21 ～ 27
・29・31 ～ 39・44・46 ～ 48 層、SD01：41 ～ 43 層、NR24：10 ～ 12・14 ～ 17 層
※図面上では、21 層は 18 層よりも新しいが、誤認であり、本来は 21 層は 18 層よりも古い

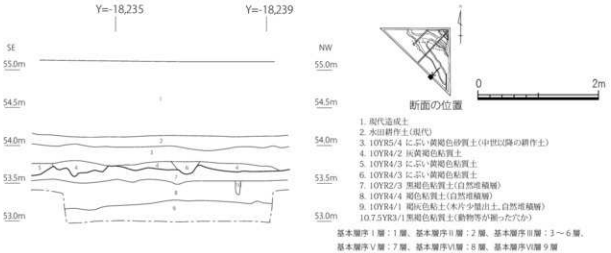


図 49　調査区南西壁土層断面図（S ＝ 1/50）

Ⅰ層は 2017 年の造成工事の盛土である。この盛土の厚さは事業敷地の地点によって異なるが、本発掘調査を実施している敷地北側では概ね 1 mである。

Ⅱ層は現代の水田耕作土である。調査区全体に概ね均一に広がっている。試掘調査（橿教委 2016－9・2017－1 次調査）実施時点での表土である。

Ⅲ層は中世以降の耕作層である。耕作溝の埋土もこれに含む。厚さは約 0.2～0.3 mである。耕作溝の掘削部分を除き、調査区全体に概ね均一な厚さで広がっている。中世の遺物が少量出土しており、その中には 13 世紀後半の瓦器埴が含まれている。

Ⅳ層は古墳時代後期以前の河川堆積層である。この層の上面が上層・下層遺構の遺構面である。この層は遺物を含まない自然流路であるため、今回の調査では調査対象としていない。

Ⅴ層は古墳時代後期以前の自然堆積層である。調査区南西部にのみ存在する。黒褐色粘質土からなる安定した地盤である。Ⅳ層が存在しない場所では、この層の上面が上層・下層遺構の遺構面となる。

Ⅵ層はⅤ層より古い自然堆積層である。Ⅴ層の下層でのみ確認している。遺物は出土していない。

Ⅶ層はⅥ層より古い自然堆積層である。調査区南西部～南部でのみ確認している。遺物は出土していない。

第 3 節　遺構

遺構は鎌倉時代の遺構と古墳時代後期～飛鳥時代の大きく 2 時期に分けることができる。鎌倉時代の遺構を上層遺構、古墳時代後期～飛鳥時代の遺構を下層遺構と捉えて調査・記録作業を行っているが、遺構の検出面は同一である。

以下に各時期の遺構について上層から順に述べる。

鎌倉時代の遺構（上層遺構）

この時期の遺構には耕作溝がある。

本調査で検出した耕作溝は調査区全体に分布している。耕作溝の規模は概ね幅 0.1～0.3 m、深さは 0.05～0.3 mを残す。耕作溝の方向は南北方向のものが大半で、東西方向の溝は数条のみである。遺構の重複関係から南北方向の溝よりも古い。また、南北方向の溝は重複関係から少なくとも 3 時

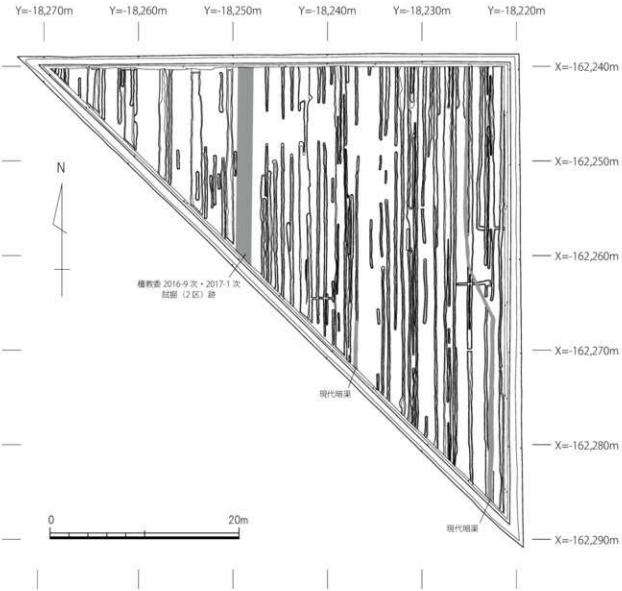


図 50　2023―2 次調査　上層遺構平面図（S = 1/400）

期に分けることができる。出土遺物の大半は下層遺構に由来するものである。ただし、13 世紀後半の瓦器椀が出土しており、少なくともこの時期には耕作溝が存在していたと考えられる。

古墳時代後期～飛鳥時代の遺構（下層遺構）

この時期の遺構には自然流路、溝、土坑、ピットがあり、調査区西端を除く場所に分布する。遺構の時期は、古墳時代後期～飛鳥時代のものが大半である。ただし、遺構の重複関係から鎌倉時代以前の遺構であることは明かであるものの、厳密な時期を特定できなかった遺構もある。

SD01 は調査区北東を南東―北西方向に流れる溝である。深さ約 0.3 m、幅約 0.8 mを残し、断面形は逆台形を呈する。遺構の重複関係から後述する NR20 よりも新しく、飛鳥時代から鎌倉時代のいずれかの時期の遺構である。

NR20 は調査区北東を南東―北西方向に流れる自然流路である。北に向かって流路の幅が広くなり、深さ約 1.6 m、最大幅約 16.0 mを残す。断面形は、南側では「V」字形を呈するが、北側では逆台

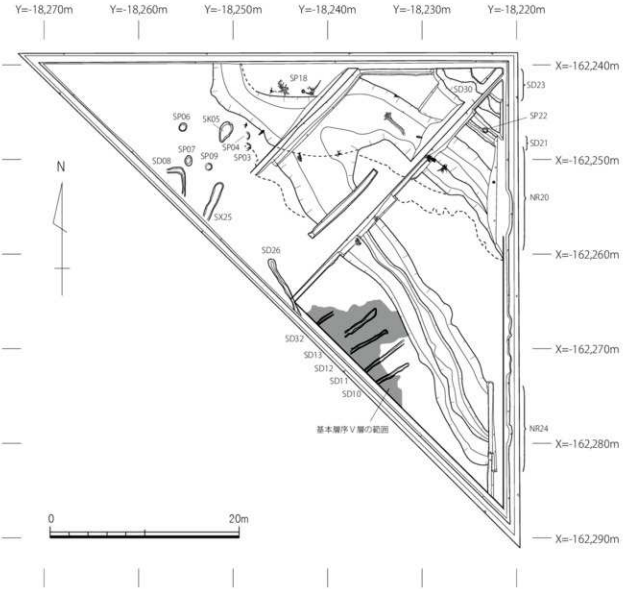


図 51　2023－2 次調査　下層遺構平面図（S = 1/400）

形を呈する。また、北東側の岸は幅約 2.0 mのテラス状の段になっている。今回の掘削範囲は NR20 の最終段階に止まっているが、当初の段階の流路は北部分の北東側の岸が調査区外に広がっていたと考えられる。また、流路の最終段階の両岸には木の根株が複数残されており、幹の直径が 0.4 mほどのものもある。これらの木は、古墳時代後期から飛鳥時代後半までの間に成長し、伐採されている。埋土は堆積状況から上層と下層の 2 時期に分けることができる。上層はシルト、下層は粗砂を主体とし、下層が比較的水量の多い流水環境下で埋没した後、上層は緩やかに埋没している。なお、出土量の多寡はあるものの、上層・下層のいずれにも古墳時代後期～飛鳥時代後半の遺物が含まれており、層による明確な時期差は認めがたい。出土遺物には古墳時代後期～飛鳥時代後半にかけての土師器、須恵器、韓式土器、動物骨・歯（牛・馬）、木製品、金銅製品（劣化が激しく実測図を作成できなかったため、本報告書では写真のみを掲載）、種子がある。土器は完形品が多く、破断面が磨滅していないものが多い。遺物は調査区から比較的近い場所から流されてきたものが大半であると考えられる。また、磨滅が進んだ埴輪片が出土しており、上流に古墳が存在した可能性がある。遺構の重複関係から SD01 より古く、NR24、SD30 より新しい。遺構の時期は飛鳥時代である。

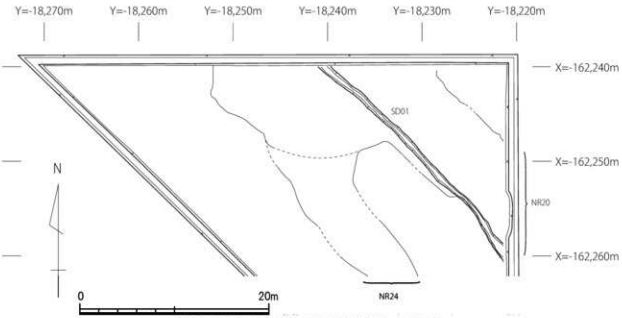


図 52　2023－2 次調査　SD01 平面図（S ＝ 1/400）

NR24 は調査区を南東―北西方向に流れる自然流路である。深さ約 1.2 m、最大幅約 7.5 mを残す。断面形は緩やかな「V」字状を呈する。埋土は褐灰色～黒褐色の粘土・粘質土を主体とする。出土遺物は少ないが、古墳時代後期～飛鳥時代の土師器、須恵器、木製品（下駄、板材）、動物骨（種別不明）が出土した。出土遺物に NR20 との時期差は認められないが、流路の北端が NR20 によって破壊されており、NR20 より古い遺構である。

SD21 は NR20 の北東岸に形成されたテラス状の平坦面に位置する南東―北西方向の溝である。深さ約 0.3 m、幅約 0.8 mを残す。出土遺物がなく詳細な遺構の時期は不明であるが、重複関係より SP22 よりも古く、更に NR20 より先に埋没しており、飛鳥時代以前の遺構である。

SD30 は調査区北東隅に位置する北西―南東方向の溝である。ただし、検出範囲が狭く、他の種類の遺構である可能性もある。南西岸は NR20、北東岸は SD 23 によって破壊されており、詳細な規模・形状は不明であるが、深さ約 0.4 m、幅約 1.4 mを残す。NR20 より古く、飛鳥時代以前の遺構である。

SD23 は調査区北東隅に位置する遺構である。遺構は調査区外に広がっているため、規模・形状は不明であるが、確認できる範囲では深さ約 0.4 m、幅約 6.0 mを残す。SD30 より新しく、飛鳥時代以降の遺構である。

SD10～13、32 は調査区南部に位置する北東―南西方向の溝である。いずれも深さ約 0.05 m、幅約 0.3～0.5 mを残す。断面形は薄い皿状を呈する。これらの 5 本の溝は約 1.5～2.0 mの間隔でほぼ並行に並んでおり、遺構の形状、埋土も似ていることから、同時期の遺構と考えられる。出土遺物はなく、重複関係から耕作溝より古いことから、鎌倉時代以前の遺構である。

SD25 は調査区西部に位置する南南西―北北東方向の溝である。深さ約 0.05 m、幅約 0.7 mを残す。出土遺物から、古墳時代中期後半の遺構である。

SD26 は調査区南西部に位置する北西―南東方向の溝である。断面系は逆台形を呈し、深さ約 0.3 m、幅約 0.3～0.7 mを残す。出土遺物は土師器細片のみで、古墳時代以降の遺構であるが、詳細な時期は不明である。

SD08 は、調査区西部に調査区西部に位置する南北方向の溝で、途中でほぼ直角に西に向かって屈曲する。深さ約 0.1 m、幅約 0.2～0.4 mを残す。出土遺物はなく、耕作溝との重複関係から鎌倉時

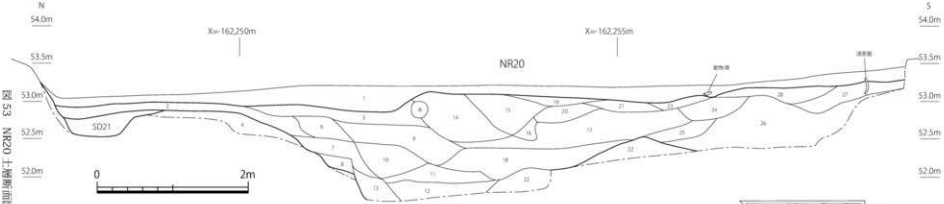
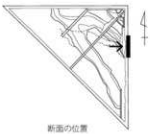


図 53　NR20 土層断面図（S＝1/50）

1. 2.5Y4/1　黄灰色シルト(焼の痕、一部ラミナ含む)
2. 2.5Y3/2　黒褐色砂質土(木質、粗砂含む)
3. 2.5Y3/1　黒褐色粘質土(下の方はラミナ、上層なし、木質含む)
4. 5Y2/1　黒色粘土(地山)
5. 2.5Y3/1　黒褐色シルト混じり砂質土(微砂がラミナ状に混じる)
6. 2.5Y4/1　黄灰色砂質土(黄褐色土、微砂混じり、炭化物含む)
7. 2.5Y3/1　黒褐色粘質土(木質混じる、砂質土混じる)
8. 2.5Y3/1　黒褐色砂質土(一部ベース由来の粘土混じる、木質含む)
9. 2.5Y3/1　黒褐色砂質土(一部で褐色砂混じる、炭化物含む)
10. 2.5Y4/1　黄灰色粘土、シルト(粘土とシルトが互層状に重なる、粘土は木質多く含む)
11. 5Y3/2　オリーブ黒色粗砂層(中粗砂を主体とする)
12. 5Y4/1　灰色粗砂層(粗砂を主体とする、粘質土混じる、木質含む)
13. 2.5Y3/2　黒褐色粘質土(粗砂、V層もしくは地山由来の粘質土を主体とする)
14. 5Y5/1　灰色シルト混じりの粗砂(焼痕、上層、φ0.5～2cmほどの礫多く含む)
15. 10Y4/1　灰色シルト(木質を多く含む)
16. 10Y4/1　灰色シルト
17. 10Y6/1　灰色微砂層(中砂～粗砂主体、上層含む)
18. 10Y5/1　灰色粗砂層(φ0.5～1cmほどの小礫含む、上層含む)
19. 2.5Y4/1　黄灰色シルト(木質含む、ラミナ)
20. 5Y5/1　灰色微砂層(細砂～中砂主体、ラミナ)
21. 5Y6/1　灰色粗砂層(φ0.5～2cmほどの小礫含む)
22. 5Y4/1　灰色粘質土(地山由来の粘質土混じる、上層含む)
23. 5Y4/1　灰色砂質土(粗砂、φ0.5～1cmほどの小礫含む)
24. 2.5Y4/1　黄灰色砂質土(木質多く含む)
25. 5Y4/1　灰色砂質土(木質少量含む)
26. 5Y7/1　灰白色微砂土(木質少量含む、一部に粗砂ラミナ)
27. 10Y5/1　灰色シルト(上層、粗砂含む)
28. 2.5Y4/1　黄灰色シルト



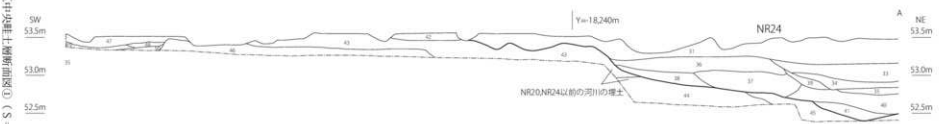


図 54　調査区中央土層断面図①（S＝1/50）

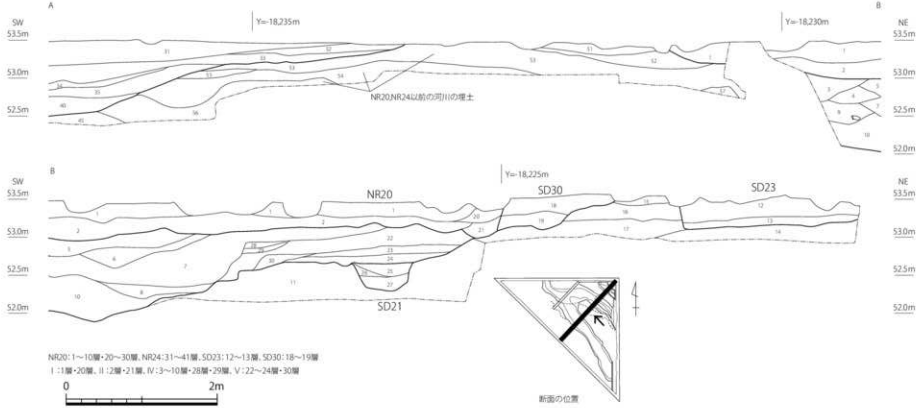


図 55 調査区中央土層断面図（S＝1/50）

1. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト（上部・馬歯等含む，鉄分含む）
2. 2.5Y4/1 黄灰色（東壁 SD20－1 層と同じ）
3. 7.5Y4/1 灰色粘質土（木質含む，炭化物）
4. 7.5Y3/2 オリーブ黒色シルト（粗砂褐色微砂含む，木質）
5. 10YR4/1 褐灰色シルト（粗砂多量に含む）
6. 10Y4/1 灰色シルト（東壁－15 層と同じ ただし粗砂が多量に混じる）
7. 2.5Y3/1 黒褐色砂質土（東壁－9 層と同じ）
8. 10Y6/1 灰色微砂層（東壁－17 層と同じ）
9. 2.5Y3/2 黒褐色粘質土（粗砂が多量に混じる）
10. 5Y4/1 灰色粗砂層（東壁－12 層と同じ）
11. 5Y3/2 オリーブ黒色粘土（ベース，木質含む）
12. 5YR4/3 にぶい赤褐色砂質土（粗砂，上部含む）
13. 10YR3/2 黒褐色粘質土（粗砂，鉄分含む）
14. 10YR5/1 褐灰色粘土（地山）
15. 7.5YR5/6 明褐色砂質土
16. 7.5YR6/6 橙色砂質土（粗砂混じる）
17. 10YR4/2 灰黄褐色粗砂（古墳時代以前の河川堆積）
18. 7.5YR5/6 明褐色砂質土（粗砂混じる）
20. 10YR5/2 灰黄褐色砂質土（粗砂混じる）
21. 10YR3/2 黒褐色砂質土
22. 2.5Y4/1 黄灰色砂質土（上部，木質含む）
23. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土（木多く含む，漏水）
24. 2.5Y3/2 黒褐色砂質土（シルト・粗砂がうすい層状に混じる）
25. 2.5Y3/2 黒褐色粘質土（ラミナ状の堆積）
26. 5Y3/1 オリーブ黒色砂質土（シルト・粗砂が混じる）
27. 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土（木質含む）
28. 5Y4/1 灰色シルト
29. 10YR5/2 灰黄褐色粗砂
30. 7.5Y3/1 オリーブ黒色砂質土（灰オリーブ微砂混じる，木含む）
31. 5Y5/2 灰オリーブ色シルト（鉄分含む）
32. 5Y4/1 灰色シルト（鉄分含む）
33. 5Y4/2 灰オリーブ色（鉄分含む 層状に粗砂混じる）
34. 7.5Y4/1 灰色粘質土（微砂ブロック多く混じる）
35. 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土（木含む）
36. 10YR3/1 黒褐色粘質土（粗砂多く混じる）
37. 10YR4/1 褐灰色粘質土（木多く混じる）
39. 10YR4/1 褐灰色粘質土（木質含む）
40. 2.5Y3/1 黒褐色砂質土（粗砂多く混じる木含む）
41. 2.5Y5/1 黒褐色粘質土（木質多く含む）
42. 2.5Y4/1 黄灰色砂質土
43. 2.5Y6/1 黄灰色砂質土
44. 7.5Y4/1 灰色粘土
45. 10YR3/1 黒褐色粘土（縞食上，ベース）
46. 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質土
47. 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質土
48. 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土
49. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土（粗砂多く含む）
50. 10YR4/4 褐色砂質土
51. 10YR7/1 灰白シルト（鉄分多く含む，粗砂混じる）
52. 2.5Y7/1 粗砂（鉄分少量含む）
53. 10YR4/1 褐灰色砂質土
54. 10YR4/1 褐灰色粘質土（木含む）
55. 2.5Y4/4 黄灰色砂質土（木多く含む）
56. 5Y6/1 灰色砂質土

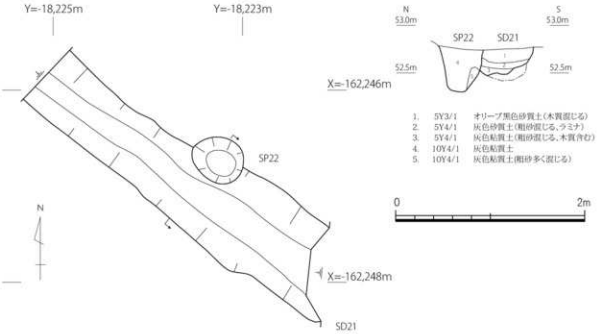


図 56　SD21・SP22 平面・断面図（S = 1/40）

代以前の遺構である。

SK05 は調査区西部に位置する不整円形の土坑である。断面形は薄い皿状を呈し、深さ約 0.3 m、長径約 2.3 m、短径約 1.3 m を残す。須恵器細片が出土しており、古墳時代中期後半以降の遺構である。

SP06 は調査区西部に位置するピットである。平面形は円形で、深さ約 0.2 m、直径約 0.8 m を残す。

SP07 は調査区西部に位置するピットである。平面形は楕円形で、深さ約 0.1 m、長径約 1.2 m、短径約 0.8 m を残す。

SP09 は調査区西部に位置するピットである。平面形は円形で、深さ約 0.1 m、直径約 0.7 m を残す。土師器の長胴甕（375）がほぼ完形で出土している。飛鳥時代の遺構である。

SP03 は調査区西部に位置するピットである。試掘調査区（2 区）に削平されており、全容は不明であるが、平面形は円形と考えられる。深さ約 0.25 m、直径約 0.8 m を残す。遺物は出土しておらず、遺構の時期は不明である。

SP04 は調査区西部に位置するピットである。試掘調査区（2 区）に削平されており、全容は不明であるが、平面形は円形であると考えられる。深さ約 0.35 m、直径約 0.8 m を残す。遺物は出土しておらず、遺構の時期は不明である。

SP22 は NR20 の北東岸に形成されたテラス状の平坦面に位置するピットである。平面形は円形で、深さ約 0.6 m、幅約 0.6 m を残す。出土遺物はなく詳細な時期は不明であるが、重複関係より SD21 より新しく、NR20 の埋没より古いことから、飛鳥時代以前の遺構である。

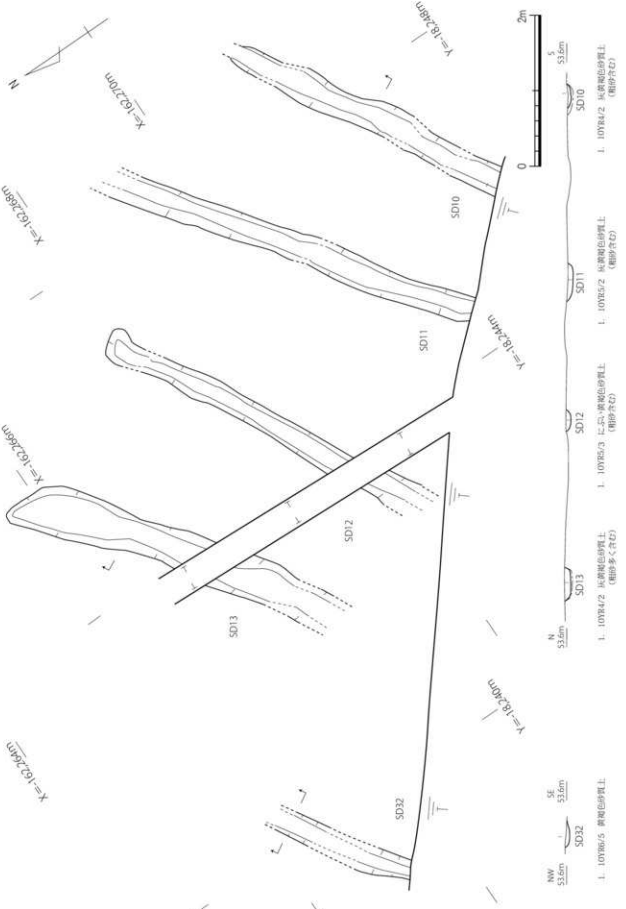


図 57　SD10～SD13・SD32 平面・断面図（S＝1/50）

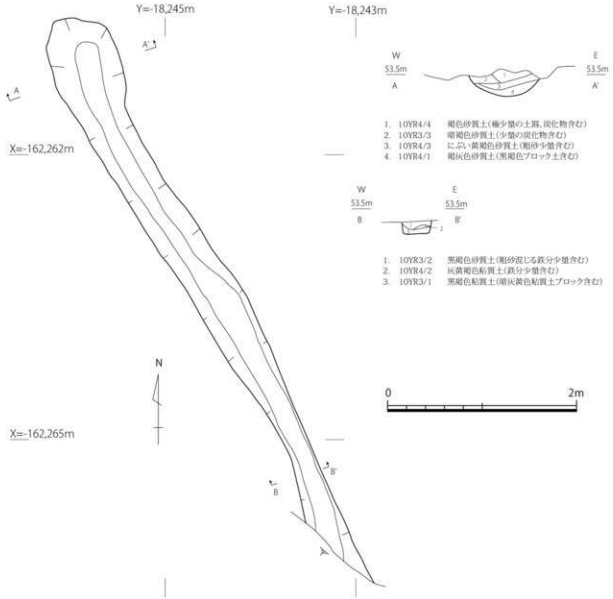


図 58　SD26 平面・断面図（S = 1/40）

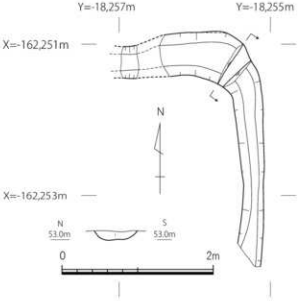


図 59　SD08 平面・断面図（S = 1/50）

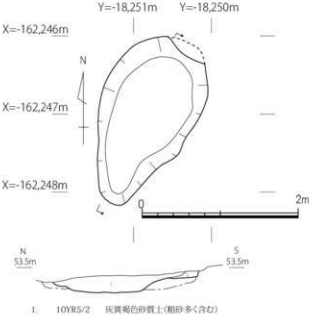


図 60　SK05 平面・断面図（S = 1/50）

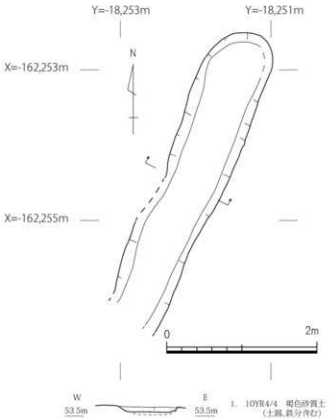


図 61　SD25 平面・断面図（S ＝ 1/50）

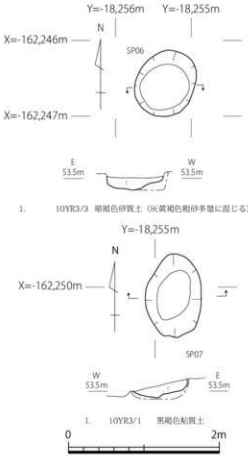


図 62　SP06・SP07 平面・断面図（S ＝ 1/50）

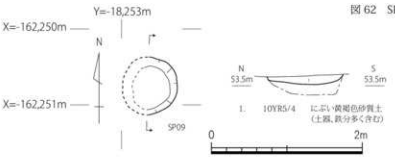


図 63　SP09 平面・断面図（S ＝ 1/50）

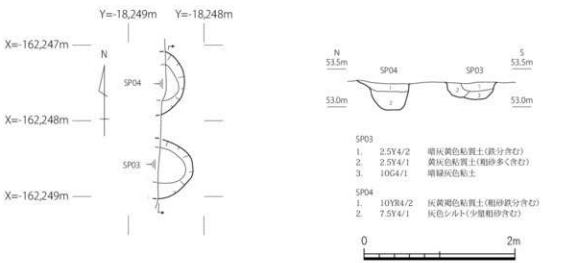


図 64　SP03・SP04 平面・断面図（S ＝ 1/50）

第 4 節　出土遺物

櫪文 2023-2 次調査で出土した遺物には、土師器、須恵器、瓦器、埴輪、弥生土器、縄文土器、石製品、金銅製品（保存上の問題から写真のみ掲載。図版 43）、木製品、動物骨（牛・馬）、種子がある。出土遺物の量は遺物コンテナ 59 箱分である。

遺物の時期は、古墳時代後期から飛鳥時代にかけてを中心としている。遺物の大半は自然流路（NR20、24）から出土しており、完形品が一定量含まれている。また、これらの自然流路からは動物骨（歯を含む）が多量に出土している。種類は牛・馬がある。ただし、保存上の問題から、調査時の写真を掲載するに止める。

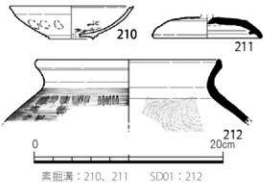


図 65　素掘溝・SD01 出土遺物（S ＝ 1/4）

また、本調査では漆が付着した土器が出土しており、漆の付着範囲をグレーの塗りつぶしで示している。

耕作溝（図 65）

210 は瓦器埦である。大和型である。高台は断面形が三角形を呈する。内面のミガキには隙間が多い。磨滅と破損のため、見込の暗文の形は不明である。

211 は須恵器坏 G の蓋である。復元口径 11.4 ㎝を測る。かえりは退化が進み、口縁部よりも高い。

SD01（図 65）

212 は須恵器甕である。復元口径 19.0 ㎝を測る。口縁部は回転ナデ調整、体部はタタキを施した後、外面をカキ目で仕上げる。

NR20 上層（図 66）

213～217 は土師器坏 C である。213～215 は底部外面を指頭圧痕とナデ、口縁部外面から内面にかけてナデ調整で仕上げる。214～216 は内面に一段の放射暗文を施す。216 は見込に螺旋暗文を施す。217 は底部から口縁にかけて緩やかに立ち上がる。磨滅のため、内面のミガキの有無は確認できない。218 は土師器皿である。口縁を内側に向かって小さく折り返す。口縁部外面から内面にかけて横方向のナデ調整で仕上げる。底部外面には指頭圧痕が残る。

219 は土師器甕である。体部外面から口縁部内面にかけてハケ調整で仕上げる。口縁部に粘土の接合痕が残る。体部に長径 3.5 ㎝、短径 1.2 ㎝の楕円形の焼成後穿孔を施す。

220・221 は須恵器坏 G である。220 は口径 9.8 ㎝、器高 4.1 ㎝を測る。底部外面を回転ケズリで仕上げる。221 は口径 9.8 ㎝、器高 3.1 ㎝を測る。底部を回転ヘラ切で切り離す。222・223 は須恵器坏 B である。222 は高台の復元口径 8.6 ㎝を測る。焼成不良のため、坏部内面の色調は赤褐色、坏部外面及び高台は青灰色を呈する。223 は底部から口縁に向かって緩やかに立ち上がる。

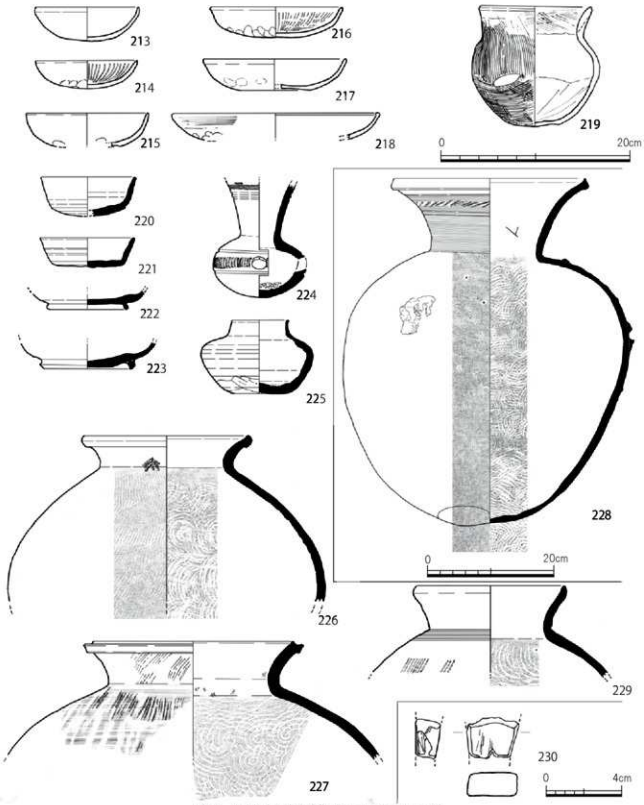


図66　NR20上層出土遺物（S＝1/2・1/4・1/6）

224は須恵器甕である。底部内面に口縁部から差し込んだ工具で底部を強く押さえつけた圧痕が残る。

225は須恵器短頸壺である。肩部が強く張り、頸部はやや内傾する。底部外面はケズリを施す。

226・227は須恵器甕の口縁である。口縁部は回転ナデ調整で仕上げ、体部はタタキ調整のあと、カキ目を施す。226は頸部に綾杉文状のヘラ記号を施す。228は須恵器甕である。ほぼ完形で出土した。

体部の最大径は肩部で、口縁は大きく開く。口縁部外面には列点文を施す。体部上半には自然釉がかかり、体部上半から中程にかけてスサ入りの粘土や別個体の破片が付着する。底部には坏等の口縁部と接していた痕跡が円形に残る。頸部内面に、「V」字形のヘラ記号が残る。227・229 は外面に自然釉がかかる。

230 は砥石である。流紋岩製である。使用面は 4 面である。

NR20 下層（図 67～76）

231～233 は土師器坏である。231・232 は土師器坏 H である。231 は口縁部外面～内面を横ナデ・ナデ調整を施し、底部外面はケズリを施す。232 は磨滅のため、調整は不明である。233 は土師器坏である。口縁部が外湾する。234～239 は土師器坏 C である。内面から口縁部外面にかけて横ナデ・ナデ調整を施し、底部外面には指頭圧痕が残る。234・235 は内面に一段の放射暗文を施す。底部外面には指頭圧痕が残る。234 は内面に漆が付着する。235 は見込に螺旋暗文を施し、中心からやや離れた場所に直径 0.5cm 程の焼成後穿孔を施す。底部外面は剥離している。236・238・239 は内面には一段の放射暗文を施す。236 は口縁部外面から内面に横ナデ・ナデ調整を施し、底部外面に指頭圧痕が残る。237 は底部から口縁部にかけて急に立ち上がる。口縁部外面に横方向のミガキを、底部外面にケズリを施す。内面は前面に煤が付着し、坏の中でモノを燃やしたと考えられる。煤のため不明瞭であるが、放射状の暗文が確認できる。238 は口縁部外面から内面に横ナデ調整を施す。239 は口縁部外面から内面に横ナデ調整を施し、底部外面にケズリを施す。240・242 は土師器鉢である。240 は口縁部外面から内面に横ナデ調整を施し、口縁部外面には横方向のミガキを施す。底部外面にケズリを施す。241 は内面に二段の放射暗文を施す。242 は内面にハケ調整の後に二段の放射暗文を施す。外面の上半は横方向のミガキ、下半はケズリ調整を施す。

243～255 は土師器高坏である。243 は坏部である。口縁端部を上方に引きだす。244 は坏部及び脚部の一部である。坏部の腰部は緩やかに屈曲する。245～252、255 は脚部である。245 は脚部に幅広の面取りを施す。246 は 3 方向の透かしを持つ。247 は脚部から裾部にかけて屈曲する。248 は脚部内面に絞り痕が残る。249 は坏部外面をケズリ調整で仕上げる。器形は須恵器の高坏に類似する。250 は外面に面取りを施し、内面に絞り痕と指頭圧痕が明瞭に残る。251 は坏部と脚部の接合部分を工具でナデた痕が残る。252 は脚部から裾部にかけて屈曲し、裾部が大きく開く。磨滅が激しい。255 は脚部外面に縦方向のミガキを施し、裾部外面を横ナデで仕上げる。253 は口縁部がやや内湾する。坏部内面に放射暗文を施す。254 は坏部外面に接合痕が残る。坏部内面に放射暗文を施す。

256～276 は土師器甕である。256 は外面に黒斑がある。体部外面及び口縁部内面にハケ調整を施す。257 は頸部の屈曲が緩やかで、底部は平底に近い。口縁端部に面を持たない。体部下半に黒斑がある。258 は体部 2 か所に黒斑がある。体部外面をハケ調整、口縁部をナデ調整で仕上げる。259 は肩部がやや張る形である。ほぼ完形である。体部外面を目の細かいハケ調整で仕上げる。260 は口縁部が外反し、底部は平底に近い。完形である。口縁部には粘土の接合痕が残る。261 は口縁部の欠けを除き、ほぼ完形である。体部外面をハケ調整、体部内面をナデ調整で仕上げる。262～264 は底部が平底に近い。完形である。262 は外面に全体的に煤が付着する。体部下半外面に黒斑がある。263 は口縁部に粘土の接合痕が残る。264 は体部外面に煤が付着する。265 は体部から口縁部にか

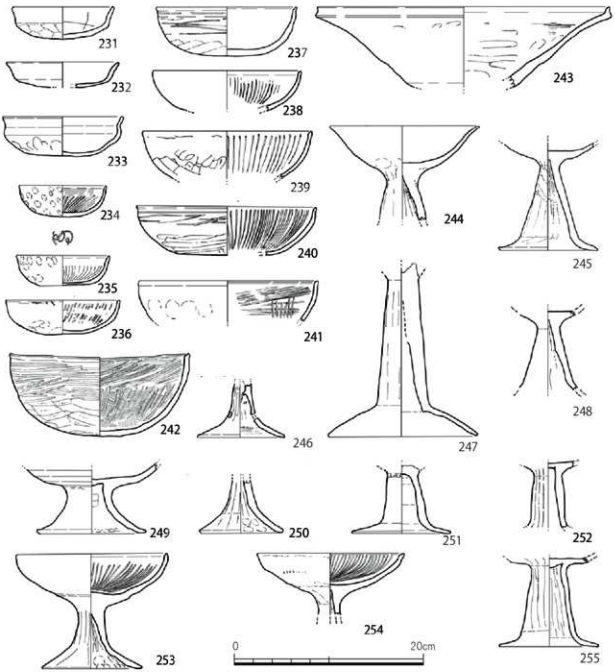


図 67　NR20 下層出土遺物（S = 1/4）

けて緩やかに開く。口縁端部に面を持たない。266 は頸部は緩やかに屈曲する。口縁部に向けて器壁が薄くなる。267 は体部外面にハケ調整を施す。体部外面に煤が付着する。268 は甕の体部である。体部外面に煤が付着し、体部上半外面は大部分が器壁が剥離している。269 は口縁部が比較的短い。体部内面はケズリを施し、体部外面はハケ調整で仕上げる。270 は体部がやや直線的である。内外面に煤、焦げが付着する。271 は口縁部が比較的短く、体部が縦に長い。体部内面を工具によるナデで仕上げ、体部外面には指オサエの痕が残る。272 は体部が縦に長い。体部外面をハケ調整で仕上げ、内面には圧痕が残る。273 は内外面にハケ調整を施した後、口縁部のみ横ナデで仕上げる。274 はやや肩が張る器形である。体部上半の内面に粘土の接合痕が明瞭に残る。275 は体部内外面にハケ調整を施し、口縁部をナデ調整で仕上げる。276 は口縁部外面を除きハケ調整で仕上げる。

277～284 は土師器長胴甕である。277 は口縁部が外反し、口縁端部を丸く収める。完形である。

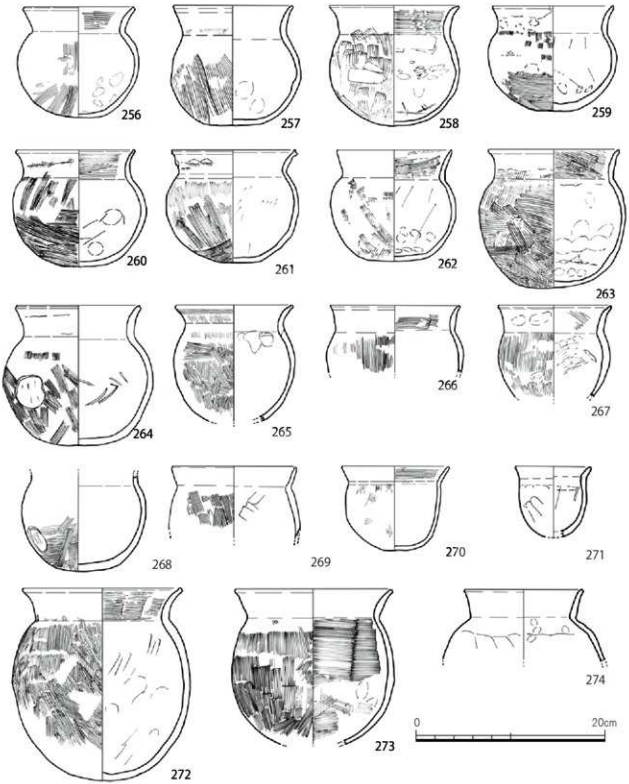


図 68　NR20 下層出土遺物（S = 1/4）

278 は頸部の屈曲が強く、やや直線的に口縁部が開く。煤、焦げの付着が体部上半に集中する。279 は口縁端部を上方に引き出す。体部内外面に煤、焦げが付着する。280 は、体部外面に焦げが付着する。281 は口縁端部にやや丸みを帯びた面を持つ。体部外面に煤、焦げが付着する。282 は体部内外面をハケ調整で仕上げる。全面に煤、焦げが付着する。283 は小ぶりな個体である。体部がわずかに下膨れする。284 は口縁端部に面を持つ。口縁部外面を除く面をハケ調整で仕上げる。全面に煤、焦げが付着する。

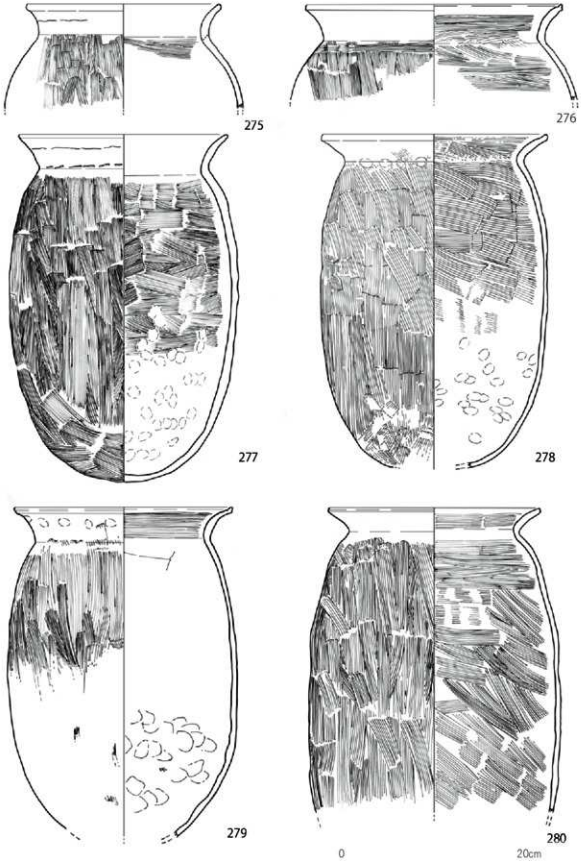


図 69　NR20 下層出土遺物（S = 1/4）

285 は弥生土器甕の底部である。外面に縦方向のミガキを施す。

286 は土師器甑である。接点はないが、器形、調整などから同一個体であると考えられる。内外

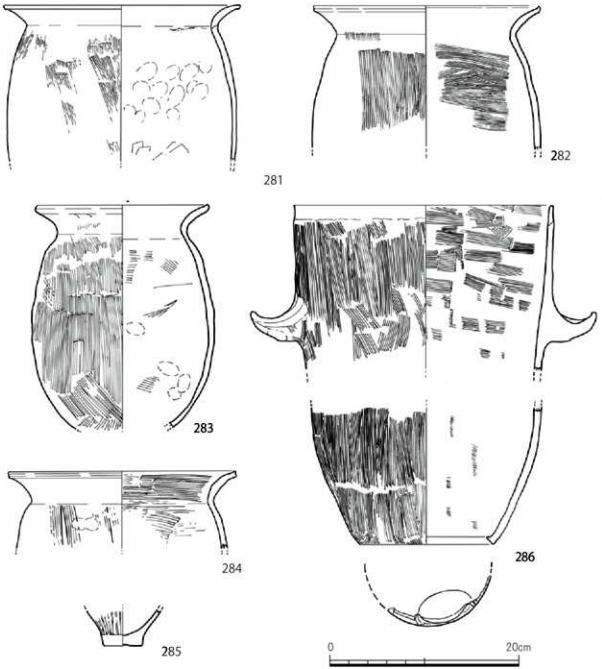


図 70　NR20 下層出土遺物（S = 1/4）

面をハケ調整で仕上げる。

287・288 は土師器鍋である。287 は口縁部の一部を除き、ほぼ完形である。底面は平底に近い。内外面にハケ調整の後、ナデ調整を施す。体部外面に煤、焦げが付着する。288 は縦に長い器形である。体部内外面にハケ調整を施した後、内面にケズリ調整を施す。

289 は台付土師器壺である。壺部と脚部は接合面で剥離する。体部外面下半はケズリ調整、上半にナデ調整を施す。内面には粘土の接合痕が残る。

290 は土師器鉢である。体部内面中程に横方向のミガキを施す。291 は土師器平底鉢である。底部外面を横方向のケズリ、底部内面を放射状のハケ調整で仕上げる。

292・293 は土師器甑の把手である。292 は体部内面にハケ調整を施す。293 は把手部分の外面に煤が付着する。294・296・298 は土師器甑もしくは鍋の把手である。294 は磨滅が激しく調整は不

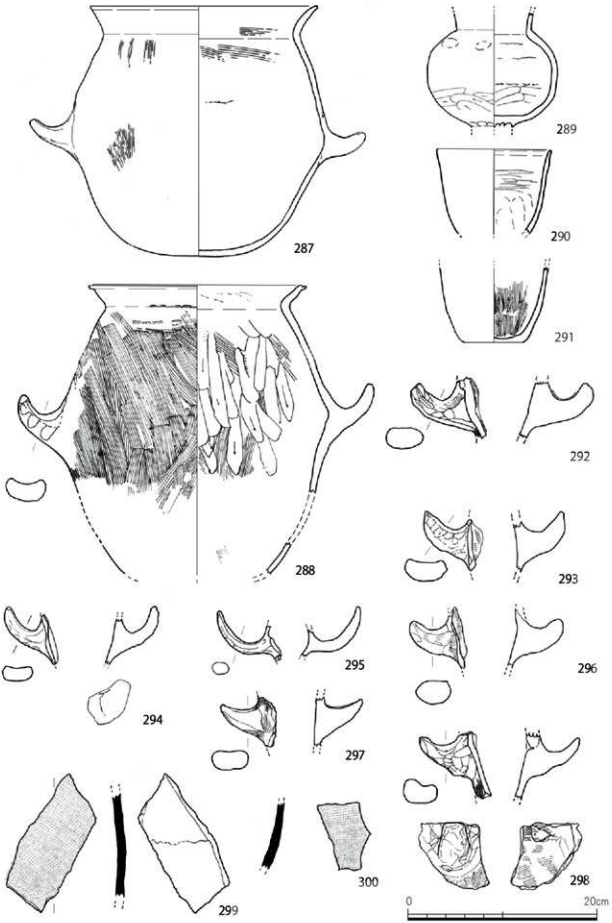


図 71　NR20 下層出土遺物（S = 1/4）

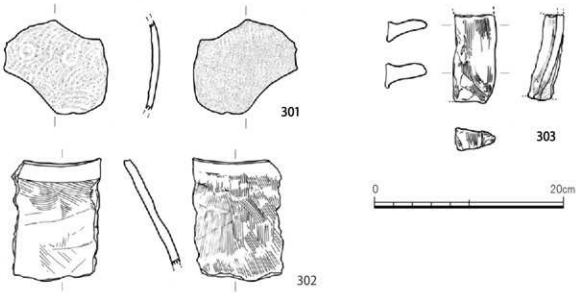


図 72　NR20 下層出土遺物（S = 1/4）

明である。296 は内外面をハケ調整で仕上げる。298 は把手の接合痕が体部内面に残る。295・297 は鍋の把手である。把手が細長く伸びる。297 は把手の接合痕が体部内面に残る。

299・300 は韓式系土器である。破片のため、器種は不明である。いずれも外面に格子タタキを施す。内面は煤、焦げが付着しており調整は不明である。301 は土師質に焼成された土器片である。磨滅のため不明瞭であるが、外面は格子タタキ、内面には同心円状の当て具痕が残る。302 は土師器の破片である。口縁部のみのため全容は不明であるが、鉢などの器種である可能性がある。口縁部を除き、ハケ調整を施す。

303 は土師器甑の庇である。接合面で剥離する。

304～313 は須恵器蓋坏 H の身である。304 は肩部の稜が鋭い。305 は内面全体に漆が付着する。306 は焼成不良により上面が大きく凹む。内面には同心円状の当て具痕が残る。307 は内面に同心円状の当て具痕が残る。308 は上面に 2 本の直線でヘラ記号を刻む。309 は上面に「×」状のヘラ記号を刻む。内面には一部焦げが付着する。310 は上面に 1 本の直線でヘラ記号を刻む。内面は煤が付着する。311 は肩部がなだらかに屈曲し、明確な稜を持たない。312 は頂部の切り離し後に調整を施さない。内外面で色調が大きく異なり、外面は暗灰色、内面は灰白色を呈する。313 は底部の切り離し後に調整を施さない。口縁部はやや内湾する。蓋の可能性がある。314・315 は須恵器坏 G の蓋である。314 は宝珠形のつまみを持つ。かえりは退化し、口縁部よりも高い。315 はつまみが欠損する。316・327 はボタン状のつまみを持つ。316・327 は須恵器蓋である。316 は肩部に緩やかな稜を持つ。327 は上部外面から内面にかけて、回転ナデの痕跡が稜として残る。

317～322 は須恵器坏 H の身である。317 は口縁部がやや内湾する。318 は立ち上がりが短い。319 は焼成がやや不良で、色調は灰白色を呈する。320 は底部外面に「×」状のヘラ記号を刻む。口縁は欠損し、器高は不明である。321 は口縁部の立ち上がりが非常に短く、高さが受部と同じ箇所がある。322 は受部の器厚が厚い。

323～326 は須恵器坏 G である。323 は底部をヘラ切で切り離す。324 は内面に漆が付着する。325 は底部に回転ケズリを施す。326 は底部を回転ケズリで仕上げる。肩部にわずかに稜を持つ。

328 は須恵器有蓋高坏である。脚部から裾部にかけて大きく張り出す。329～331 は須恵器高坏の

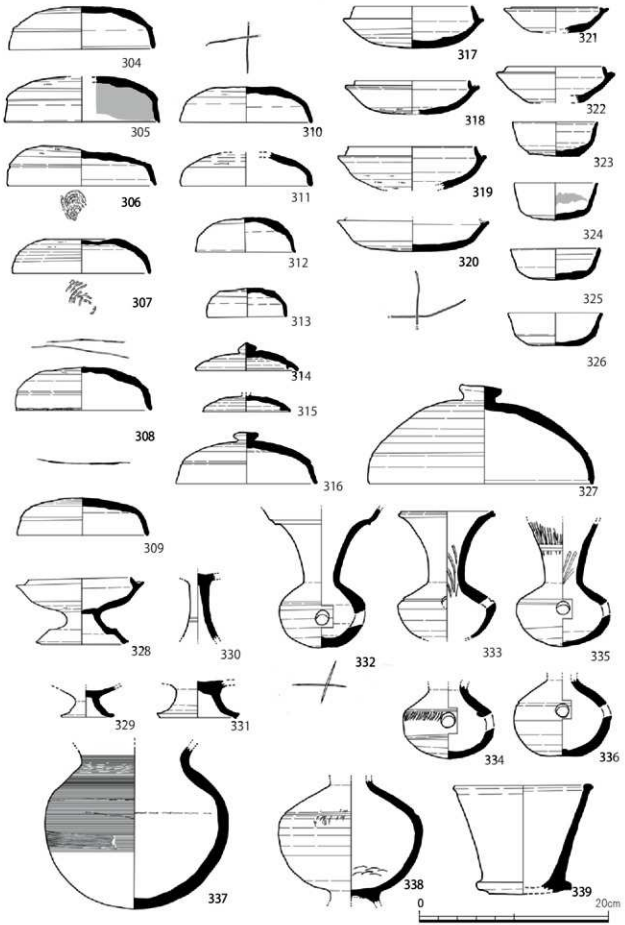


図 73　NR20 下層出土遺物（S = 1/4）

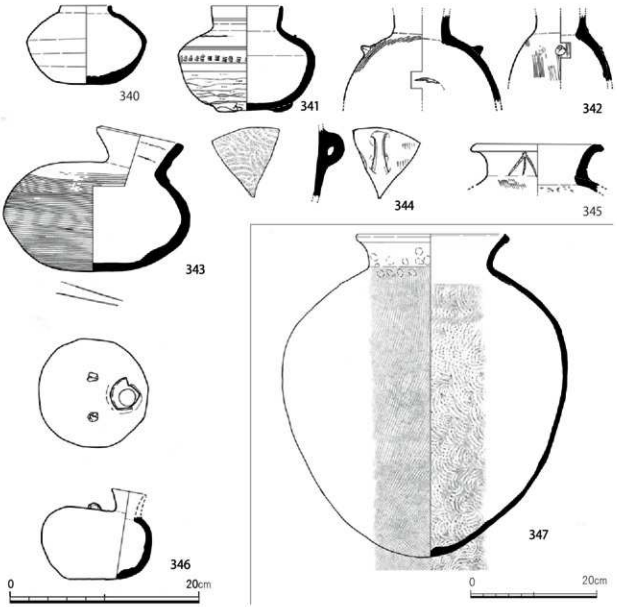


図 74　NR20 下層出土遺物（S = 1/4・1/6）

脚部である。329 は脚部から裾部にかけてわずかに膨らむ。330 は 2 段の沈線を巡らす。331 は外面に回転ナデの痕跡が稜として残る。

332～336 は須恵器瓶である。332 は底部外面に「×」状のへら記号を刻む。333 は頸部内面に絞り痕が残る。334 は体部中ほどに縦方向の平行線文を刻む。335 は頸部上反に縦方向の平行線文を施す。自然釉がかかる。336 は頸部の径が小さく、底部は平底に近い。

337 は須恵器壺である。体部にカキ目を施した後、体部下半を回転ケズリで仕上げる。338 は須恵器台付壺である。壺部内面の底部に当て具痕が残る。339 は須恵器鉢である。すり鉢である。内面は磨滅していない。底部に焼成後穿孔を施す。

340・341 は須恵器短頸壺である。340 は完形である。焼成時、頸部に蓋を被せたと考えられ、口縁部付近のみ自然釉が付着しない。341 は肩部に焼成時に融着した蓋、坏などの胎土がわずかに残り、底部には粘土塊が付着する。

342 は須恵器提瓶である。角状の双耳がつく。外面全体に自然釉がかかるが、一部カキ目が確認できる。343・346 は須恵器平瓶である。343 は底部に 2 本の直線のヘラ記号を施す。体部上半か

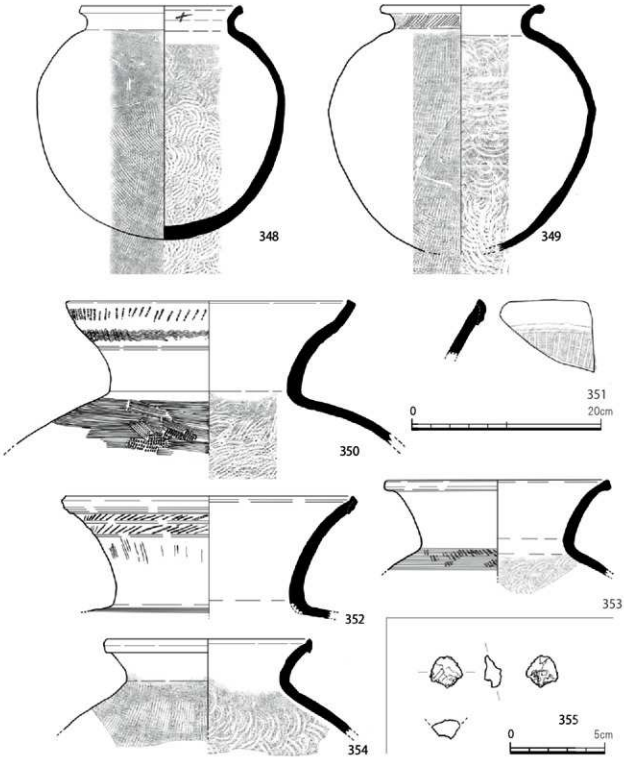


図75　NR20下層出土遺物（S＝1/2・1/4）

ら底部付近にかけてカキ目を施す。346は上面に２つの瘤状の粘土を施す。

344は須恵器の壺の体部片である。把手をつける。内面には当て具痕が残る。345は須恵器甕の口縁部である。鳥足文状のヘラ記号を頸部に施す。347・348・349は須恵器甕である。347・348は完形である。347は体部に平行タタキを施した後、カキ目で仕上げる。348は口縁部内面に「×」字状のヘラ記号を施す。体部外面上半をカキ目、体部外面下半を交差状の平行タタキで仕上げる。349は体部に平行タタキを施した後、外面をカキ目で仕上げる。頸部にわずかに平行タタキの痕跡が残る。350～354は須恵器甕の口縁部である。350は口縁部に列点文と波状文を施す。口縁部が

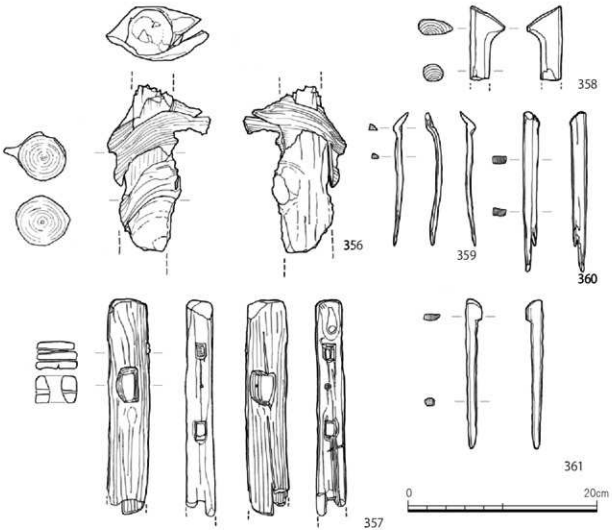


図 76　NR20 下層出土遺物（S = 1/4）

わずかに内湾する。口縁部から体部外面にかけて自然釉がかかる。351 は外面にカキ目を施した後、縦方向の平行線を刻む。352 は口縁部外面に 2 段の櫛描列点文を施す。353 は口縁部に回転ナデを施し、体部はタタキ調整の後、カキ目を施す。354 は体部に交差状の平行タタキを施す。

355 は鉄滓である。重さ 12.7 g を計る。

356～361 は木製品である。356 は木皮を用いて棒材に他の部材を固定していたと考えられる。用途は不明である。357 は角材である。長辺 1.4 ㎝、短辺 1.0 ㎝の孔を 6.0 ㎝間隔で 3 箇所、長辺 3.6 ㎝、短辺 2.0 ㎝の孔を 1 箇所設ける。小さい方の孔には、厚さ 0.8 ㎝ほどの薄い板を 3 枚詰める。用途は不明である。358 は刀装具の柄部である。各辺に面取りを施す。359 は棒状の木材である。長さ 1.4 ㎝を測る。先端がわずかに折れ曲がる。用途は不明である。360 は燃えさしである。長さ 16.9 ㎝、幅 1.6 ㎝を測る。361 は棒状の木材である。長さ 15.8 ㎝、最大幅 1.8 ㎝を測る。先端のみ幅が広くなる。

NR20 北側・中央畦（図 77）

362・363 は土師器甕である。362 は体部外面はハケ調整、口縁部を横ナデ調整で仕上げる。外面に黒斑がつく。完形である。363 は体部内外面と口縁部内面をハケ調整、口縁部外面を横ナデ調整で仕上げる。364 は竈の庇である。前面に向かってやや内湾する。

368 は須恵器蓋坏の蓋である。口縁部内面にわずかに段がつく。

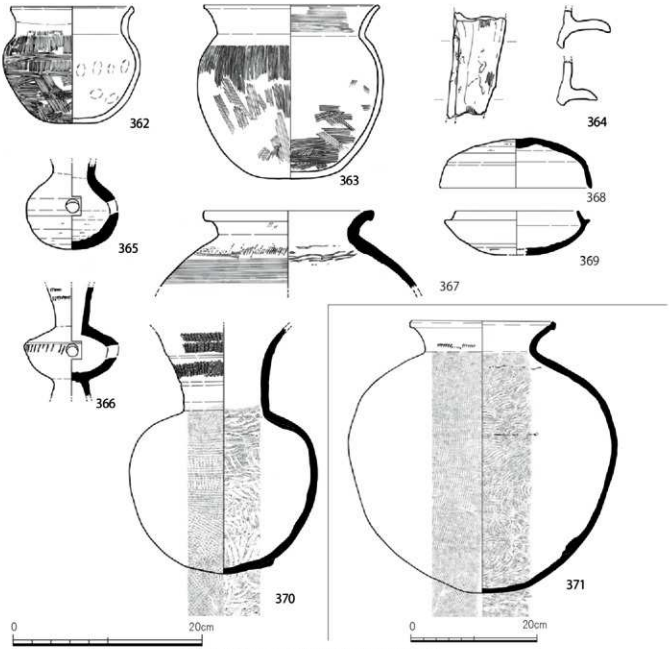


図 77　NR20 北側・中央畔出土遺物（S ＝ 1/4・1/6）

369 は須恵器蓋坏の身である。受部上面にわずかに自然釉がかかる。

365 は須恵器瓶である。頸部から上が欠損する。366 は須恵器台付瓶である。肩部が屈曲し、平行線文を刻む。自然釉がかかる。

370 は須恵器壺である。頸部が長く伸び、頸部外面に波状文を施す。体部外面及び底部内面の一部に自然釉がかかる。底部外面に別個体の粘土塊が付着する。

367 は須恵器甕の口縁部である。体部に平行タタキを施した後、カキ目で仕上げる。頸部内面に粘土の接合痕が残る。371 は須恵器甕である。完形である。体部に平行タタキを施した後、回転ナデで仕上げる。

NR24 出土遺物（図 78・79）

372 は土師器坏 C である。口縁端部に面を持つ。内面に一段の放射暗文を施す。

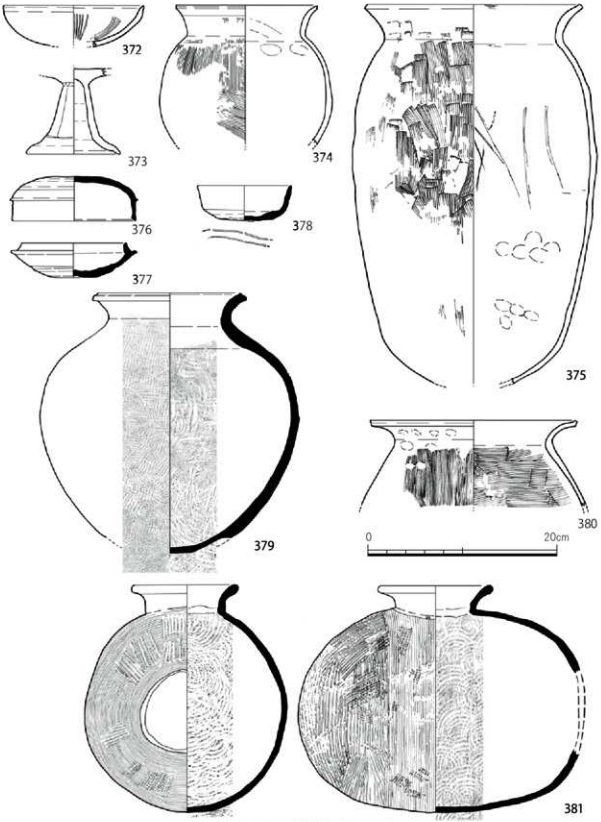


図 78　NR24 出土遺物（S ＝ 1/4）

373 は土師器高坏である。脚部に幅広の面取りを施す。裾部に黒斑がつく。

374 は土師器甕である。体部、口縁部外面にハケ調整を施す。体部外面に煤が付着する。

375・380 は土師器長胴甕である。375 は体部外面をハケ調整を施し、体部内面に圧痕とナデの痕跡が残る。380 は土師器長胴甕の口縁部である。体部内外面にハケ調整を施す。体部内面と体部外

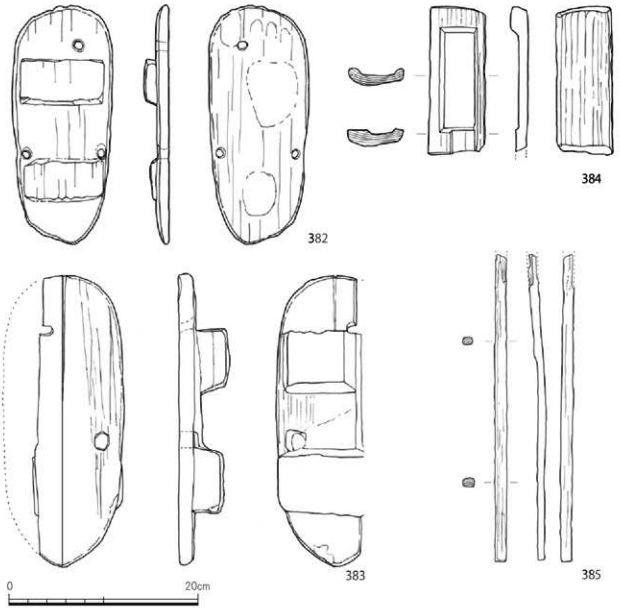


図 79　NR24 出土遺物（S = 1/4）

面でハケの目の細さが異なる。口縁部外面に煤が付着する。

376 は須恵器坏 H の蓋である。口縁端部に面を持つ。頂部に自然釉がかかる。

377 は須恵器坏 H の身である。底部外面に自然釉がかかる。

378 は須恵器坏 G である。底部外面に 2 本の直線のヘラ記号を施す。

381 は須恵器横瓶である。格子タタキ、交差状の平行タタキを施した後、カキ目を施す。頸部に逆「V」字のヘラ記号を施す。側面は、成型時に後から接合した粘土板と本体の接合部で剥離している。

379 は須恵器甕である。体部にタタキの痕が残る。

382～385 は木製品である。382・383 は下駄である。382 は 3 か所に鼻緒用の孔を設ける。表面に使用時の右足の足形が残る。歯はよく磨滅している。383 は左側が破損しているが、鼻緒用の孔を 3 か所に設けていたと考えられる。歯はあまり磨滅していない。384 は槽である。長辺 15.5 ㎝、短辺 6.0 ㎝、高さ 1.9 ㎝、深 2.3 ㎝を測る。385 は棒材である。表面にケズリを施し、断面形は隅丸

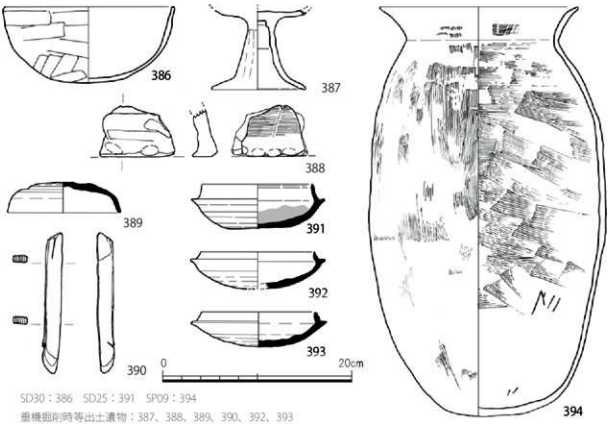


図 80　SD30・SD25・SP09・重機掘削時等出土遺物（S ＝ 1/4）

方形を呈する。

SD30（図 80）

386 は土師器鉢である。全体的に磨滅が進み、内面の暗文の有無は確認できない。

SD25（図 80）

391 は須恵器坏 H の身である。内面に漆が付着する。漆部分には、ハケの毛である可能性がある繊維が残る。

387 は土師器高坏である。脚部に面取りを施す。

SP09（図 80）

394 は土師器長胴甕である。体部内外面をハケ調整で仕上げる。底部外面に黒斑がつく。

重機掘削時等出土遺物（図 80）

388 は竈の庇である。接合面で剥離する。

389 は須恵器坏 H のである。肩部はなだらかに屈曲し、稜を持たない。内面に自然釉がかかる。

392・393 は須恵坏 H である。392 は底部外面に自然釉が付着する。393 は完形である。

390 は燃えさしである。長さ 14.8 ㎝、幅 1.7 ㎝、厚さ 0.9 ㎝を測る。

第Ⅶ章　総括

第１節　調査地周辺の遺跡の展開

調査地が所在する橿原市の北端部一帯は、これまで大規模な発掘調査が実施されていなかった地域であり、周知の埋蔵文化財包蔵地としては空白状態であった。本書で報告した一連の調査は、調査地周辺における初の本格的な発掘調査であり、新たな遺跡の発見をはじめとする多くの成果があった。ここでは今回の調査成果を軸に、調査地周辺の遺跡の様相についてまとめる。

第Ⅲ章で報告した試掘調査（橿教委 2016－９・2017－１次調査）の成果をもとに、十市蔵場遺跡および十市九ノ井田遺跡の２遺跡を新規遺跡として奈良県遺跡地図に登録を行っている。遺跡の範囲は試掘調査で遺構の存在が確認された地点であり、北側が十市蔵場遺跡、南側が十市九ノ井田遺跡である（遺跡の位置は図３・４）。

十市九ノ井田遺跡には古墳時代前期の遺構・遺物が存在する。試掘調査７区の落ち込みからは土師器や銅鋼片が出土している。この他にも詳細時期は不明だが古墳時代に遡る可能性がある溝やピットも確認している。十市九ノ井田遺跡での調査は試掘調査のみであるが、当該期の遺構・遺物が調査地周辺に広がることを示す貴重な成果を得ている。第Ⅱ章第２節で述べたとおり、調査地の周辺に目を向けると古墳時代初頭～前期の遺跡の存在が特徴として挙げられる。多くは地上から姿を消しているが古墳も築かれており、中には古墳時代のごく初期段階に属す古墳も含まれている。十市九ノ井田遺跡では、その後半段階に位置付けられる遺構・遺物があり、奈良盆地中央部に近接する低地における古墳や集落の形成を研究する上での資料となる。

詳細は次節で述べるが、古墳時代後期には十市蔵場遺跡において遺構・遺物の存在が顕著となる。特に自然河道からは土器を中心とする多くの遺物が出土している。この時期の遺跡は、十市蔵場遺跡から東に約 500 mにある十市池遺跡において若干の遺物の出土が報告されているのみであり、新たな発見と言える。十市蔵場遺跡の自然河道からの出土遺物は古墳時代後期～飛鳥時代が中心で、その前後の時期をわずかに含む。今回の調査では居住域は明確ではないが、出土遺物の状態から、調査地の周辺に存在していた可能性が考えられる。

調査地は藤原京北京極から約１㎞の距離に位置している。藤原京の時期については遺物がごく少量存在するのみである。調査地近隣の遺跡においても目立った遺構・遺物の存在は確認されていない。

平安時代末頃以降、再び調査地の周辺では遺跡の形成が目立つようになり、室町時代～戦国時代には十市氏が勢力を拡大することも知られている。今回の調査地では、これらの時期には耕作地としての利用が主であったことを確認しており、目立った遺物も出土していない。ただし、調査地一帯にも十市氏の活動との関連が想起される地名も残されており（蔵場もその一つである）、今後も継続しての調査が必要である。

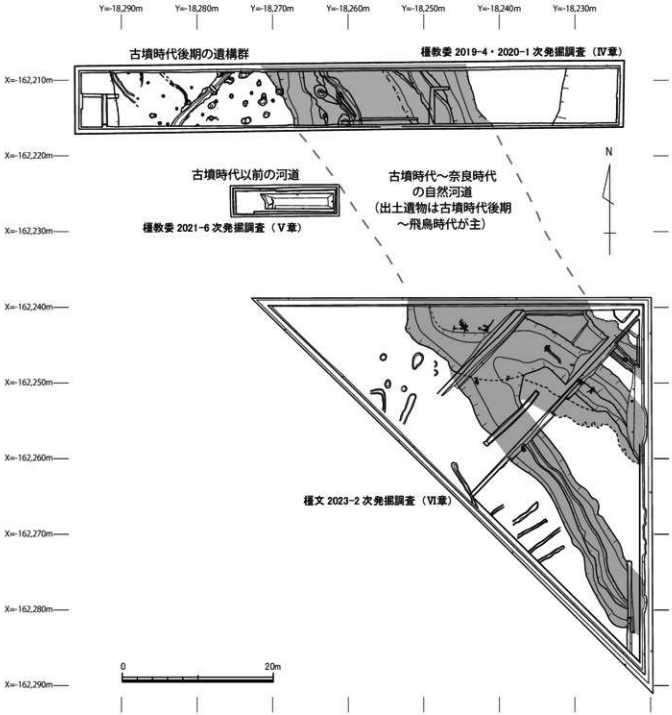


図 81　十市蔵場遺跡の古墳時代～奈良時代遺構（S=1/500）

第 2 節　十市蔵場遺跡の調査成果

ここでは、十市蔵場遺跡において実施した発掘調査の成果についてまとめる。十市蔵場遺跡では橿教委 2019－4・2020－1 次調査（Ⅳ章）、橿教委 2021－6 次調査（Ⅴ章）、橿文 2023－2 次調査（Ⅵ章）の 3 件の本調査を実施している（図 81）。

主な調査成果として、古墳時代後期から奈良時代にかけての遺構・遺物の存在が確認できたことが挙げられる。南東から北西へと流れる自然河道と考えられる溝が調査地点の東寄りの位置に複数存在

する。自然河道は幅 5～15 m程度の流路が複数連なっており、時期とともに位置が変動していることがうかがえる。自然河道の一部は調査区内で蛇行している。また、調査地北部では河道の一部が最終的に埋め立てられていることも確認できる。

自然河道からは古墳時代後期から飛鳥時代の遺物が多く出土しており、周辺が生活域として利用されていた期間はこの時期を中心とする。出土遺物量では特に古墳時代後期後半が多い。古墳時代中期および奈良時代の遺物もごく少量ながら出土しており、自然河道の形成開始時期は古墳時代中期頃、最終埋没時期は奈良時代になると考えられる。自然河道の主な出土遺物には上記時期の土器、木製品（下駄等）、動物骨（牛・馬）がある。遺物の特徴的な出土傾向としては、須恵器の大甕が完形もしくはそれに近い状態で複数出土している点や、須恵器瓶類（横瓶・提瓶・平瓶）の出土量が多い点が挙げられる。

これらの自然河道と同時期と考えられる遺構は調査地の北側に多い。河道の西岸、橿教委 2019－4・2020－1 次調査の西半部では、河道と平行ないし直交する方向に掘られた溝や、複数の土坑・ピットが存在している。出土遺物の量は限られるが、いずれも古墳時代後期の遺構である可能性が高い。河道の東岸については調査範囲が少ないが、上記調査の東端部に存在する落ち込みに古墳時代後期の遺物がまとまって投棄される状況を確認しており、調査範囲のさらに東～北側に遺構・遺物が存在している可能性がある。

自然河道が埋没し、鎌倉時代以降は近現代にいたるまで耕作地としての利用が主であったことを確認している。調査地の南方には十市城跡が存在することから、室町時代～戦国時代の遺構・遺物が存在することも想定したいたが、今回の調査では当該期の遺構や目立った遺物は存在しなかった。

なお、これまでに述べた古墳時代以降の遺構ベース層の中には古墳時代より古い河川堆積層が含まれる。この遺構ベース層中からは橿教委 2021－6 次調査で時期不明の土器細片が出土しているのみであるが、古墳時代以降の遺構からはごくわずかに縄文時代から弥生時代の遺物も出土している。

今回実施した一連の調査では、古墳時代～奈良時代を中心とする時期の遺跡を新たに発見するという大きな成果が得られた。また、十市蔵場遺跡の周辺では十市九ノ井田遺跡をはじめとする古墳時代前期の遺跡や十市氏の拠点である十市城跡といった特徴的な遺跡も存在しており、今後の調査によって具体像を明らかにしていくことが期待される地域と言える。

報 告 書 抄 録

ふりがな	とおいちくらばいせき ―こうじょうぞうちくこうじにともなうはっくつちょうさほうこくしょ―
書　　名	十市蔵場遺跡　－工場増築工事に伴う発掘調査報告書－
シリーズ名	橿原市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第21冊
編 著 者 名	橿原市　魅力創造部　文化財保存活用課　石坂泰士・上井佐紀
編 集 機 関	橿原市　魅力創造部　文化財保存活用課
所　在　地	〒634-0826　奈良県橿原市川西町858-1　TEL 0744-22-4001　FAX 0744-26-1114
発行年月日	西暦2024（令和6）年3月29日

所収遺跡	所在地	コード		北　緯	東　経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
十市蔵場遺跡（とおいちくらば） 十市九ノ井田遺跡（とおいちくんのいだ）	奈良県（ならけん）橿原市（かしはらし）十市町（とおいちちょう）	29205	11C-0169 11C-0170	34°32′10″	135°48′04″	2017/3/6～2017/4/28	1,400㎡	工場増築工事
						2020/3/23～2020/4/30	657㎡	
						2022/3/14～2022/3/28	94㎡	
						2023/6/1～2023/8/25	1,384㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
十市蔵場遺跡	集落・散布地	古墳時代後期 飛鳥時代 奈良時代 鎌倉時代以降	河道・溝・土坑・落ち込み 河道・溝 耕作溝群	土師器・須恵器 石製玉類・木製下駄 動物骨 土師器・瓦器	2016年度試掘1・2区 2019・2020年度本調査 2021年度本調査 2023年度本調査
十市九ノ井田遺跡	散布地	古墳時代前期 鎌倉時代以降	溝、落ち込み 耕作溝群	土師器・鉄鏃 土師器・瓦器	2017年度試掘6～8区

要　約

本書で報告する一連の調査は、工場増築工事に伴い実施した発掘調査である。当該地は全体が周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲外であり過去の調査歴も無いことから、まず敷地全体を対象に試掘調査を実施した。試掘調査の結果、敷地北東部および南部において遺構・遺物が存在することを確認し、前者を十市蔵場遺跡、後者を十市九ノ井田遺跡として新たに遺跡登録を行っている。その後、十市蔵場遺跡の範囲内において、工場用地造成および建物建設に伴う本発掘調査を実施している。

十市蔵場遺跡の発掘調査では、古墳時代後期から奈良時代にかけての時期の遺構・遺物を確認している。主要な遺構としては、南東から北西方向に流れる河道が挙げられる。古墳時代後期から奈良時代の土器をはじめとする遺物が多数出土しており、特に古墳時代後期のものが多い。須恵器の大甕や瓶類が多数良好な状態で出土している点も特徴的である。調査地の北部では、河道の両岸において古墳時代後期の土坑や溝、落ち込み等の遺構も存在している。調査地周辺では、これらの時期の遺跡はこれまで知られておらず、奈良盆地の低地部における古代の遺跡の展開を知る上で貴重な成果と言える。

なお、十市九ノ井田遺跡の試掘調査では古墳時代前期の遺構・遺物を確認している。調査地の周辺では古墳時代前期の古墳が複数存在（多くは消滅済）していたことが知られており、関係が注目される。

1 区　遺構面検出状況（北から）

2 区　遺構面検出状況（北から）

3 区　遺構面検出状況（南から）

4 区　遺構面検出状況（北から）

図版 2
橿教委 2016－9・2017－1 次調査

5 区　遺構面検出状況（北から）

6 区　遺構面検出状況（南から）

7 区　遺構面検出状況（南から）

8 区　遺構面検出状況（南から）

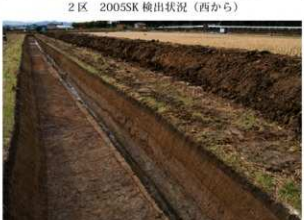
1 区　1002SD 土層断面（東から）

1 区　1004SD 検出状況（南東から）

2 区　2002SD 検出状況（北東から）

2 区　2005SK 検出状況（西から）

1 区　調査区南半部土層断面（北東から）



2 区　調査区土層断面（北東から。手前は 2001SD）

3 区　調査区南半部土層断面（南東から）

4 区　調査区土層断面（北東から）

図版 4

橿教委 2016－9・2017－1 次調査

5 区　調査区西壁南端部土層断面（東から）

5 区　5001SP 土層断面（東から）

6 区　調査区東壁北端部土層断面（西から）

6 区　6001SD 土層断面（西から）

7 区　7001SX 検出状況（北から）

7 区　7001SX 銅鐸出土状況（南から）

7 区　7001SX 土器出土状況（北から）

8 区　調査区東壁北端部土層断面（西から）

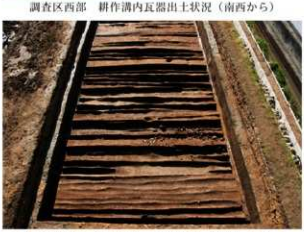
調査地点　調査前全景（東から）

調査区東端部　耕作溝群検出状況（南東から）

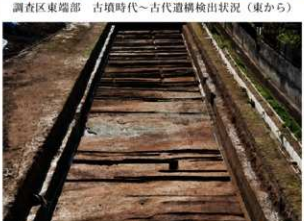
調査区中央部　耕作溝群検出状況（北から）

調査区西部　耕作溝内瓦器出土状況（南西から）

調査区西半部　古墳時代～古代遺構検出状況（西から）



調査区東端部　古墳時代～古代遺構検出状況（東から）



調査区中央部　古墳時代～古代遺構検出状況（東から）

図版 6

橿教委 2019－4・2020－1 次調査

調査区全景　古墳時代～古代遺構検出状況（西から）

調査区全景　古墳時代～古代遺構検出状況（東から）

調査区全景　完掘状況（西から）

調査区全景　完掘状況（東から）

1102SX 土器集中部　出土状況（北西から）

1104SD・1105SD・1121SK 他 検出状況（南から）

図版 8

橿教委 2019－4・2020－1 次調査

1125SD・1126SD 検出状況（南から。中央が 1125SD）

1128SX・1129SD・1133SD・1134SD 検出状況（南から）

1125SD 完掘状況（南東から）

1125SD・1126SD 完掘状況、1127SD・1145SD 検出状況（南から）

図版 10
橿教委 2019－4・2020－1 次調査

1133SD・1138SD・1143SK 完掘状況（南から）

調査区西半部　古墳時代遺構群完掘状況（西から）

1102SX 土器集中部下層（東から）

1104SD 北半部・1141SK 検出状況（南西から）

1104SD・1105SD・SP 群検出状況（南東から）

1144SX 検出状況（南東から）

調査区西半部 SK・SP 群検出状況（南から）

1125SD・1126SD・1134SD 検出状況（南東から）

1128SX 検出状況（南南西から）

1125SD 須恵器横瓶出土状況（南東から）

図版 12

橿教委 2019－4・2020－1 次調査

1134SD 動物骨出土状況（北から）

1127SD・1134SD 検出状況（南東から）

1104SD 北半　土層断面（南西から）

1143SK 土層断面（南西から）

1101SK　遺物出土状況（北から）

1125SD　下駄出土状況（西から）

調査区西半部南壁土層断面（北西から）

1145SD　土層断面（北北西から）

下層遺構完掘状況（東から）

下層遺構完掘状況（西から）

17SP 土層断面（南から）

16SP 検出状況（南から）

17SP 完掘状況（南から）

16SP 完掘状況（南から）

図版 14
橿文 2023－2 次調査

調査地遠景（北から。中央奥に耳成山を望む。）

調査地遠景（北東から。中央奥に金剛山・葛城山を望む。）

上層遺構検出状況（北西から）

上層遺構完掘・下層遺構検出状況（北東から）

図版 16
橿文 2023－2 次調査

調査区東半　下層遺構完掘状況（北から）

下層遺構完掘状況（北東から）

SD01 検出状況（南東から）

SD01 完掘状況（南東から）

図版 18

橿文 2023－2 次調査

NR20・NR24 検出状況（北東から）

NR20・NR24 完掘状況（南西から）

NR20 完掘状況（南東から）

調査区東半下層遺構完掘状況（北から）

図版 20
橿文 2023－2 次調査

調査区西壁土層断面（南東から）

NR20・NR24 北側畦土層断面（南東から）

NR20 馬歯出土状況（南西から）

NR20 馬歯出土状況（北から）

NR20 北側畦以北遺物出土状況（北西から）

NR20 動物骨出土状況（東から）

NR20 土器状況（北西から）

NR20 牛骨（下顎部分）出土状況（南西から）

NR20 動物骨・土器出土状況（北東から）

図版 22
橿文 2023－2 次調査

NR20 土器出土状況（北東から）

NR20 土器出土状況（南西から）

NR20 杭検出状況（南西から）

NR24 遺物出土状況（南東から）

NR24 中央畦土層断面（南東から）

SD10 ～ SD13・SD32 検出状況（南西から）

SD26 完掘状況（南から）

SD21・SP22 完掘状況（南から）

図版 24
櫃文 2023－2 次調査

SX25 完掘状況（南から）

SD08 検出状況（北から）

SK05 完掘状況（北西から）

SP06 土層断面（北から）

SP07 土層断面（北から）

SP09 完掘状況（西から）

SP04 完掘状況（西から）

SP03 完掘状況（西から）

5

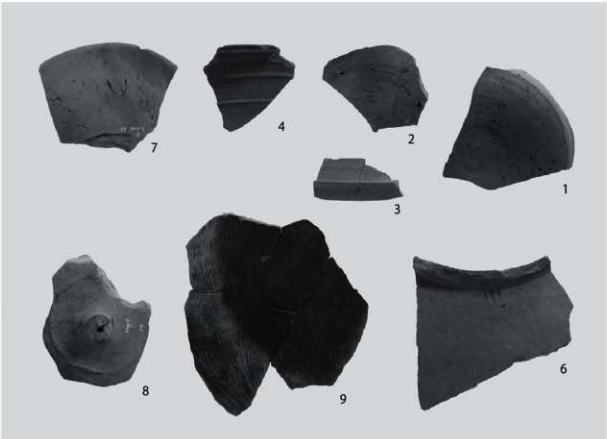
10

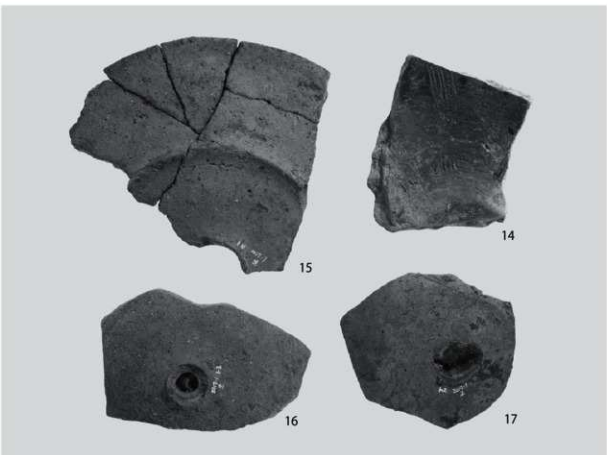
13

11

12

7区出土 銅釧


7
4
2
1
3
8
9
6


15
14
16
17

18

25

26

28

19

24

29

27

36

41

43

44

49

55

37

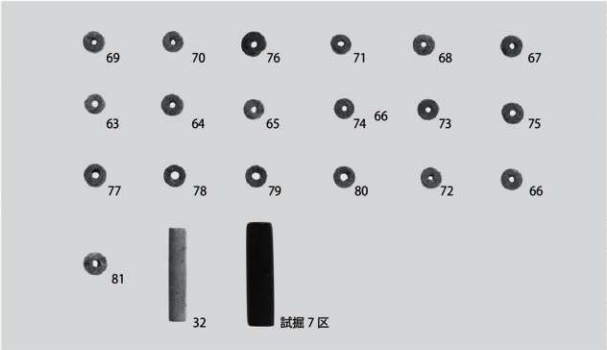
40

42

45

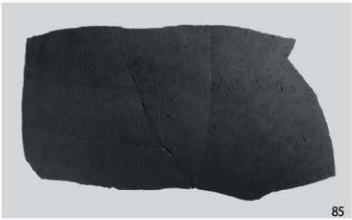
52

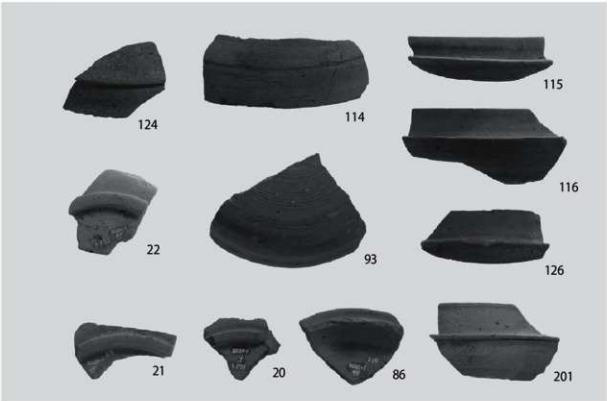
59


69
70
76
71
68
67
63
64
65
74
66
73
75
77
78
79
80
72
66
81
32
試掘 7 区

30
31
105
152
34
151
153
35

82


85


124
114
115
116
22
93
126
21
20
86
201

97

99

100

101

102

108

109

119

120

121

125

129
165
188
194
62
96
191
164
146
128

130

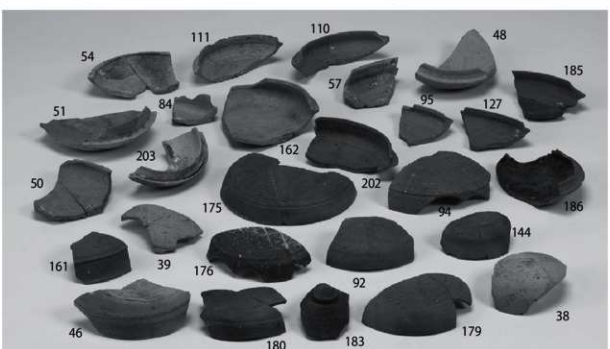
136

132

133

156
160
137
168
88

138


111
110
48
54
185
57
84
95
127
51
162
203
50
202
186
175
94
144
161
39
176
92
38
46
180
183
179

139

141

142

140

143

145

147

148

図版 34

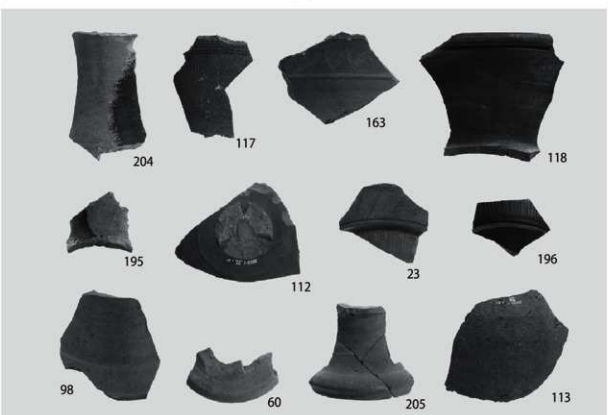
149

167

159

171

177



178

181

184

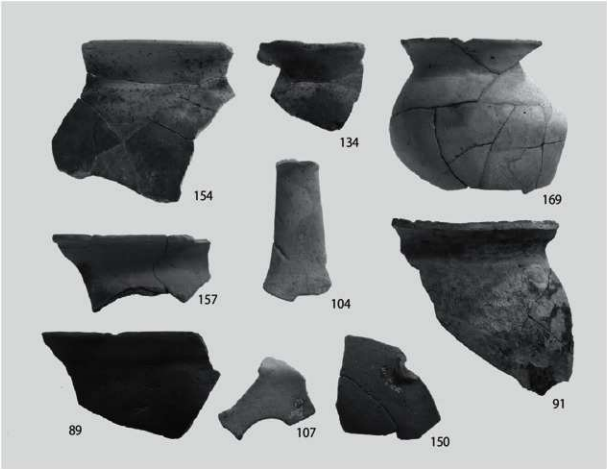
182

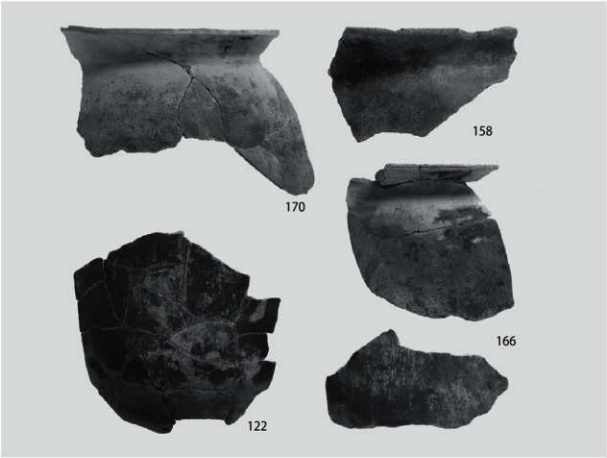
187

189

190

192


154
134
169
157
104
91
89
107
150


170
158
166
122

193

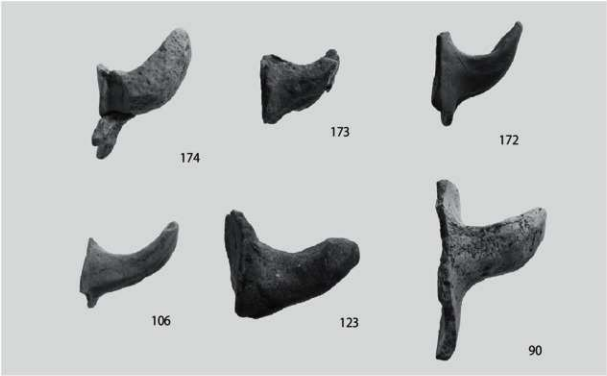
197

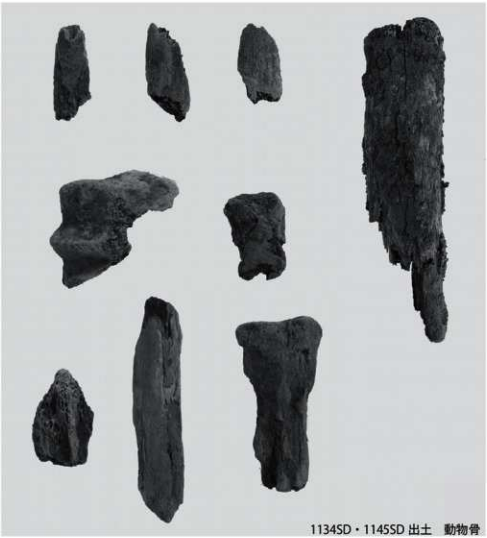
206

198

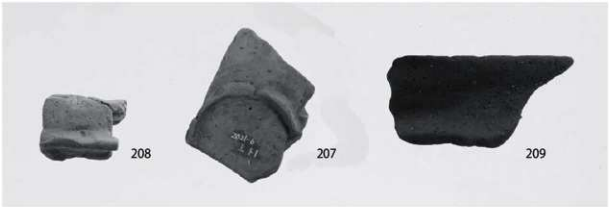
199

200





1134SD・1145SD 出土　動物骨


208
207
209

225

234

237

242

228

253

254

249

267

270

271

272

274

273

277

278

279

282

283

287

288

290

302

314

308

327

324

328

331

332

335

339

340

346

343

347

348

350

353

352

356 361 358

NR20 下層　金銅製品

NR20 下層　種子

371

373

374

380

379

391-1

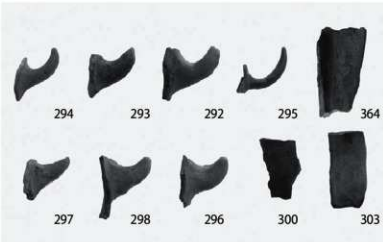
391

376

381

391-2

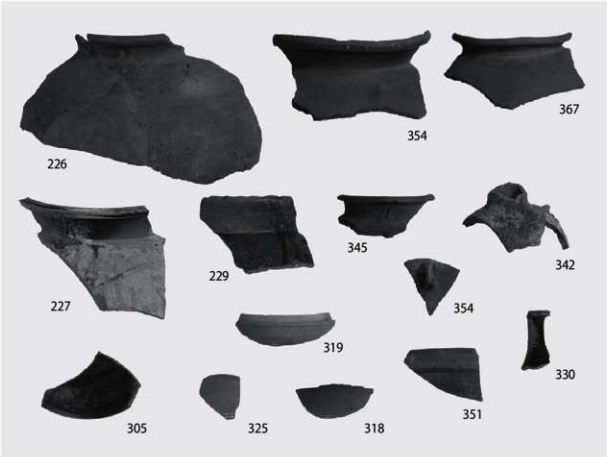
382


294
293
292
295
364
297
298
296
300
303

394

393

363
289
362
370
368
369
366
365
217
221
315
334


226
354
367
227
229
345
342
354
319
330
305
325
318
351

263
259
261
258
265
247
260
257
268
262
264
266
246
245
233
236
250
285
231
235

349
333
336
337
304
341
317
307
323
306
316
313
310
311
309

284
256
281
219
224
276
338
372
312
269
213
244
238
326
220
239
223
222
216
218
215
214

橿原市埋蔵文化財調査報告　第21冊

十市蔵場遺跡

―工場増築工事に伴う発掘調査報告書―

発行年月日　令和6（2024）年3月29日

編集・発行　奈良県橿原市

印　　刷　株式会社明新社

奈良市南京終町3丁目464番地